

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

火野葦平文学研究

平成 31 年 3 月

陳 徳超

目次

序章	5
1. 問題提起	5
2. 研究方法	8
第1章 火野葦平作品論及び作家論の系譜	11
1. 日中戦時下における研究	11
1.1 火野葦平文学に対する批評の出発—「糞尿譚」評	11
1.2 「麦と兵隊」と「土と兵隊」に対する同時代受容	13
2. 戦後における研究の出発	16
2.1 マルクス主義者を中心とする批評—敗戦から1950年代初期まで	16
2.2 60年代から70年代前半までの研究—島田、飛鳥井、田中、安田等	19
3. 「兵隊三部作」への再検討—70年代後半から80年代後半まで	22
4. 現代の研究動向—90年代以降	24
5. 小括	27
第2章 作家以前における火野葦平の庶民観	29
1. 問題の所在	29
2. 沖仲仕時代の光彩	31
3. 上海出張	35
4. 転向問題	39
5. 小括	41
第3章 火野葦平「糞尿譚」に見る魯迅「阿Q正伝」の影	
—彦太郎と阿Qの場合—	43
1. 問題の所在	43
2. 「阿Q正伝」と「糞尿譚」の成立	45

3. 家系に見る両主人公の類似性	47
4. 彦太郎の「精神勝利法」	48
4.1 「今に見て居れ」	49
4.2 酒好き	50
4.3 大爆発	51
5. 彦太郎の「浮気の悲劇」	52
6. 「糞尿譚」の「大団円」	54
7. 小括.....	56
第4章 火野葦平「麦と兵隊」論—戦争文学への一視点—	59
1. 問題の所在.....	59
2. 「異民族」表象	62
3. 作家の主体性	66
4. 「ありのまま」	70
5. 小括.....	75
終章	79
1. 本論のまとめ	79
2. 補足—葦平の「戦後」	84
参考文献	93
初出一覧	99
謝辞	100

凡例

1. 括弧の用法

書名、雑誌名、新聞名は『 』で統一する。

論文名、引用文、作品名、章題は「 」を用いる。

本文中での出典等の注記は（ ）を使って表記する。

引用文中のカギも如上の原則で統一する。

2. 漢字、かな遣い

旧かな遣い、旧字体で発表されたテキストについては原則として現代かな遣い、現行新字体に統一する。人名や作品名などは旧字体のまま用いる場合もある。

3. 引用文

引用文を省略する場合は（…）で統一する。

引用文中の／は原文における改行の意味である。

引用文中の（ ）内に「引用者注」と表記しない場合は原文のままである。

4. その他

本文中の「支那」、「女中」等の表記について、現在の人権意識からすれば、差別等にかかわる不適切な表現であるが、歴史的事実をそのまま伝えるために当時の表記通りに書き進める。

序章

1. 問題提起

広大な中国大陸を炎天下、また極寒の中、時に泥水の中だろうと兵隊はひたむきに進んでいく。派手な戦闘やドラマチックな展開はあまりない。ルポルタージュのように下級の兵隊の人間性に焦点を当てた筆致が特徴だ。¹

ここに引用した新聞記事は、2015年10月19日、『朝日新聞』の「文化・文芸」の欄に掲載された「今こそ火野葦平：兵隊に寄り添い、人間に迫る」という文章の一部である。「兵隊作家」、或いは「庶民作家」といわれる火野葦平²に関する一文である。葦平との出会いは、早くも大連外国語大学大学院日本語言語文学科在籍時に遡ることができる。当時、日中戦争文学に何となく関心を寄せていた筆者は、恩師の叶楯夫³（故人）から、「日中理解は戦場から」という主旨のメールを送ってもらったのを契機に、葦平という存在をはじめて知った。その辺の事情に関しては、同氏は「中国新葦平論の萌芽」⁴という文章で詳しく紹介しているので、ここではこれ以上贅言することを控えておこう。

さて、本研究は火野葦平作品論及び作家論の系譜をたどったうえで、葦平の代表作「糞尿譚」（『文学会議』1937年11月）、「青春の岐路」（『世界』1958年

¹ 「今こそ火野葦平：兵隊に寄り添い、人間に迫る」『朝日新聞』、2015年10月19日朝刊、35面文化文芸/小説。

² 葦平の生年は明治40年（1907年）である。本名は玉井勝則であり、1907年1月、福岡県若松町（当時）の荷役請負業・玉井組の小頭、玉井金五郎と妻マンの長男として生まれている。同年生まれの作家、文芸評論家には、亀井勝一郎、高見順、井上靖、中原中也、平野謙などがいる。夏目漱石の「虞美人草」（『朝日新聞』1907年6—10月）や、田山花袋の「蒲団」（『新小説』1907年9月）などが発表され、雑誌『新思潮』第一次が創刊された年であり、この翌年には社会主義団体の赤旗事件が起きている。彼らは大正デモクラシーの自由な風潮の中で少年期を過ごし、20代前後の多感な時期を昭和という時代の訪れとともに過ごした。その後、軍靴の響きが徐々に大きくなっていき、30歳初めの頃に日中戦争が勃発する。先に名を挙げた作家たちは若死にした中原中也を除き、皆戦中と敗戦直後の動乱期を潜り抜けた。しかし、唯一自らの手でその生を終えたのが、「全く九州人を絵で書いたような人間」（奥野健男『現代文学風土記』、筑摩書房、1968年8月、40頁）と称された葦平だけであった。

³ 歌人、写実短歌誌『年刊まぐのりあ』（まぐのりあ写実短歌会編集）幹事。主な著書に『七八年冬まで：叶楯夫歌集』（宇波百合短歌会、1979年7月）、『中国の土屋文明：『葦菁集』日乗』（北方書林、2003年12月）などがある。

⁴ 叶楯夫「中国新葦平論の萌芽」『河伯洞記念誌 あしへい（第18号）』、花書院、2015年12月、98—99頁。

1—10月)、「魔の河」(『群像』1957年9月)、「麦と兵隊」(『改造』1938年8月)、「革命前後」(中央公論社、1960年1月)、「赤い国の旅人」(朝日新聞社、1955年12月)から、作家の庶民観の行方と彼の戦争認識を明らかにしようとする試みである。「庶民作家」と「兵隊作家」という葦平への呼び方に呼応する作者の庶民観と戦争認識が、葦平研究を下支えする二本の柱となっている。先行研究は、まず葦平が「庶民作家」であるという認識から出発し、それを前提として、作品にある作家の庶民観に関わるものを分析することで、葦平という作家にアプローチしようとしてきた。本論の第1章「火野葦平作品論及び作家論の系譜」では、葦平が書いた作品、及び作家自身に対する論考を詳細に考察する。ここでいくつかの具体例を挙げると、例えば、花田俊典は「火野葦平の文学的遺産」において、「日本人の庶民の土着的な心性を文学的に代表—表象する。この一点を火野葦平は生涯にわたって死守したように見えます。彼は無類の正義派です」⁵と語っている。池田浩士は葦平文学の諸底流を考えた際、その一つが「庶民的人情」⁶であると指摘している。

また、「兵隊作家」とも言われている葦平の文学を論じる際、彼の「兵隊もの」(例えば「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」)は避けて通れないもう一つのジャンルである。発表当初はベストセラーとなったこれらの作品は、日本の敗戦を境に一転し

⁵ 花田俊典「火野葦平の文学的遺産」『火野葦平 I 激動の時代を駆け抜けた作家』、花書院、2003年7月、2頁。葦平には雑誌『小説新潮』の1948年3月号に掲載された「任侠の世界に—我が作品」と題するエッセイの中で、出征前と帰還後、さらに戦後初期の一連の自作について『糞尿譚』の主人公は糞尿汲取業者、『河豚』は、空瓶買いをしているやくざと、沿岸荷役をしているばくち打ち、『山芋』は、貧乏な仏像彫刻師と、気まぐれな放浪者、(…)こう私の作品の人物の戸籍調査をしてみて、私はひとりで微笑がおさえられなくなる。別の人物といえば、変てこりんな河童たち、なんと、下品な下積みの奇妙な人物ばかりではないか。しかし私はこういう人物たちが好きなのだから仕方がない。私はおそらく、死ぬまでブルジョア家庭の贅沢ばなしなどは書かぬかもしれない。／戦争に行っても、私のこういう指向は、いかんともすることができなかった。私は兵隊ばかりを書いたが、将軍や司令官を書きたいと思ったことはなかった。上官というのはほとんど職業軍人であったが、兵隊というのは、召集された庶民、前記の私の作品の雑多な主人公たちが、軍服をまとっているのだった(火野葦平「任侠の世界に—我が作品」『小説新潮 2 (3)』、新潮社、1948年3月、59頁)と述べている一節がある。葦平文学におけるもっとも原基的な一面が窺える告白である。自作の主人公たちを客観的に対象化して顧みる作者のこの述懐は、上述のように葦平を「庶民作家」とする評価と完全に合致している。幼少より培われた下層民への温かい眼差しをもって1960年に自死するまで創作し続けた葦平は、自国で多くの論者や評論家によって、庶民的人情に富んでいる作家、ひたすら庶民の側に身を置き続けた作家として捉えられてきた。そこに葦平の文学的思想の魅力が潜んでいるわけである。地元の北九州で沖仲仕を家業に持ち、「川筋気質」(猪野健治『侠客の条件—吉田磯吉伝』、現代書館、1994年3月、25頁)を生んだ石炭沖仲仕の労働現場に深く根ざした彼は、社会の底辺に生きている人々の輪郭を、各時代の中でくっきりと捉えているのである。

⁶ 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版会、2000年12月、43頁。

てマルクス主義者を中心とする研究者から酷評されるようになる。こうした視座から、現在に至るまで数多くの論者によって論評されているが、その中には、葦平がこの作品を通じて日中戦争に協力した戦争責任があるという論調と、彼はひたすら「民衆」を描くことで反戦思想を告白しながら軍国主義の犠牲者になったという評価が並行しており、両者の間には乖離が見られる。例えば、「兵隊三部作」⁷に描かれている中国人像をめぐる成田龍一⁸と葦平の三男玉井史太郎⁹の対立がその一例である。

それでは、上述の先行研究を踏まえたいうで、ここでいくつかの疑問が生じる。まず一つ目は、「庶民作家」と言われている葦平のその文学における庶民観の原点はどこにあるのか、ということである。1937年9月、葦平は「後に庶民作家とも目されるに至る道筋を伺わせるに十分な作品」¹⁰と言われている「糞尿譚」を発表した。この作品の主人公彦太郎を、池田浩士は「戦前から戦後にいたる火野葦平の諸作品を通読すればだれしも気づくとおり、そこに繰り返し登場するいわゆる庶民的な人物たちの（…）もっとも特徴的な原型」¹¹（傍点は原文のまま）として捉えている。その指摘自体は何の問題もないが、「糞尿譚」を魯迅「阿Q正伝」と比較した視点から把握すれば、葦平はこの「庶民的な人物たちの（…）もっとも特徴的な原型」を造型した際、彼の生い立ちだけではなく、「阿Q正伝」からも多大な影響を受けているのではないか。葦平のほうに「阿Q正伝」を読んだ確かな物証的証拠

⁷ 1937年11月5日に行われた、いわゆる「杭州湾敵前上陸」で葦平は一兵士として初めて中国大陆に第一歩を踏み出す。その後、南京攻略戦に参加し、陥落後の12月17日に行われる「南京入城式」の直後に杭州攻略戦に身を投じ、翌38年4月まで杭州に駐屯している。1938年2月に葦平の小説「糞尿譚」が第6回芥川賞に決定した後、彼は上海の中支那派遣軍報道部へ転属する。そして、最初に1938年5月の徐州会戦への従軍記「麦と兵隊」(『改造』1938年8月)を書いた。発表当初、この作品はたちまち大評判となり、9月19日付で発行された単行本も直ちにベストセラーとなった。その数100万部とも120万部とも言われている。その後、1937年11月に行われた「杭州湾敵前上陸」の実戦記「土と兵隊」を『文藝春秋』(1938年11月)に、そして1937年12月から翌年の4月までの間に杭州城内での警備駐留記「花と兵隊」を『朝日新聞』(1938年12月—1939年6月)に次々と送稿する。この三部作をあわせて、後に評論家たちに「兵隊三部作」と言われるようになる。

⁸ 成田龍一は『戦争はどのように語られてきたか』(朝日新聞社、1999年8月、123頁)において、葦平を「帝国の眼差し」を持っている作家と捉え、特に「他者」を描写する時にそれがはっきりと表れてくるという。

⁹ 玉井史太郎は『河伯洞余滴』(学習研究社、2000年5月、26頁)において、報道部にいろいろな制限を加えられても、葦平は身についた正義感を曇らせることなく、一兵隊としての視点を貫いて、戦場における兵隊たちの姿を、敵味方なく温かく見つめていると述べる。

¹⁰ 鶴島正男「特集 名作の舞台を歩く／火野葦平」『火野葦平とゆかりの人びと』、北九州市芸術文化振興財団(発)、2010年、27頁

¹¹ 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版会、2000年12月、219頁。

は残っていないが、この仮説を論証するため、第 3 章では両作品の主人公である彦太郎と阿 Q について、主に「家系に見る両主人公の類似性」、「彦太郎の『精神勝利法』」、「彦太郎の『浮気の悲劇』」、「『糞尿譚』の『大団円』」の四つの観点から、その類似性の確認作業を行いたい。

次に二つ目は、葦平の庶民観と関連の問題として、戦前、生い立ちからくる下層民への共感が戦時下においてどのような一貫性を保っているのか、またどう変化したのか、その変化の背後にある時代の性格と葦平自身の価値構造（戦争認識）とはどういうつながりを持っているのか、といったものをも、あわせて考察したい。なぜならば、例えば玉井史太郎は「兵隊三部作」における異民族の中国人に対する共感の在り様について、「中国人に対する見方など、『兵隊三部作』を読むと、日本人と変わらないと書いてあります。これは沖仲仕時代に培われたものだと思うのですが、若松には当時朝鮮人の労働者が沢山いました。玉井組も半分近く朝鮮人労働者を使っていました。金五郎（葦平の実父、引用者注）もそういう人たちを差別しちゃいかんと口癖のように言っていました。これが（…）『兵隊三部作』でも貫かれていることです」¹²と言っているのだが、果たしてそうなのだろうか。本論の第 2 章「作家以前における火野葦平の庶民観」と、第 4 章「火野葦平「麦と兵隊」論—戦争文学への一視点—」でこれらの問題を明らかにする。

以上、従来の葦平研究を検討しながら各章の問題提起を行った。次節では、本論の研究方法について考える。

2. 研究方法

本研究では、最初から作家論を目指していくのではなく、あくまでもその作品世界から出発し、研究対象となる一つ一つの作品を明らかにしたうえで、作家の全体像にアプローチしていく。上述した葦平のいくつかの代表作を分析するにあたり、主に客観的なテキスト分析という方法論を取る。それは次の理由からである。吉本隆明「漱石をめぐって—白熱化した自己」によると、作家と作品の関係を如何に捉えるかによって、近代批評の概念には以下の二通りの考え方があるといふ。その一つ

¹² 玉井史太郎『火野葦平とゆかりの人びと』、株式会社ゼンリンブリンテックス、2010年、67頁。

は、作家が様々な生活体験を基にして形成された内在性の世界を、その文学作品の中に投影しており、文学作品を読むとは、作家の内在性の体験が如何に作品の中に込められていくかを考察することだという考え方である。一方、それとは逆に二つ目は作家の実生活と作品とはあまり関係がないという考え方である。原文をそのまま引用すると、つまり「作品というのは作家が言葉でもってつくりあげるものであり、そこにすべてがあるわけだから、作家の内面がどうだこうだと言うのはまったくおかしいことで、作品はそのなかに言葉の生態をもつだけだ、作者の内面とはかかわりのない外在性の世界だ」¹³ということである。本論でいう客観的なテキスト分析というのは、後者のように作家がどのような内面を抱いているかという前提をまず研究の視野から一旦切り離して、作品そのものを研究するところから始める方法論である。

しかし、総じて言えば葦平文学が自伝的傾向を持っているため、従来の作品論のみを用いてその文学世界に近づこうとするには非常に大きな限界があると言わざるを得ない。その限界を乗り越えるため、本論では必要に応じて作者の主観を視野に入れて考えたり、実証的な歴史研究を積極的に援用して葦平の「兵隊三部作」を分析する場合がある。のみならず、場合によっては葦平文学と影響関係を持っていると考えられる他の作家の作品との比較研究（第3章「火野葦平『糞尿譚』に見る鲁迅『阿Q正伝』の影一彦太郎と阿Qの場合」）を行ったり、或いは筆者の母国では中国人研究者の意識する否定的評価、及びその方法論的な縛りから逸するため、「葦平」発生の地・若松を訪ね河伯洞^{かはくどう}で彼の遺族への直接取材に踏み込んだりもする。これにより、葦平という作家の個性と創作方法の独自性をより立体的にあぶり出し、葦平文学に対する新しい見方を少しでも提示することができたら幸いである。

最後に本研究で扱っている作品は、『火野葦平選集』（全8巻、東京創元社、1958—59年）に収録されているものを用いる。基礎的な先行研究としては、池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』（インパクト出版会、2000年）を用いたほか、田中艸太郎『火野葦平論』（五月書房、1971年）、安田武『戦争文学論』（勁草書房、1964年）、神子島健『戦場へ征く、戦場から還る—火野葦平、

¹³ 吉本隆明『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月、22—23頁

石川達三、榊山潤の描いた兵士たち』（新曜社、2012年）、矢富巖夫『火野葦平著作目録』（創言社、2004年）などに負うところが大きい¹⁴。

以下、各論を積み重ねていくことにしよう。

¹⁴ ここに列挙した各先行研究はいずれも、葦平を研究するうえで見過ごすことのできないもつとも基本的なものである。例えば、松岡昭彦は「跋・しっかりと火野文学を掴んだ矢富さん」という短文の中で、池田浩士の『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』と矢富巖夫の『火野葦平著作目録』に言及し、二作とも「第一級にあたる資料と賞賛されている」（矢富巖夫『火野葦平著作目録』、創言社、2004年12月、281頁）と記している。なお、各先行研究からの直接引用については各章の脚注を参照。

第1章 火野葦平作品論及び作家論の系譜

火野葦平文学、その中でも取り分け日中戦争に取材したいいわゆる戦争文学に対して、戦時中から現在までの間にさまざまな視点からのアプローチがなされてきた。それは、今日まで目立たぬながら着実な論議が積み重ねられてきたこと、また、葦平の書いたものが読者の関心をなお強く持たせ続けていることを物語っているであろう。作家への批評、或いは作品の読み方は時代と共に変わっていく。作家が創作する際に意識するか否かにかかわらずその時代の刻印を作品の中に打たないわけにはいかないのだが、それと同じように、読み手もまた己の生きている時代とその状況に立ち向かう中で作品の意味を見出そうとするからである。とすると、研究史とは唯一の正しい作品把握に至るための過程であるのではなく、各時代の性格に基づいた固有の解釈の連続体以外にはあり得ない。村上林造が言っているように、「研究史論の試みが、個々の作品解釈の背後にそれを生んだ時代を発見することに他ならないとすれば、まず、その作品と時代に対する自分の解釈にこだわることの中にしか、その道はあり得ない」¹。

本章では、このような問題意識に基づいて葦平が書いた作品、及び作家自身の論考を時系列的に考察する。本章で用いるのは、葦平文学においてもっとも代表的な作品である「糞尿譚」や「兵隊三部作」などに対する論考、及び序章で言及した、葦平を研究するうえで見過ごすことのできない基本的な先行研究である。これにより、時代と共に変化していく葦平作品の読まれ方の様子を素描し、あわせて近代日本の精神史の一端を読み取ることが、本章のモチーフである。

1. 日中戦時下における研究

1.1 火野葦平文学に対する批評の出発—「糞尿譚」評

「糞尿譚」は1937年11月18日に同人誌『文学会議』第4号に発表された作品である。同作は鶴田知也の紹介によって第6回芥川賞の候補となった後、見事受賞を果たし、翌38年に『文藝春秋』3月号に転載される。葦平の文壇デビュー作であ

¹ 村上林造『『土』論の系譜—近代日本精神史の一側面として』『あしかび(33)』、太陽社、1987年12月、1頁。

ると同時に、彼が文壇の諸先輩から批評を受けた最初の作品でもある。

例えば、川端康成は「芥川龍之介賞経緯」において、「(…)大早の雲霓を望むが如くで、その多少の欠陥は二の次とし、先ず喜んで『糞尿譚』を推した」²と述べ、或いは室生犀星は同じ選評で、「『糞尿譚』を読んだが特に未来の文学をひからせるものでもなく、亦、逞しさや旺盛さもない、凡作のちょっと上くらいのところである」³と、「糞尿譚」を否定的に評価している。

両氏の評が代表するように、葦平のこのデビュー作が、最初は芥川賞の選考委員たちの間では決して高い評判を得たわけではない。しかし、「糞尿譚」が公にされた時点で、この30歳初頭の新進作家はすでに出征して戦場にいる。これは「糞尿譚」が芥川賞を受賞したもっとも大きな要因だと思われる。なぜなら、商魂逞しい菊池寛には、次のような評があるのである。

作品も、題は汚らしいが、手法雄健でしかも割合に味が細かく、一脈の哀感を蔵し、整然たる描写と言ひ、立派なものである。しかも、作者が出征中であるなどは、興行価値百パーセントで、近来やや精彩を缺いでいた芥川賞の単調を救い得て充分であった。(…)自分は、真の戦争文学乃至戦場文学は、実戦の士でなければ書けないという持論であるが、火野君の如き精力絶倫の新進作家が、中支の戦場を馳駆していることは、会心の事で、我々は火野君から、的確に新しい戦場文学を期待してもいいのではないかと思う。⁴

ここで注目すべきは、菊池がすでに作者の出征中に気づいているという点である。もちろん、作者が出征して戦地にいることは、作品の優劣とは関係ないが、盧溝橋事件後におけるメディアと当局の「蜜月関係」⁵をあわせて考えると、それは雑誌社にとっては非常に望ましいことであろう。

² 「芥川龍之介賞経緯」『文藝春秋 16 (4)』、文藝春秋社、1938年3月、355頁。

³ 「芥川龍之介賞経緯」『文藝春秋 16 (4)』、文藝春秋社、1938年3月、356頁。

⁴ 菊池寛「話の屑籠」『文藝春秋 16 (4)』、文藝春秋社、1938年3月、319頁。

⁵ 神子島健『戦場へ征く、戦場から還る—火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士たち—』(新曜社、2012年8月、133—146頁)によると、盧溝橋事件の勃発によって新たな読者層が雑誌を購入する機会が増え、1937年後半から38年にかけて出版界は好況に突入し、それに乗じて各メディアは政権への協力を表明し、戦時色の強い増刊号を度々出していく。一方、戦争におけるメディアが果たした役割の大きさは、いう

このように、「糞尿譚」による芥川賞受賞を端緒としながら、その出征中という条件が起爆剤となる形で、「戦地にいる文学者」としての葦平がメディアの期待の渦中に巻き込まれ、後に一躍「時代の寵児」となる。

1.2 「麦と兵隊」と「土と兵隊」に対する同時代受容

1937年7月7日の盧溝橋事件を契機にルポルタージュ文学が盛んになり、数多くの従軍作家、いわゆる「ペン部隊」が戦場の中国大陸に次々と赴き、「戦争」に対する新たな表象の方法が文壇のトピックともなっていく。このような背景の中、1938年4月末、第6回芥川賞をきっかけに、葦平は中支那派遣軍報道部へ転属する。同年8月、受賞後第一作「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）が上梓され、たちまち大評判となる。後に改造社から刊行された単行本だけでも100万部以上の版を重ねたという。今当時の夥しい「麦と兵隊」評に目を通してみると、この作品が多くの人々の共感を得、絶賛を博した理由はおおよそ次のようである。

その一つは、まさに「戦地にいる文学者」でしか描破できない現実感、臨場感といったものである。それを三好達治は「麦と兵隊の感想」（『文藝』1938年9月）で、葦平の文学的資質などを褒め称えたいうで、「この文学者火野葦平が同時に忠勇果敢な玉井勝則伍長であること」⁶に注目し、「新聞記事にも、ラジオ・ニュースにも、映画ニュースにも欠けたものを、そして臨時の我々従軍記者達にも企て及ばなかったものを、ついに見事に我々の手許にまで送り届けてくれた」⁷と述べている。

もう一つは、今日出海が「戦争と文学（麦と兵隊）」で言っているように、読者は作者の「人間的誠実」等とその紙背に感じ取り、そこに心打たれたということであろう。

これ（「麦と兵隊」、引用者注）は徐州攻略戦の隠れた文献でもあろう。或は

までもないほど一般的に意識される問題となっている。事変後まもなく、近衛文麿首相は新聞、雑誌社などの代表たちを官邸に招いて政府への協力を要請する。そして、これらの大衆メディアを戦時体制下に編入するため、当局は「出版法」と「新聞紙法」の二つの法律に根拠を持たせ、出版物の統制及び検閲制度をより一層強化する。このように、メディアと政権とが結託して甘い汁を吸っている最中、1937年、葦平の「糞尿譚」が発表されたのである。

⁶ 三好達治『三好達治全集第六巻』、筑摩書房、1965年10月、65頁。

⁷ 三好達治『三好達治全集第六巻』、筑摩書房、1965年10月、66頁。

皇軍の赫々たる威武と称せられる言葉の裏に潜む精鋭の真実の苦闘記であろう。然し文献的価値と教訓的価値を離れて、この記録は真実と誠実に満ちた文学である。孫圩の戦闘で筆者は生死の間を彷徨しつつなお筆を取っている。死をまざまざと凝視しつつ、なお死にたくないと言っている。この状態に曝されて人は誇張することも、嘘を言うことも出来ぬのだ。慄然とするほど厳粛なものに取巻かれ、自らも厳粛になって真実を吐露する。この種の記録の得難き所以である。⁸

更に、三好の見解に関連するが、発表直後から戦争文学としての評価も高い。例えば、貴司山治の「戦争と文学者—『麦と兵隊』の意義（下）」における「この二つの戦争小説（「麦と兵隊」と上田広の「鮑慶郷」、引用者注）は、出征中の兵士自身が戦線において創作したものであるという点で、それ以前の従軍作家のすべての戦争文学を葬った。（…）この作品（「麦と兵隊」、引用者注）は未だ素材的でありすぎるがその過剰な素材の中から芸術の感覚によって照らし出されている戦争の姿には『西部戦線異状なし』などとは比べ物にならない鮮鋭な真の世界が露出している」⁹という評判はその一例である。

以上、非常に大雑把ながら「麦と兵隊」に対する同時代評を検証した。「麦と兵隊」だけではなく、同じような論評はその次に発表された「土と兵隊」（『文藝春秋』1938年11月）にも及んでいる。例えば、森山啓は、「文藝時評（二）『土と兵隊』と純文学」（『国民新聞』1938年10月30日）で、「人が、民族感情の中における『ヒューマニズム』『兵隊の人情』と呼んでいるところのものが、この作品の体験記録性と共に文学上の特色をなしている」¹⁰としたうえで、更に「土と兵隊」が国民に広く読まれている理由の一つは「兵隊の魂」によると指摘している。

日本の極平凡な質実な国民（わけて農民達）の誰でもがもつような魂、そしてかれらが兵隊として戦場へ行けば、立野信之氏のようなざっくばらんな従軍記者

⁸ 今日出海「戦争と文学（麦と兵隊）」『新潮（408）』、新潮社、1938年9月、32頁。

⁹ 『読売新聞』、1938年8月3日夕刊、4頁。松本和也「事変下メディアのなかの火野葦平—芥川賞『糞尿譚』からベストセラー『麦と兵隊』へ」（『インテリジェンス（6）』、文生書院、2005年11月、84—85頁）も参照している。

¹⁰ 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇Ⅰ（第十五巻 昭和一三年）』、ゆまに書房、2007年10月、437頁。

にも煙草一本ねだらず（前出）将兵間には肅然たる軍紀と質朴な愛情があり、それが改めてどの文筆家にも感銘を与えているというそういう兵隊の魂、それと矛盾しない作家としての魂が、非常に親しいものとして多くの国民に訴えている。それが、事変以来の沢山の従軍文学のなかで、この作者（火野葦平、引用者注）の記録文学が特に多く読まれた理由の一つではなかろうか。¹¹

また、「土と兵隊」を「麦と兵隊」と対比しつつ、葦平の創作事情に即して前者のよさを書き手の当事者性に求めているのは、「我流文藝観 十一月の巻一昭和十三年一（1、火野葦平の『土と兵隊』）」の宇野浩二で、次のように評価している。

「糞尿譚」は褒貶相半ばしたけれど、「麦と兵隊」は圧倒的に好評であった。恐らく今度の「土と兵隊」は「麦と兵隊」以上に好評かも知れない。それは、一口にいうと、「麦と兵隊」は中に切迫詰まった場面が十分に書かれてはいるが、筆者の立ち場が軍報道部員であり、「土と兵隊」では、筆者が一人の兵隊となっているので、読む者に戦争其のものの実感が生々しく迫っているからであろう。¹²

一方、森山や宇野とは別に、伊藤整¹³や板垣直子¹⁴などは「土と兵隊」の芸術性に言及し、北岡史郎「文壇時評 十一月の創作」（『若草』1938年12月）には、

¹¹ 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇 I（第十五巻 昭和一三年）』、ゆまに書房、2007年10月、437頁。また、森山啓は「文藝時評（一）立野信之の『廬山血戦』」（『国民新聞』1938年10月29日）の中で、「廬山血戦」における「兵隊の素朴な礼儀正しさ」と、将校兵卒間の「人情美談の真実性」などに注目し、「兵隊達は立野氏のような気のおけぬ従軍記者に、タバコ一本ねだらない。しかし新聞やタバコを貰った兵達は、その後道で会っても別れにのぞんでも、素朴な礼儀正しさで心から感謝をのべている。（…）これが『日本軍の強さ』の根源だと感ずる作家の心が率直な熱情として感じられる」（同書、436頁）と述べている。

¹² 宇野浩二『文藝三昧』、筑摩書房、1940年6月、194—195頁。なお、「麦と兵隊」は周知のように徐州作戦従軍記である。この作戦に際して葦平はすでに中支那派遣軍報道部へ転属し、兵士でありながら直接戦闘には加わっていない。「杭州湾敵前上陸」の実戦記である「土と兵隊」と比べて、どこか傍観的な冷静さを感じさせる所以である。

¹³ 伊藤整は「文藝時評（一）文学の持つ力 『土と兵隊』の感銘」（『信濃毎日新聞』1938年11月3日）において、「なぜこの人（火野葦平、引用者注）の書いたものだけが特に美しい強烈な印象を我々に与えるのか。それは文学だ。実に私はこの記録的な手紙の集まりに外ならない一作品において、文学の恐るべき力に驚嘆したのだ」（『文藝時評大系 昭和篇 I（第十五巻 昭和十三年）』、ゆまに書房、2007年10月、463頁）と述べている。

¹⁴ 板垣直子は「一九三八年の文学—文学時評—」（『文藝』1938年12月）において、「火野氏の余りにも有名な徐州大会戦を記録した『麦と兵隊』及び杭州湾敵前上陸を描いた『土と兵隊』は、恐らく多くは現れ

「土と兵隊」などを文学領域にとどまらない社会的意義として意味づけていく言表が見られる。

欧州大戦の戦争文学には、反戦思想にならざるを得ない「絶望」が人々を支配していたのだが、これらの戦争文学（「土と兵隊」や、上田広の「黄塵」など）にはその「絶望」というものがない、むしろ、漠然とはしていても、しかし、東亜の新しい秩序と平和とを再建するという一つの大きな理想に心からつながっており、戦争そのものは厭うべきものでも、そこから戦争というものを肯定し、大きなものの創造の土台たらしめようとする不拔の意思が根底に腰を据えている。¹⁵

「麦と兵隊」や「土と兵隊」といった葦平の戦争文学に対する同時代の論考は、他にも散見されるが¹⁶、論者たちの立論の角度が必ずしも同一ではなかったにせよ、いずれにしても戦時下という特殊な時代背景の中で、彼らの多くは冷静な目を持ってこれらの作品に向かうことが困難であり、軍の子飼いの報道班員である葦平の「兵隊もの」に対して、読者のほとんどが絶賛の姿勢を示しているのである。

2. 戦後における研究の出発

2.1 マルクス主義者を中心とする批評—敗戦から 1950 年代初期まで

けれども、葦平作品への絶賛や激賞は、日本の敗戦を境に侮蔑になり罵声と変わる。その辺の作業は、すでに『近代文学 6 昭和文学の実質』に収録されている都築久義の「『麦と兵隊』の文学性」¹⁷で十分に果たされているとも思われるのだが、私なりのイメージを得るための中間的な学習の結果として、この一節を位置づけておく次第である。

1945 年 10 月、獄中にいた共産主義者たちが喝采を浴びながら世に出てくること

えまい程の芸術性を具え、非常に優れた戦争文学であることを立証した」（『文藝時評大系 昭和篇 I（第十五卷 昭和十三年）』、ゆまに書房、2007 年 10 月、504—505 頁）と言っている。

¹⁵ 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇 I（第十五卷 昭和十三年）』、ゆまに書房、2007 年 10 月、518 頁。

¹⁶ 詳細は星加輝光「火野葦平『麦と兵隊』に対する同時代批評の考察」（『あしへい（第 3 号）』、創言社、2001 年 12 月、83—100 頁）や、松本和也「火野葦平『土と兵隊』の同時代的意義—日中戦争期における文学（者）の位置」（『立教大学日本文学（第 115 巻）』、2016 年 1 月、143—156 頁）などを参照のこと。

¹⁷ 都築久義「『麦と兵隊』の文学性」『近代文学 6 昭和文学の実質』、有斐閣、1977 年 10 月、203—204 頁。

に象徴されるように、社会の論調が大きく変化していく。その年の暮れ、「帝国主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者のみ」¹⁸を入会の条件とする新日本文学会が、宮本百合子や中野重治ら旧プロレタリア文学者を主体に結成される。翌3月、その東京支部は創立大会で、「文学における戦争責任の追求」¹⁹という宣言を可決し、葦平を「侵略賛美のメガホンと化して恥じなかった」²⁰者の一人として糾弾する。

かつて「最高の立派な戦争文学」²¹（前掲北岡史郎「文壇時評 十一月の創作」）や「事変の送った傑作の第一線におかれるべき作品」²²などと評価されていたものが、岩上順一の「敗北への昭和文学史」では、「我々の前には、火野葦平の『麦と兵隊』、『土と兵隊』、『花と兵隊』より発する侵略戦争文学が存在する」²³と急落したのである。

葦平自身も、1959年に出版された選集の第四巻の解説に、「戦後の花形となった共産党の『アカハタ』は文化戦犯第一号に、私の名をかかげ、私の周りは敵ばかりになった」²⁴と綴っている。とにかく、小松伸六が「戦争文学の展望」で言っているように、「八・一五敗戦革命以前の十年代の戦争文学は完全にゼロの文学」²⁵といった論調が敗戦直後に文壇の支配的風潮だったとすれば、葦平を文学作品の内部から論じることなく放逐してしまったのも当然であり、異論の余地はないが、このような文壇の風潮や断罪の仕方にさすがに違和感を覚え、懐疑の念を抱いた平野謙や中野重治などの論評も無視できまい。

1946年春、文芸評論家の平野謙は「ひとつの反措定」（『新生活』1946年4-5月）という文章で、「小林多喜二と火野葦平とを表裏一体と眺め得るような成熟し

¹⁸ 岩上順一記「新日本文学会創立大会の報告」『新日本文学』（創刊号）、新日本文学会、1946年3月、62頁。

¹⁹ 小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」『新日本文学』、新日本文学会、1946年6月、64—65頁。

²⁰ 小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」『新日本文学』、新日本文学会、1946年6月、65頁。

²¹ 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇Ⅰ（第十五巻 昭和十三年）』、ゆまに書房、2007年10月、518頁。

²² 板垣直子は『現代日本の戦争文学』（六興商会出版部、1943年5月、84—85頁）において、「芸術性と社会性の大きさとが一致した」ことから、「事変の送った傑作の第一線におかれるべき作品は、何といても、火野葦平の『麦と兵隊』（一九三八年七月、改造）と『土と兵隊』（一九三八年一〇月、文藝春秋）及び、小川真吉の『隻手に生きる』（一九四一年八月発行、六興商会出版部）などであろう」と述べている。

²³ 岩上順一『人間の確立』、万里閣、1947年1月、207頁。

²⁴ 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、428頁。

²⁵ 荒正人編『昭和文学十二講』、改造社、1950年12月、190頁。

た文学的肉眼こそ、混沌たる現在の文学界には必要なのだ²⁶と唱え、葦平を弁護しようとしている。「文学者の戦争責任というテーマとマルクス主義文学運動の功罪並びにその転向問題とは、ほとんど不可分のもの」²⁷だと信じている平野は、そうすることで、昭和の20年間の文学の特質、つまり、「政治と文学」の関係を回転軸とした文学の特質が明らかにされることを語っている。

また、1952年4月、河出書房の『現代日本小説大系第五十九巻』が、昭和10年代の戦争小説を集めて出版された。その中に収録されているのは丹羽文雄「海戦」（『中央公論』1942年11月）、石川達三「生きている兵隊」（『中央公論』1938年3月、発禁）、火野葦平「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）、上田広「黄塵」（『文藝首都』1938年1—9月）、日比野士朗「呉淞クリーク」（『中央公論』1939年2月）の五篇である。中野重治はこれらの作品に対して批判を加えながらも、そこに至った成り行きにある程度の理解を示す解説を書いている。例えば、葦平の「麦と兵隊」と上田広の「黄塵」を論じる時、中野は二作とも「人間らしい心と非人間的な戦争の現実とを何とかして調和させたいという作者の心持ちによってつらぬかれている」²⁸と指摘して上田と葦平とに同情を寄せる。また中野の次のような発言から、共産主義運動へ接近している時期の葦平に対する中野の微妙なシンパシーが読み取れるのは確かであろう。

火野は決して、何かはじめから民族主義を「奉じて」いたというものではない。
(…) それ相応に民主的立場に立っていたものであり、その基本調で文学の道にすでに入りつつあったものである。(…) 「左翼劇場」が九州へ巡業に行き、土地の右翼暴力団の襲撃を受けた時、火野は挺身して劇団を保護して戦ったのである。²⁹

中野はこの論の総括として、「日本的人情主義」³⁰による自己合理化の虚偽など

²⁶ 平野謙その他『昭和文学全集第17巻』、小学館、1989年7月、264頁。

²⁷ 平野謙その他『昭和文学全集第17巻』、小学館、1989年7月、263頁。

²⁸ 中野重治編『現代日本小説体系59』、河出書房、1952年4月、319頁。

²⁹ 中野重治編『現代日本小説体系59』、河出書房、1952年4月、321—322頁。

³⁰ 中野重治編『現代日本小説体系59』、河出書房、1952年4月、323頁。

に言及しているが、戦後の左翼陣営の中では、最も温かい理解を示しているというべきであろう。

ついでに、前述の小林と葦平の表裏一体説、すなわち共に「一個の時代の犠牲」³¹説に端を発し、敗戦直後にいわゆる「荒・平野のコンビ」（荒正人と平野謙）と中野重治の間に「政治と文学」³²論争が白熱的に交わされ、その渦中で文学者の戦争責任論にある種の変質が生じていく。以後、旧ナツ派による戦争責任追及の仕方が問い詰められ、「文学者の自己内心の問題たる戦争責任」³³が注目されるようになる。その流れの影響で、後に出現した島田厚の「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」（『文学』1960年8月）や、安田武の「戦争文学の周辺—火野葦平—」（『文学』1962年12月）、更に田中艸太郎の『火野葦平論』（五月書房、1971年9月）などのような優れた実証的研究が、葦平の戦争責任をめぐって全く新しい角度からの照明を投げかけている。

2.2 60年代から70年代前半までの研究—島田、飛鳥井、田中、安田等

1960年代に入ると日本は本格的に高度経済成長期へと突入する。社会は未曾有の繁栄を迎え、それに伴って、新しく出現した大衆社会状況の中でマルクス主義の立場からの研究が展望を見失い、退潮に追い込まれていく。その代りに、戦争期の体験を、文学者がどのように咀嚼して自己の内部の問題としながら戦後を歩んできたか、そしてその戦争期の内部的体験を戦後10年余りの間に如何にして彼らの文学的実践の問題としてきたか、ということが人々の注目の的となる。このような傾向を60年代初頭において早くも示していたのは島田厚である。

島田は葦平が自死する1960年³⁴、8・15直後における民主陣営のラジカルな戦争責任追及に潜む問題性を指摘しつつ新たな一步を踏み出す。彼は、「悲しき兵隊」や「革命前後」といった葦平の戦後の作品を手がかりに、葦平は8・15をどのようにまたいだのか、に焦点を絞って論を展開し、最後に次のような結論に辿り着く。

³¹ 平野謙その他『昭和文学全集第17巻』、小学館、1989年7月、264頁。

³² 本多秋五「『政治と文学』論争」『中野重治研究』、筑摩書房、1960年9月、260—268頁。

³³ 三好行雄・竹盛天雄編『近代文学7 戦後の文学』、有斐閣、1977年7月、35頁。

³⁴ 1960年1月24日、葦平は、北九州若松の自宅で絶命した。当時、心筋梗塞による急死であったというが、1972年、遺族により、死は覚悟の上の睡眠薬自殺と発表され、「ヘルス・メモ」に記した遺書が公表された。

「革命前後」を読んだ読者は、作者が戦争責任を大いに自己批判しているかに見えながら、実は、それは極めて不明確に終わっていることに不審の念を感じたことだろう。(…)八月十五日、自室に鍵をかけ、助広の軍刀で自害を思い迷った火野が、その日以来、共産党に戦犯文化人第一号に指名されながら、深い責任を感じ続けてきたものは、戦争責任ではなくして、敗戦責任だったのだ。³⁵

島田はこのように述べ、更に「もともと火野は、戦争責任について関知しようとしなかったのだ」³⁶と主張するが、後にこの論調に反対するような声が出てくる。例えば、飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」には、「彼は彼なりの自己批判を『革命前後』において行った。火野の精いっぱい努力は、確かにその時完結したのである」³⁷という論評がある。

更に、1971年、田中艸太郎は「革命前後」を論ずる時、戦争体験の思想化の欠如³⁸とする安田武の読み方に反し、「『革命前後』は戦争責任の全的肯定と、兵隊にシンボルされる庶民の悲しみの代弁を二本の柱とする自裁の文学、告白の文学、事実の文学である」³⁹と言っている。要するに、飛鳥井や田中などによって、葦平は自らの戦争責任を誠実に自省したという評価が下されているのである。「革命前後」は、葦平の敗戦前後の体験を、ほぼ忠実に再現してみせたものであり、葦平が「嘘をつくまいと考えて、身体をぶっつけるよう」⁴⁰記した自伝的作品であるが、自らの心情を素直に吐露すること＝真剣かつ誠実な自己批判なのかは、如上のように議論の焦点となっている所以である。

ところで、この時期におけるもう一つのサンプルとして、先ほども触れた安田武の「戦争文学の周辺—火野葦平論—」がある。金子光晴は、戦場の混乱と兵士たちの苦痛を己の利欲のための絶好の機会とする日本民衆の薄汚れた、いぎたない顔を

³⁵ 島田厚「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」『文学 28 (8)』、岩波書店、1960年8月、822頁。

³⁶ 島田厚「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」『文学 28 (8)』、岩波書店、1960年8月、822頁。

³⁷ 飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」『文学理論の研究』、岩波書店、1967年12月、181頁。

³⁸ 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、202頁。

³⁹ 田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月、184頁。

⁴⁰ 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、287頁。

見続けているが、それとは別に葦平は、死を賭した戦場の苦痛に、何でもないように処している民衆（兵隊）のもう一つの顔だけをしか信じていない。しかしながら、それは決して別々の二つの顔ではなく、「一つの顔の二つの表情に過ぎない」⁴¹と主張している安田は、その後次のように述べている。

「兵隊」とは、火野が「頑迷に」信じようとしていた、あの民衆の中の「もう一つの顔」である。「もう一つの表情」である。それは、例えば、軍人勅諭をタテマエとした硬直した「軍人精神」を、タテマエとしては素直に受け取りながら、しかも、単なるタテマエとしてではなく、それぞれの生活実感と経験を通して、それなりに自分のチエとしている兵たちの素朴な英知—その生の営み、生き方自体への共感である。⁴²

庶民のもつ二面ではなく、もっぱら一面のみを見つめている葦平のこの人間的資性、或いは浅見淵の言葉で言えば「庶民的善意」⁴³こそ、彼の文学における「もっとも良質な部分」⁴⁴であることを指摘した安田のこの論が、これまでに公にされた凡百の葦平論のうちで最も優れたものの一つと思われている。作者の心情に深く分け入って共感的に書かれたものであろうが、全体として見る時、あまりにも葦平＝庶民べったりであり、飛鳥井雅道が疑問を呈しているように、「日本の庶民として現象したプロレタリアートたちが、なぜ帝国主義侵略戦争の中で万々歳を叫んだか」⁴⁵についての切込みが見られない。

その上に、「糞尿譚」に見る糞尿汲取人と塵芥処理業者たちとの「同質的な内部の敵との抗争」⁴⁶、というような関係構造は、出征前と帰還後の葦平のいわゆる庶民的な諸作品の多くを貫く基本的な構造をなしている。ただし、このような内部の敵、近い敵との抗争という設定を作品に与えることができなかつた表現領域が、ほ

⁴¹ 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、163頁。

⁴² 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、177頁。

⁴³ 丹羽文雄・火野葦平『日本現代文学全集87』、講談社、1962年4月、462頁。

⁴⁴ 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、166頁。

⁴⁵ 飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」『文学理論の研究』、岩波書店、1967年12月、171頁。

⁴⁶ 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版社、2000年12月、228頁。

かならぬ「兵隊もの」なのである⁴⁷。そういった本質的に重要なものを、安田はついに見落としてしまったのである。

3. 「兵隊三部作」への再検討—70年代後半から80年代後半まで

戦後日本の経済と社会にとって、1970年代は激動の時代であった。社会の様々な面に高度経済成長期の矛盾が現れ、社会情勢にもはっきりした変化をもたらされる。経済的な面で言えば20年近く続いてきた高度経済成長の劇的な終焉であり、社会的な面で言えば環境破壊と公害問題のクローズアップである。更に国民意識の保守化を背景に、80年代に入って中曽根政権は「戦後政治の総決算」⁴⁸を高唱し、戦後民主主義の空洞化を推し進める。国民の間にはようやく戦後の物質的繁栄に疑問を投げかけようとする動きが広がりつつあり、民主主義の脆弱性や経済至上主義などの問題が、改めてその起源にさかのぼって根本から問われている。

70年代半ば以降における研究傾向、即ち「兵隊三部作」への再検討の動きは、このような時代状況を反映して展開されていくことになるが、その立脚点は当面する現実への批判に裏付けられた近代文明への危機意識と反近代の姿勢だと思われる⁴⁹。ここでは、文学による戦争協力の実態、及び兵士たちの戦場での殺戮や略奪といった野蛮な行為は再び強調され、具体例として、まず安永武人の評論や吉田熙生の覚書⁵⁰などが挙げられる。

これより安永の「火野葦平『麦と兵隊』」⁵¹を検討するが、戦時中はもちろんのこと、戦後においてもその状況の変化につれて、「兵隊三部作」を肯定的に評価する論者が続々と出てくる。1954年、井伏鱒二は『昭和文学全集 46』の解説で、「悠々と人間味の追及が行われている」⁵²と言い、1965年、吉田精一は『現代日本文学史』で「麦と兵隊」を「戦争のうちに人間的なものを追究しようとするヒュー

⁴⁷ 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版社、2000年12月、228頁。

⁴⁸ 歴史学研究会編『日本 同時代史5 転換期の世界と日本』、青木書店、1991年1月、134頁。

⁴⁹ 高橋三郎『『戦記もの』を読む—戦争体験と戦後日本社会』(アカデミア出版会、1988年2月、167—168頁)によると、「戦記もの」は戦後社会への暗黙の批判という意味を持っているのである。

⁵⁰ 吉田熙生「戦争文学の思想—石川達三『生きている兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』など—」『国文学 解釈と教材の研究 20 (9)』、学灯社、1975年7月、156—161頁。

⁵¹ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、7—36頁。

⁵² 丹羽文雄・火野葦平『昭和文学全集 46』、角川書店、1954年10月、395頁。

マニズムが流れていて、以後続出した戦争文学中の圧巻となっています」⁵³とまで評している。

けれども、安永はこの種の読み方を「作品の部分的な一側面をもって、あたかも全体の本質的な特徴であるかのような印象を与える解説」⁵⁴として批判し、戦時下に「麦と兵隊」と「土と兵隊」で削除されている、日本軍による中国人捕虜の殺害場面をめぐる、自らの論を次の如く展開する。

(…) そのように日本軍の残虐行為を描いていることをもって、直ちに反戦思想や侵略戦争への批判を表現しようとしたとみるのは早計である。彼の「兵隊三部作」ばかりでなく、戦場に取材したほかの全作品の内容や、彼自身、日本軍部の戦争目的を明確につかんでいなかった点などから考えると、むしろ、そういう残虐場面の描写は模範的兵隊であり、古武士的人情に富む彼が、彼の中に成立している美化された観念的な「皇軍」—「壮大なる戦争」を戦う天皇の神聖で偉大な軍隊にあるまじき行為として反発し批判したのだとみななければ、作品の一貫性が失われる。⁵⁵

このように極めて独創的な見解を見せた安永は、続いて二作品から、軍隊の階級秩序を超えた「家族主義的な心情への『陶醉』」⁵⁶や、中国の民衆に対する「優越的な民族意識」⁵⁷などのようなものを読み取り、昭和 10 年代における文学と政治との「共犯関係」、及び文学の不毛性といった問題意識を再度提起している。この姿勢自体は、敗戦直後における旧ナツプを中心とする批判のそれとはあまり変わらないが、作品世界の「現実」を積極的に把握することによって、その有罪性を告発しようとしているところに本質的な違いが見られよう。

同根の評論家には、ほかに前田角蔵と西垣勤もいる。前田はその論の中で、日中戦争期における葦平悲劇のもっとも根本的な原因は、「火野葦平が、作家であるこ

⁵³ 吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、1965年10月、155頁。

⁵⁴ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、9頁。

⁵⁵ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、17頁。

⁵⁶ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、21頁。

⁵⁷ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、25頁。

と自体の有罪性を自覚することなく、従って権力との無批判、無媒介な共犯、加担を事前に歯止めする論理と倫理を内部に欠いたまま戦中期を生き通してしまったところにあった」⁵⁸と度々指摘している。また、西垣評論の最後に、上述の安永の主張がそのまま繰り返されているようにも見える。

火野の最後の人間的なとりでともいうべき、否定すべき捕虜の虐殺について、曖昧な表現に終始し、最後に、他の軍人はどうであれ、自分は手を下さないし、目を逸らしたから人間的だという所に立ち至り、他方、軍隊内部の、上官への限りない敬愛の表出を含む階級不在とも見える兵士同士の限りない連帯精神の描写と、非戦闘員の中国人との親しい交流とを、描いたとすれば、火野の持っているであろう正義感、日本的人情主義は、破綻し、全面的に戦争協力の文学になったと言うしかないだろう。⁵⁹

以上、いくつかの論考を具体的に引きながら、80年代前後における葦平文学の研究動向を検証した。この時期の研究は、先学の成果の上に立ちつつ新たな読み方を模索しており、各々、大切な指摘を含んでいる。しかしながら、全体としてみれば、視野がやや狭く、「兵隊三部作」に限定した批判的な捉え方がそれぞれの論の評価軸を成しているのである。その限界性から脱し、もっと広範囲な作品分析に立場を取ったうえで作家論へつなげていくような仕事は、1990年代以降の課題として残されていた。

4. 現代の研究動向—90年代以降

前節で見てきた葦平に対する批判の姿勢は、90年代に入ってもそのまま維持されていくが、それよりもポスト・コロニアリズムの流れを受けてか、90年代以降、葦平への関心が一気に高まり、様々な成果が公表されつつある。数多くの研究を説明

⁵⁸ 前田角蔵「日中戦争期の火野葦平（下）—兵隊三部作を中心として—」『日本文学 32（3）』、日本文学協会、1983年3月、23頁。

⁵⁹ 西垣勤「日中十五年戦争下の文学への一視点」『日本文学 38（10）』、日本文学協会、1989年10月、12頁。

するのは筆者の手に余るが、それらを大別してみると、大まかに以下の三点に分けられる。

まず第一に挙げられるのは、近隣諸科学の導入による新たな研究視座の獲得である。具体例としては、ポスト・コロニアル批評の立場からのアプローチを試みた歴史学者の成田龍一や、実証的な歴史研究といった方法論を積極的に利用した神子島健⁶⁰などの存在であろう。

例えば、「花と兵隊」に描かれている、日本の兵隊と中国人女性との「恋愛物語」に着眼した成田は、「占領者の男性と被占領者の女性という、占領とジェンダーの二重の力関係の下における『恋愛』を描くことが、そのまま植民地の関係を描き出すことであるとは、近年のポスト・コロニアル研究が明らかにしたこと」⁶¹だという。このように小説を通して15年戦争を考えるのは文学研究というより、寧ろ歴史研究といった方が妥当であろうが、そのユニークな作品把握は、新しい研究視座の開拓が今後大きな可能性を持っていることを示している。

第二に、「兵隊三部作」をはじめとする「兵隊もの」に限らず、他のジャンルの作品も研究対象となっている。ここでは、近年葦平研究に取り組んでいる増田周子を取り上げたい。

葦平には、中国古典文学『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した作品群があるが、1990年度に至るまで、兵隊作家として世に知られている葦平のこれらの作品は、ほとんど注目されてこなかった。そのことに気づいた増田は、「火野葦平『画壁』考—『聊齋志異』との比較を中心として—」⁶²、「火野葦平『鸚鵡変化』論—『阿英』（『聊齋志異』）との比較研究を通して—」⁶³、「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」⁶⁴などのような緻密な比較研究を通

⁶⁰ 神子島健『戦場へ征く、戦場から還る—火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士たち』（新曜社、2012年8月）は、石川達三の「生きている兵隊」や葦平の「麦と兵隊」「土と兵隊」など、15年戦争を題材にした日本の小説の分析を通し、「戦場へ征くこと、戦場から還ることの意味」と、「そのプロセスの中にいる兵士の内面の揺らぎや兵士の表象が作品の発表当時持った意味」とを考える研究である。

⁶¹ 川村湊その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、138頁。

⁶² 増田周子「火野葦平『画壁』考—『聊齋志異』との比較を中心として—」『国文学（95）』、関西大学国文学会、2011年2月、45—60頁。

⁶³ 増田周子「火野葦平『鸚鵡変化』論—『阿英』（『聊齋志異』）との比較研究を通して—」『関西大学文学論集60（4）』、関西大学文学会、2011年3月、45—61頁。

⁶⁴ 増田周子「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」『国文学（96）』、関西大学国文学会、2012年3月、273—294頁。この『糞尿譚』は1937年に発表されたものとは別ものである。

し、葦平文学と中国古典文学との関わり、及び戦争文学作家としてのイメージとは異なる葦平の一側面を解明しようとしている。『聊斎志異』との接点への解明に力点を置いている増田のこれらの論考は一つの新風に違いない。

だが、その一方、増田の論には「火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見てきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた」⁶⁵というような「危険な解釈」⁶⁶があることも否定できない。何が「真の姿」であるかを明らかにしないで、このような解釈を出すのは無責任といわねばならない。そもそも、葦平が描いた兵隊の姿は「真実」であるかどうか疑わしい。吉見義明『草の根のファシズム』によると、日本軍人は「遅くなった」「立派になった」という葦平の文章を読んで、兵隊は皆食料不足で痩せかけているのではないか、「火野よ汝は何を見ているのか」と、戦場で激昂する兵士が現にいたのである⁶⁷。

最後に忘れてはならないのは、「兵隊三部作」をめぐる論者たちの対立である。この点について、すでに増田論評を見たが、一方、池田浩士は「麦と兵隊」「土と兵隊」の文体を手掛かりに、これらの作品が銃後の読者を巻き込みつつナショナリズムの醸成に関わっていくメカニズムを明らかにしている⁶⁸。その「対立項」を更に加えると、例えば「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐり、玉井史太郎は、報道部にいろいろな制限を加えられても、葦平は身についた正義感を曇らせることなく、一兵隊としての視点を貫いて、戦場における兵隊たちの姿を、敵味方なく温かく見つめている⁶⁹と述べる。それとは別に、成田は葦平を「帝国の眼差し」⁷⁰を持っている作家として捉え、特に「他者」を描写する時にそれがはっきりと表れてくると言う。

⁶⁵ 増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究 (5)』、関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS、2012年2月、210頁。

⁶⁶ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、9頁。

⁶⁷ 吉見義明『草の根のファシズム』、東京大学出版会、1987年7月、65頁。

⁶⁸ 池田浩士は『火野葦平論[海外進出文学]論・第1部』(インパクト出版会、2000年12月、548頁)において、『麦と兵隊』の日記体と、『土と兵隊』の書簡体は、いずれも、作者が戦地の現実を真実味を込めて伝えるのに適した表現形式であるばかりでなく、銃後の答えを思い描きながら、或いは先取りしながら、銃後との会話を重ねるための、極めて効果的なスタイルでもある。この表現形式を通して、火野葦平は、兵隊作家である自分に読者が期待するものを、銃後に送り届けたのだ」と指摘している。

⁶⁹ 玉井史太郎『河伯洞余滴』、学習研究社、2000年5月、26頁。

⁷⁰ 川村湊その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、129頁。

要するに、戦争協力の文学なのか否か、これらの論考は一つの定論までには至っていない。その溝をどのように埋めていくかは今後の研究にゆだねられている。そのためには、作品をその筋や構成に忠実に即して解明していく姿勢が大切になってくる。言い換えると、作品の内容だけではなく、形式の面も視野に入れ、内容と形式の二面を全体的作品評価の下で統一的に把握することが目指されねばならない。けれども、それ以前に、そこではまず論者自身の戦争認識のありようと現実へ関わる姿勢が問われるはずである。それを抜きにしては、どのように綿密で精緻な作品解釈も空しいものに終わるほかないだろう。

5. 小括

昭和 10 年代初期における葦平への注目は、「糞尿譚」による芥川賞受賞というより、むしろ兵隊作家による芥川賞受賞といったほうが妥当だと思われる。田中艸太郎の言葉を借りれば、「昭和十三年に火野が芥川賞を受けたこと、その時、小林秀雄によってもたらされた芥川賞の受賞者である火野が、杭州警備の任に就いていた陸軍歩兵伍長玉井勝則であったということは、火野葦平という作家の文学的生涯にとって宿命的なことであった」⁷¹というべきであろう。葦平の芥川賞受賞（作家）と戦場に就いた玉井伍長（兵隊）との必然的な結合が直接的な契機となって、「麦と兵隊」をはじめとする一連の「兵隊もの」が生まれるわけだが、それらの作品が生み出した同時代的意義について、「臨場感」「人間的誠実」「ヒューマニズム」「社会的意義」などに見られるように、同時代評の着目点が一様ではなかったにせよ、論者たちのほとんどが賛美の辞を惜しまないところに足並みをそろえている。

ところが、敗戦直後、時代の価値観が一転する。それに伴って、1950 年代の研究＝それまでなかった否定的な捉え方が、マルクス主義的世界観を図式として葦平及びその作品に当てはめられる傾向を持つようになる。思えば、時代や状況が変化すれば葦平評価も変わる。換言すれば、葦平の文学はいかに歴史的、社会的存在なのかということが言えよう。そこにあったのは、時代における既成の価値観、歴史観によりかかって作品を読むという傾向であり、それは、言い換えれば、読者自身

⁷¹ 田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月、7頁。

の認識の歪みや限界への意識が希薄だったということである。その点、1960年代から70年代前期の「戦後責任」をめぐる研究にも、1980年代前後の反近代、反資本主義の立場からのアプローチにも共通している。それらはともすれば一面的な作品把握に傾きがちだったという欠点を含んでいるが、「私」の意識が、「私」にとっての客体を志向する時、常に自らに固有の、何らかの価値判断や情動の「彩り」に即して対象を目指している以上、作品への理解が歪みや限界を伴っているのもまたやむを得ない。しかしそうであればこそ、読者は文学作品を読み、その意味を探ろうとする際、如何にしたら己の生活実感に裏付けられた認識の枠組みを乗り越えることができるか、ということが大切になってくる。

最後に90年代以降の研究動向を踏まえていえば、当面の課題が、「兵隊三部作」をめぐる論者たちの対立の深層を探り、各々の作品を全体的作品評価の下で統一的に把握する可能性を模索するところにあると考えられる。そのうえで、葦平文学におけるそれらの作品の位置づけを明らかにし、「序章」で提起した葦平の庶民性の行方の問題等々に新たな視点を加えられる可能性を感じる。これ以上の言及は、研究史論である本稿の範囲を超えるので、個々の作品分析については、それぞれ別の章に譲りたい。

第2章 作家以前における火野葦平の庶民観

1. 問題の所在

火野葦平の文学世界を構成している特色のうち、彼の庶民心情が根本的な位置を占めることは、広く言われている通りである。本章では、作家としてデビューする以前における葦平の庶民心情が、その形成過程において、中でもとりわけプロレタリア運動に専念している時期の彼の、周りの中国人、朝鮮人下層労働者に対する共感の在り様を捉えて筆者なりの考察を試みる。その際に、考察の対象となる時期を明確にすれば、早稲田大学在学中の入隊体験を終えた 1928 年から、検挙にあつて転向を決意、ふたたび文学へ復帰する気持ちになった 1932 年頃までの 4 年間ということになる。これは、葦平の庶民観の行方を重点的にフォローしてみたいとする筆者の問題意識からすれば、当然のことながら重視されねばならない時期である。

更に、後年葦平は『火野葦平選集第一巻』（創元社、1958 年 5 月）の自筆解説で「或る事情から、昭和七年、ふたたび、文学へ還った」（前掲書、419 頁）とおのずから追憶しているが、その「或る事情」とは一体何を指しているのか。本章の最後に、葦平の転向問題をも視野に入れて検証していく。この間に葦平が遭遇したさまざまなドキュメントについては、幸いなことに彼の自伝的作品「青春の岐路」（『世界』1958 年 1—10 月）「魔の河」（『群像』1957 年 9 月）などに結実しているので、本論での叙述の展開において、それらに依拠することが多々あるのを、あらかじめ断っておく。

ところで、本論の展開に先立ち、同時期における葦平の左翼体験をめぐる研究史を見てみよう。飛鳥井雅道は、文学青年から政治青年へと転身する前後の葦平の道ゆきに注目し、「プロレタリア文学史を調べたところでは、この経歴（若松港沖仲仕労組を作って書記長となったり、北九州プロレタリア芸術連盟を創成、機関誌『同志』を発行したりする等々、引用者注）は地方のプロレタリア文学青年として、これ以上典型的な人物を探すのはむずかしい」¹と述べ、池田浩士は、小説家になることを断念して若松港で労働運動に没頭する決意をした時の葦平が、1929 年に編

¹ 飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」『文学理論の研究』、岩波書店、1967 年 12 月、175 頁

纂した「若松港湾小史」を捉えて次のように評価している。

かれにとって運動とは何であり、闘争とはどんなものであるのか、ゴンゾウたちとともに生きて働くということがかれにとって何を意味するのか—そしてそのためにはどれほど現実を具体的に直視することが必要であるとかれが考えていたかが、この一冊のすべてのページから、読むもののところに響いてこずにはいない。おそらくこの一冊は、日本の左翼労働者運動が残したもっとも良質でもっとも感動的な記録のひとつだろう。²

また、今村修は、作家以前の葦平に見られる思想体験を問題視する際、早稲田大学中退後、労働運動に専念するようになってからの葦平の内面的動きに言及している。氏は「青春の岐路」に出てくる、「弁証法やマルキシズムを基調とした血みどろな階級闘争の理論や実践は、まだ、彼の前に現実感をともなうてあらわれてはいなかった」が、「若い昌介（葦平の化身、引用者注）の正義感を満足させる一種のヒロイズムに裏づけられ」、「センチメンタリズムやロマンチシズムもまじっていたかも知れない」という葦平自身による内的告白を、そのまま受け止めたうえで、更に次のように指摘している。

火野の場合、ヒロイズム・センチメンタリズム・ロマンチシズムといった情緒反応の導くところ、わが国において階級的な立場からの理論と実践を担っていた集団である日本共産党に急速な親近感をもちはじめているのだ。火野のような若者たちの間でマルクス主義＝新しい神（日本共産党）に引き寄せられていったものたちについて、わたくしは例の丸山真男が創出した「実感信仰」と「理論信仰」の概念を援用しつつふたつのタイプを指摘することができると思う。すなわち、ひとつには火野のようにア・プリオリな党派的立場性にとらわれることなく情緒的な親近感をもって接近した「実感信仰」派と、人間・社会・歴史といったものについて階級的な立場からする整合的な認識をひっさげて接近した「理論信仰」

² 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版社、2000年12月、447頁。

派が、それである。³

引用はやや長くなったが、以上、駆け足ながら、飛鳥井雅道、池田浩士、今村修の三氏の論考を素描した。確かに、葦平が共産主義運動へ急接近した 1930 年代前後は、彼の生活史の中においても特筆されねばならない一齣である。そして早稲田大学時代、反自然主義文学のうち佐藤春夫に傾倒し、外国文学では、エドガー・アラン・ポーや、イギリスの世紀末詩人アーネスト・ダウンスに強く惹かれた彼にとっては、もともと「弁証法やマルキシズムを基調とした血みどろな階級闘争の理論」は、おそらく肉化しがたい異物だったということも事実であろう。ここで取り上げた三つの論考は、昭和初期における葦平の左翼体験に焦点をあてて若干の考察をしているが、本稿で筆者が提起した問題意識に即して言えば、同時期における葦平の対中国人観、朝鮮人観といった側面はまだ充分明らかになってはいない。以下、この稿の展開において、これを浮き彫りすることを念じつつ、筆を進めることにしたい。

2. 沖仲仕時代の光彩

筆者は、京都外国語大学に留学中の 2013 年 11 月 23 日、北九州市若松区の河伯洞において火野葦平資料館長の坂口博氏立ち合いの下、葦平の三男の玉井史太郎と面談した。葦平と中国人、朝鮮人労働者との触れ合いの一端でも知りたいと思ったからである。玉井氏によると、「葦平は幼少の時から近傍の炭鉱、港湾で働く彼らを多く見てきたはずで、父の玉井組も少人数ながら彼らを雇用する一組織であった」⁴との談話を得た。また知られているとおり、兵士として大陸へ渡る前、1932 年に父金五郎と 52 名の仲仕と共に洞海湾を出帆し上海に出張したことがある。それは葦平としては初めての中国の風土との接触であった。この上海体験は戦後の 1957 年に作品化した「魔の河」に詳しく描かれている。このように、葦平にとっての中国人は、幼時から切れ目なしに現れる身近な存在であった。

さて、1928 年、玉井組を継がせようとする父が、早稲田大学に退学届を提出し、

³ 今村修「火野葦平の思想体験 作家以前について」『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012 年 11 月、23—24 頁。

⁴ 2013 年 11 月 23 日、北九州市若松区の河伯洞にて玉井史太郎氏と面談。

葦平は労働運動に専念しようとして決意、同大学英文科を中退し福岡 24 連隊除隊後は玉井組の半纏を着た。以後 36 年 6 月、復帰第一作ともいべき「帝釈峡記」を発表するまで、葦平は沖仲仕として洞海湾で暮らしていた。その 8 年間の生活の中で炭鉱や港湾で働いていた中国人、朝鮮人と接する機会が多くなってきた。

フィリップ・ポンス『裏社会の日本史』によると、朝鮮半島や中国から、大量の日雇労働者の日本国内移住が始まったのは 1920 年代のことである。

一九二〇年代には、第一次世界大戦による成長期に続いた飢饉と失業との二重影響の下で、日雇労働者がかなり増加した。日雇労働者は一九二二年に一七万三九〇〇人であったのが一九二四年には五三万九九〇〇人となり、一九二九年には一九〇万人に達した。⁵

この現象は、日本が戦争への道を突き進む過程において、軍需産業の拡大により、民間の熟練工の不足を来したり、徴兵の増大により、労働者の構成に変化が生じたからである。各地の炭鉱や港湾に送られたのは非熟練工、婦人、アイヌ民族に加えて、更なる不足分は外地にいる朝鮮人、及び中国人に求められた。彼らは社会的に日本社会の最下層であることで共通していた。

このことから、筑豊炭田の積出し港でもある若松港⁶にも相当数の外国人が入り込んでいたことが推定される。葦平が 1929 年に書いた「若松港湾小史」には次のような一節がある。

汽船沖積に関する石炭仲仕は昭和四年（1929 年、引用者注）一月の調査によれば八百四十九人である。これは小頭に従属しているものであって、その他浮浪仲

⁵ フィリップ・ポンス『裏社会の日本史』、筑摩書房、2006 年 3 月、111 頁。

⁶ 芳野敏章『若松今昔ものがたり』（西日本新聞社、1996 年 11 月、14—18 頁）によると、1913 年、全国の石炭の採炭高は 2130 万トンであったが、そのうち筑豊五郡が 1150 万トンを占めており、その 8 割が若松から積み出されていた。日本の石炭の半分を若松が取り扱っていた計算になる。正に日本一の石炭積み出しの港町であった。1916 年の「若松と戸畑市街地図」では、当時の若松港の様子を「湾内数拾の汽船、数百の帆船、数千の小艇（…）湾内一帯は帆檣林立をなし中央航水路曳艇の連馳雁行の如く（…）」と記録されている。

仕といわれる者百五十人、鮮人仲仕約三百人である。⁷

また、1958年に発表された「青春の岐路」の中で「若松港の沖仲仕は約千五百人、その半数以上が朝鮮人であった」⁸と書かれている。いずれにしても、葦平が家業を継いだ時期、若松に流れてきた外国人労働者の総数も、玉井組に拾われた数も定かではない。しかし1928年以降、若松の地において、葦平と中国人労働者や在日朝鮮人労働者とが、交錯し始めたことは、これ以上論ずる必要はないであろう。

さて、葦平が沖仲仕として家業を継いだ時期の玉井組の雇った外国人労働者の処遇である。玉井史太郎によると、汗を共に流した彼らに対し、「玉井組はやや高めの賃金を支給し、食事も平等で家族と『同じ釜の飯』を食べさせた」（前述、玉井氏との面談）とのことである。前出の「青春の岐路」にも、「辻安太郎（父金五郎の化身、引用者注）は鮮人仲仕として蔑視したり、特別扱いしたりはせず、能力ある者は起用していた」⁹との一節がある。当時、石炭システムの中で、仕事に割り込んでいくしかない員数外の労働者として周りに差別され、一般仲仕に嫌われたもつとも危険な荷役をやらされた外国人労働者にとっては、玉井組は相対的に恵まれた環境と言えよう。

その時、玉井氏の述べられた外国人に対する日本人との同一視や、葦平の人間性の一貫性¹⁰などの事実に関しては別に論ずる場もあろう。葦平は1943年2月の「石炭仲仕道」の中で、石炭仲仕は「いうならば一種遊侠の徒であつて」、「親分子分の情誼によって成り立った世界のなかで、（…）義理人情というものが彼らの全生活をつらぬく唯一の倫理であった」ので、「私は小さい時からこのような世界のなかで育ち、これらの低俗にして人情にあつい荒くれた仲仕たちがすきであった」¹¹と述

⁷ 玉井勝則（編）『若松港湾小史』、若松港汽船積小頭組合事務所、56頁。

⁸ 火野葦平「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、221頁。

⁹ 火野葦平「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、221頁。

¹⁰ 玉井史太郎は『火野葦平とゆかりの人びと』（株式会社ゼンリンテックス、2010年、67頁）において、「中国人に対する見方など、『兵隊三部作』を読むと、日本人と変わらないと書いてあります。これは沖仲仕時代に培われたものだと思うのですが、若松には当時朝鮮人の労働者が沢山いました。玉井組も半分近く朝鮮人労働者を使っていました。金五郎もそういう人たちを差別しちゃいかんと口癖のように言っていました。これが（…）『兵隊三部作』でも貫かれていることです」と述べている。面談時と同じ主旨のものである。

¹¹ 火野葦平『戦列の言葉』、二見書房、1943年12月、201頁。

べている。

これに関して池田浩士は、「ここに書かれているのは、『花と龍』をはじめとする諸作品で繰り返して描かれている石炭仲仕たちの一般的な義理人情」とは違い、「きわめて特定の、(…)親分の背後にいる、あるいはむしろ親分の上にいるもっと大きなものへの、忠誠なのだ」¹²というふうに指摘しているが、文中に含まれている、戦時体制を支える国家の政治意図から目をそらして、応召以前に沖仲仕の「道」に身を投じた、葦平の人情味の厚さは単純な国士とは明瞭に区別されてもよいのではないか。

これと同じような描写は、戦後の1953年に父金五郎と母マンを主人公として発表された「花と龍」からも見て取れる。例えば、第2部の「大都会」の中では次のように言っている。

こういう風になってきても、金五郎とマンとは、口癖に「おれたちは、石炭仲仕じゃ。裸一貫、門司、下関、戸畑、それから、若松に来てからも、石炭の中で、真っ黒になって働いたことを忘れまい」と、話し合った。(…)長男の勝則にも「お前はゴンゾウの子じゃぞ。そして、お前もゴンゾウなのじゃぞ」と、機会あるごとに戒めた。その勝則は、すでに、二十五歳のたくましい青年になって「玉井組」の半纏がけで、毎日、仕事に精出している。¹³

同作によると、葦平の25歳の年は1930年であった¹⁴。父のこのような「ゴンゾウ本位」に影響されて、沖仲仕としての葦平は、中国人、朝鮮人ら外国人労働者と「同じ釜の飯」を食べ、彼らを含めた港湾の石炭沖仲仕たちを糾合し、1931年に若松港沖仲仕労働組合を結成、自ら書記長に就任して、一時ながらも労働運動に挺身した。同31年、洞海湾の財閥による荷役の機械化に反対した葦平は、沖仲仕を率いて湾内のストライキを計画する。そのため、「八月二十三日、午前三時を期して決行された沖仲仕の総罷業によって、洞海湾内のすべての沖積荷役は停止された。

¹² 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版会、2000年12月、393頁。

¹³ 火野葦平『花と龍(下)』、岩波書店、2006年3月、16頁。

¹⁴ 火野葦平『花と龍(下)』、岩波書店、2006年3月、266頁。

港は、死んだようになった」¹⁵。葦平の対中国人観、朝鮮人観でいえば、彼の経歴にあって、ひとときわ光彩を放っていた期間と言えよう。

3. 上海出張

洞海湾の仲仕として働いた葦平は、1932年2月2日、前月に起こった上海事変による中国人苦力の沖仲仕がストライキを打っていたため、父金五郎とともに、三井物産の依頼を受け、「おびたしい日章旗と万歳の声とに送られて、石炭二千五百六十四トン、仲仕五十二人を積み込んだ M 船舶の貨物船花野丸は、上海に向かって、北九州の若松港を出帆した」¹⁶のであった。

上海に急行する目的は中国人苦力のストライキにより上海馬頭に止まった石炭荷役をするためであった。「花野丸は御用船となったのであるから、仲仕たちもいわば出征」¹⁷と同じような感覚で、華々しく送られたわけである。思えば、ほんの数か月前までは地元における労働運動のリーダーシップを取った葦平が、如何なる心持ちをもって中国人労働者のスト破りに最初の大陸行を果たしたのか、或いは上海事変に対する彼の態度はどのようなものなのか。残念ながら、その時の体験をもとに書かれている作品「魔の河」からは読み取ることはできない¹⁸。私は葦平の、こちらあたりを説明する立言として、葦平の転向問題に触れた田中艸太郎の次の指摘に言及したい。

火野のいわゆる赤化に関していえば、青年時代の「良心」と「誠実」が賭けら

¹⁵ 火野葦平『花と龍（下）』、岩波書店、2006年3月、318頁。

¹⁶ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、6頁。

¹⁷ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、6頁。

¹⁸ 今村修も、その論考『「魔の河」小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐって』（『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、50—51頁）において、「最初の大陸行をする、つい半年前まで、いま述べたような『地方のプロレタリア文学青年として、これ以上典型的な人物を探すのはむずかしい』ほどの経歴をもつ左翼活動家であった火野葦平（作中では辻昌介）が、いかに『前年のストライキのころから日本共産党と Kommunismus とに疑惑を抱きはじめていた』（年譜）とはいえ、彼は何の抵抗や苦悩も覚えることなく、中国人労働者のスト破りのために父金五郎（作中では安太郎）を助けて上海へ渡ったのであろうか。そもそも彼が日本共産党や Kommunismus に抱いたという『疑惑』が、いったいどのようなものであったのか、『魔の河』ではもちろんのこと、彼の青年期における社会主義体験を刻明に描いてみせた『青春の岐路』からも、それをうかがうことはできないし、また彼が前歴として持っている左翼体験と異民族のスト破りに出かけることとが彼自身の内部世界で、どのような説明づけでもって完了していたものかを知ることもできないのである」と指摘している。

れていた事実を疑う余地はない。だが、赤化からの転向についていえば、全身で思想的忠誠という状態にひたり切った後の転向とは言い難い。火野の転向は実際は自らの判断による自己の気質的世界への復帰であって、結局、火野は五年間の左傾時代ただの一度も коммуニストであったことはなかったとしなければならぬ。¹⁹

「全身で思想的忠誠という状態にひたり切った後の転向とは言い難」く、「自己の気質的世界への復帰」だとする田中の指摘は的を射ていると思う。例えば、戦後、葦平が「私は、戦場で、自分の任務を遂行しなかった兵隊を、人間として尊敬することはできない。それは、人間の責任に関する深い問題であって、帝国主義、軍国主義、軍閥などの想念とはまったくかけ離れた根底的な人格論である」²⁰と述べる時、そこに筆者は彼の人間的な資質の一端を見るほかない。「火野は生涯、一人の正義派であった。ときにそれはドン・キホーテ的に正義派であった」²¹と田中はいうが、正にその通りであろう。

さて、戦争の洗礼を受けた葦平は、戦後書かれたこの作品に「支那人には民族感情や愛国心はないのか（…）少なくとも昌介（葦平の化身、引用者注）の目には、今日、方々で出会う中国人の表情に、戦争も勝敗も、歴史も感じられなかった」²²というふうにしたように、戦時中に培われた中国人に対する「形式主義」的な見解の束縛から脱出することができなかつた。しかしながら、当時、日本の資本家が中国人苦力に与えた不平等で非人道的な扱いに対して、葦平が不満や抗議を漏らしたこの作品を通して、応召する前、初めて中国に渡った時に示した、中国人に対する葦平の人間性の善良な一面が窺える。

例えば「長い革紐のついた鞭が竹矢来とともに、苦力たちの顔を激しく横殴りにした」²³三井物産の貯炭場現場主任である関口菊夫を見て、主人公の昌介の口を借りて、葦平は関口には「不識の間に彼の心身にこびりついた機構への信頼、そこから来る残忍な英雄的快感」²⁴があった、「関口主任が傲然と胸を張り、猛獣使いのように苦力

¹⁹ 田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月、22頁。

²⁰ 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、429頁。

²¹ 田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月、20頁。

²² 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、83頁。

²³ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、20頁。

²⁴ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、20頁。

に向かって鞭を振るった姿が思い出され、昌介はこの親切で瀟洒な紳士に対して激しい不信の念がわいた」²⁵と書いている。また、関口主任と賃金交渉をする時、昌介は「苦力は二十銭で使っているそうですが、あれも二十五銭はおろか、一円か一円五十銭くらいにはしてやってほしいですね。かわいそうで見えておられません」²⁶と、彼に「越権」したことを言い出す。

さて、今村修はこの作品のモチーフともいべき「悲劇の共感」²⁷の成立過程を丹念に追いつつ、「端的に言って、私は、このモチーフが八・一五以前に得られたものではなく、敗戦というドラマチックな歴史の転換をくぐり抜けた時点で、はじめて獲得することのできた『後知恵』ではなかったか」²⁸と推測している。その理由として、今村は「『魔の河』体験の段階では、中国人に対する優越意識や敵意識がみられないのに比して、『兵隊三部作』になると、かなり明確な形で彼らを憎悪の対象としてみる『眼』が火野の内部に、支配的ではないにしても醸成されてくるのであり、このことは彼が『非人間的な戦争の現実』に一步一步押し負けて行っていることを示している。（…）そして、この方向が『悲劇の共感』に到達する方向とは全く相反するものである」²⁹と言っているのである。

確かに、「歴史意志に翻弄されるほかはない、国境を越えた民衆相互の『悲劇の共感』」³⁰とされる「魔の河」のこのモチーフに関わる「事後の心理」の侵入度は、

²⁵ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、30頁。

²⁶ 火野葦平「魔の河」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、86頁。

²⁷ 「魔の河」（『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、51—52頁）には次の一節がある。2月12日、日中両国軍の間に一時的な停戦協定が成立しており、その隙間を縫って前線へ慰問に来た辻組一行を歓迎するために、或る上等兵がいたずらそうに「支那兵を見せてあげまっしょうか」と言い、銃を置き、陣地の土嚢を乗り越えて、ノコノコと敵の方角へ歩いて行った。彼はゆうゆうと煙草を一本抜き出し、それを口にくわえると、マッチを貸してほしいという身振り手真似で中国兵を誘い出し、お互いに煙草の火をつけあい、ニコニコしながら無言で握手をする（…）。この一幕を涙のにじむ思いで見た昌介は、「日夜殺しあいをしている敵味方の兵隊が、四時間の休戦によって、憎悪をこんなにもきれいにすて去り得るといふのはどういふことであろうか。いや兵隊たちには憎悪などはないのかも知れない。国と国との争いのために、なんの恩怨もない人間同士が殺しあいをしなければならない。むしろ、その悲劇の共感の方が強いのであろう」という感慨を持つのであった。

²⁸ 今村修『『魔の河』小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐる—』『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、62頁。

²⁹ 今村修『『魔の河』小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐる—』『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、63—64頁。

³⁰ 今村修『『魔の河』小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐる—』『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、60頁。

まったくないとは筆者も思わない³¹。しかし、上述のことを含め、この点における今村の考えを筆者は部分的に受け入れなければならないと思う。なぜなら、中国人に対する差別的な視線を葦平の「兵隊三部作」が内包していることはいうまでもない。しかしながら、「麦と兵隊」や「土と兵隊」などに見る庶民的な共感が時々「敵側」の中国民衆に及んでいることも無視できない事実である。換言すれば、戦時中に執筆した葦平の作品が帝国主義の国策に従っているものであることと、日中両国民に対するその記述が庶民的な視座を持っていることとは、決して矛盾しない。この点については「麦と兵隊」「土と兵隊」を中心に別稿（第4章）を用意しているので、ここでは深追いは避けたい。いずれにしても、葦平の内部におけるいわゆる「悲劇の共感」の問題が、早くも「兵隊三部作」ですでにその端緒を見ることが出来るし、そもそも筆者は、葦平の庶民観の観点から、「魔の河」体験時における葦平の対中国人把握を積極的に評価してもよいのではないかと考えている³²。この前の部分で言及したように、その時期の葦平は沖仲仕を率いて、「資本家打倒」の労働運動に専心していた時期なので、上海馬頭で搾取を受ける中国人労働者に同情の視線を投げかけていたとしても、さほど不可思議なことではないと思われるのである。

その年の2月末、上海での任務を果たした葦平は、父とともに生き残った沖仲仕を引きつれて若松に到着すると同時に、全国的な共産党検挙の波に巻き込まれ、す

³¹ 例えば、『革命前後』（中央公論社、1960年1月、115頁）の中で、敗戦直後、アメリカ軍上陸への恐怖心から、町中を右往左往している避難民の姿を見た葦平の分身昌介には、次のような感慨を發する一節がある。「国と国と戦っているといても、戦争をしている者は一般の国民とは無関係の指導者だった。（…）しかし、国が戦えば国民は否応なく、戦争の中へ巻きこまれる。そうして敗ければ、あちらこちらに逃げ惑わなければならない。（…）ところが、今、日本と日本人とがその敗亡のめぐりあわせを担うことになった。疲労困憊し、へトへトになって逃げて行くこの日本人の流れは、すこしも中国や南方の民衆と異ったところはない。戦争が作りだす悲劇の様相は国と民族にかかわりはないのだ」。この一節には、今村氏がまとめた「悲劇の共感」の内実＝「国境を越えて民衆は常に被害者であり、巨大で狂暴な歴史意志によって愚弄され、踏みにじられるだけの矮小な存在」（今村修『魔の河』小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐる）『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、61頁）と共通している部分があることを確認できる。

³² もっとも、今村修自身は『魔の河』小論—〈悲劇の共感〉の成立をめぐる」（『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月、62—63頁）において、「たしかに火野は『魔の河』で中国人苦力の生活に思いを馳せているのも事実であり、また、彼らの表情をかなり丹念に追っもいる。（…）彼が（皇軍兵士）としてではなく仲仕として出向いたこと、最初の大陸行直前まで左翼運動に従事しており、その余韻を何らかの形でとどめていたであろうこと、上海事変下の戦況が、いまだ日本側に有利に展開していたこと、などの諸要因を考慮に入れるならば、このような、おだやかで、かつヒューマンな感覚が、そのままに『魔の河』体験段階のものであったろうことは、ほぼまちがいないことだ」とも断っているのである。

ぐ特高警察に逮捕された。年譜によると、「前年のストライキの頃から、日本共産党とコミニズムとに疑惑を抱き始めていたので、この検挙にあつて転向を決意、ふたたび、文学へ還る気持ちになった」³³という。

4. 転向問題

「青春の岐路」には、次のような対話のシーンがある。

「なんといつても、仲仲間における辻の人気は否定できんからね。あいつを除けたら、組合の結成も、ストライキも出来んよ」

「中間搾取階級として批判するのは、つぎの段階にして、現在はあいつを最大限に利用するんだ。プチ・ブル根性は一朝一夕に抜けるわけではないが、それにもいまは眼をつぶるんだな」

(…)

「辻は気の毒だな。情熱は純粹でも、いつかは、アラビアのローレンスになる運命を内包しとるんだ。しかし、革命はそういう悲劇を必要としとるし、これに同情してはおられん。辻が犠牲になることなど、末梢の小事件だよ」

そういつて、笑つたのは曾我勇二（共産党のオルグ、引用者注）だつた。³⁴

これは、『同志』という雑誌の打ち合わせ会で、酒の勢いで吐き気を感じた昌介が、便所に立ち、部屋に帰りかけた時に聞いた左翼仲間たちのやり取りである。もっとも、ルーズな女性関係を持ち、しかも継母への残虐な振る舞いをする曾我に対しては、昌介は人間的立場から決して好感を持っていない。にもかかわらず、オルグとしての接触は別の問題だと考えた昌介はそれを聞き、大きなショックを受けたのは想像にかたくない。

中間搾取階級に属するプチ・ブルジョア、それは利用価値があるだけで、眞の同志ではないというのか。これと結ぶのは単に戦略戦術のためだというのか。³⁵

³³ 鶴島正男「新編＝火野葦平年譜」『敍説 (13)』、花書院、1996年8月、8頁。

³⁴ 火野葦平「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、227頁。

ところで、話題は一転して、敗戦直後、平野謙と中野重治との間に「政治と文学」論争が白熱的に交わされていることはすでに前章で触れた通りである。その背景には、文学者の戦争責任の問題、昭和 10 年代の文学をつらぬく最大のメルクマール「政治と文学」の問題を徹底的に究明するためには、どうしてもプロレタリア文学運動の退潮、転向文学の氾濫、不安文学の発生、それらの一連の文学的現象の追尋が問題解明の劈頭にすえられねばならぬ³⁶というのがあった。そのような状況の中で、平野は「ひとつの反措定」において杉本良吉と岡田嘉子との「越境事件」を捉え、「杉本良吉がいかにか悲壮な理想を抱いていたにせよ、その理想実現のためになまみの一女性を踏み台にしたという一点において、その高遠なるべき理想全体が、きびしい批判にさらされねばなるまい」³⁷と断じている。

平野の発言と、昌介が共産党のオルグに抱いた疑問との間に共通するものが確認できる背景には、当時の左翼の状況そのものがあった。例えば、小林多喜二の「党生活者」に対して、戦後、多くの批判が集中したように、主人公のハウスキーパー笠原に対する非人間的な扱い方などには、見落とすことのできない歪みがみられ、そこからプロレタリア文学運動への全面否定を強調しようとする議論なども出てきたとおりである³⁸。無論、3・15、4・16 の共産党員大検挙、並びに満州事変を契機とする日本帝国主義の凶暴な弾圧ぶりのゆえに、当時のプロレタリア運動が目的達成のためにはそのような歪な要素を含まざるを得なかったと言われればそれまでである。しかしながら、劣悪な外部条件によってその政治活動がいかにか苛烈な弾圧下にあり、非合法生活を守るため必要悪が要求されたにせよ、民衆のための政治活動が、一人の生身の人間を当たり前のように利用してしまうことは筆者には承認しかねる。実際、「第三世界」のプロレタリアは政治権力を掌握した後も、多くの場合、植民地主義者以上に、女性や反体制運動家に対して抑圧的であったという事実は未だに我々の記憶に生々しく残っている。

³⁵ 火野葦平「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫 8』、光人社、1980 年 5 月、229 頁。

³⁶ 平野謙「『政治の優位性』とはなにか」『昭和文学全集第 17 巻』、小学館、1989 年 7 月、268 頁。

³⁷ 平野謙「ひとつの反措定」『昭和文学全集第 17 巻』、小学館、1989 年 7 月、263 頁。

³⁸ 戦前においても、例えば、1931 年、小林多喜二宛ての志賀直哉の手紙で、小林の小説を「主人持ち」（『志賀直哉全集第 12 巻』、岩波書店、1974 年 4 月、340 頁）の文学として批判するような声があった。

「青春の岐路」では、昌介の曾我への疑問と不信の念は最後まで続いている。

こういう男が、マルキシズムを奉じ、プロレタリア革命を夢んでいるというのはどうということになるのか。疑うべくもなく、プロレタリアートの解放は労働者農民への深い愛でなければならない。もしその愛なくして革命運動をすれば、指導者としての快感と権力を貪ろうとする政治的野望にすぎなくなる。さすれば、反動の側にいるブルジョア政治家となんら変わりはない。曾我勇二がつねに口にするヒューマニズムの根源はなんであろうか。彼が共産党のオルグとなった資格は、どこにあるのか、これらの矛盾と疑問とを解きほぐす術を知らず、昌介の混乱は深まるばかりだった。³⁹

葦平が転向した理由については、すでに前節の最後で述べたとおりである。以上、述べてきたことを通して、私見ながら筆者は一つの仮説を持つ。そのことを結論的に述べ、この稿を閉じることにしたい。すなわち、真鍋元之が「青春の岐路」の解説で指摘する、「文学を捨て、共産主義運動へ挺身した辻昌介が、のちに転向してその運動から離れるまでの過程が叙述されなければ、作者火野の実像に合致しない」⁴⁰のような不備があることは無視できない事実にしても（或いはまた、オルグへの人間的不信等から、後にその人間の奉じている思想を丸ごと否定してしまうような短絡を昌介が持っていることも認めないわけにはいかない）、仮に、作中に描かれた昌介のコミュニストへの疑問視はそのまま葦平がその当時に獲得したものであったとしたら、この点において彼は非常に遠視眼的な洞察力を持っているに違いない。

5. 小括

応召する前「彼（葦平、引用者注）には家業、家族間の分厚い人間関係があり、『優しい人』、『いい人』であった」（前述、玉井氏との面談）。一仲仕の長男として生まれ、父金五郎の職業の影響下で成長したことによって、庶民への愛情というものが彼の性格の奥底に抜きがたく定着したことは否めない。1928年、福岡歩

³⁹ 火野葦平「青春の岐路」『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、236頁。

⁴⁰ 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫8』、光人社、1980年5月、246頁。

兵第 24 連隊に幹部候補生として入隊する時も、「第三インターナショナルの歴史的地位」「階級闘争論」等の左翼思想を把持していた。また、1930 年代初期、荷役労働の機械化により失業の危機に瀕している沖仲仕のため、葦平は中国人や朝鮮人を含めた最下層民である「ゴンゾウ」の群れの中で汗を流し、彼らを束ねストライキを組織することで大資本の搾取と対峙した。葦平の中の左翼平等思想と「ゴンゾウ」の血が結合していた一時期であった。

付言すれば、以下は葦平とその文学の故郷北九州市若松区を訪ね、息子の史太郎氏を訪れた私事にかかわる感想であるが、氏を中心とした葦平本来の人間性から派生する「優しさ」を護り伝える「葦平と河伯洞の会」の諸活動に感銘を受けたのは事実である。また、北九州の地から文化状況を俯瞰し発言する坂口博氏の存在もあるし、葦平の甥にあたる人物で、NGO ペンシャール会現地代表として活躍している中村哲医師の存在もはじめて知った。私は、葦平ゆかりの人々に、時を隔てた葦平との広義の「協同性」を感じ取ったのである。

1936 年 6 月、葦平は「帝釈峡記」という作品を『九州文化』に発表し、「それ以降猛烈に小説に専念する意欲が湧き起った」⁴¹。1937 年 9 月、徴兵される直前に脱稿したのは、「後に庶民作家とも目されるに至る道筋を伺わせるに十分な作品」⁴²とされている「糞尿譚」である。この作品の主人公彦太郎を、池田浩士は「戦前から戦後にいたる火野葦平の諸作品を通読すればだれしも気づくとおり、そこに繰り返して登場するいわゆる庶民的な人物たちの（…）もっとも特徴的な原型」⁴³（傍点は原文のまま）として捉えている。その指摘自体は何の問題もないが、「糞尿譚」を魯迅「阿 Q 正伝」と比較した視点から把握すれば、両作品にはどのような類似性が見られるか、多くの論者は言及していない。次章では、それについて論じてみたい。

⁴¹ 「火野葦平年譜」『日本現代文学全集 87』、講談社、1962 年 4 月、470 頁。

⁴² 鶴島正男「特集 名作の舞台を歩く／火野葦平」『火野葦平とゆかりの人びと』、北九州市芸術文化振興財団（発）、2010 年、27 頁

⁴³ 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第 I 部』、インパクト出版会、2000 年 12 月、219 頁。

第3章 火野葦平「糞尿譚」に見る魯迅「阿Q正伝」の影 —彦太郎と阿Qの場合—

1. 問題の所在

1938年3月に火野葦平が第6回芥川賞を受賞したのは、前年11月に雑誌『文学会議』に発表した小説「糞尿譚」によったものである。主人公の彦太郎が力を尽くして取り組んだ近代的な糞尿汲取事業を主なモチーフに描いているこの作品は、1921年12月から新聞『晨报』の週刊付録に連載された魯迅「阿Q正伝」から大きな影響を受けている可能性が高いと思われる。これを論証するため、本論では両作品の主人公である彦太郎と阿Qについて、主に「家系に見る両主人公の類似性」、「彦太郎の『精神勝利法』」、「彦太郎の『浮気の悲劇』」、「『糞尿譚』の『大団円』」という四つの観点から、その類似性の確認作業を行いたい。

さて、「糞尿譚」に対する従来の研究を顧みておこう。岩上順一は、主人公の彦太郎が厳しい環境に圧倒されながら、決してそれに対する徹底的な衝突には立ち至らないことなどから、葦平の文学を考えるたび毎に、底知れぬ人情家の悲劇とでも言ったようなものを連想する¹と、戦時下に否定的に評価している。確かに、彦太郎は自分を取り巻く現実には不満を持っていながら、最後までそこから抜け出ることがない。特に最後の場面において、汲み取った糞尿をぶちまける形で、その不満を爆発させる。だがその爆発は、主人公の人間関係をいささかも変えてはいない。一瞬の怒りは、やがて慰撫され鎮静させられ、これまで通りの日常が、ほのぼのと回復するのである。これが、岩上の言葉で言えば、「人情家」葦平の悲劇なのである。

しかしながら、作品に描かれているその小さな世界は、均質で何の問題も矛盾も含まないような世界では全くない。例えば糞尿汲取人と塵芥処理業者たちとの敵対関係がある。池田浩士はそこに気づき、彦太郎を葦平文学の庶民的な人物たちのもっとも特徴的な原型と指摘しながら、こうした敵対関係こそが葦平の「庶民の人情」において極めて基本的な関係構造である²と論じている。

¹ 岩上順一『文学の主体』、桃蹊書房、1942年2月、40頁。

² 池田浩士は『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』（インパクト出版会、2000年12月、228頁）において、糞尿汲取人と塵芥処理業者たちとの関係構造を「同質的な内部の敵との抗争」として捉えている。

同様の研究としてはそのほかに、河上徹太郎「火野葦平君への公開状」³や、鶴島正男「特集 名作の舞台を歩く／火野葦平」⁴なども挙げられる。

文学の世界における葦平の庶民観を初めてまとめた形として具現した人物は、池田の言ったように彦太郎であろう。その指摘自体は何の問題もない。しかし、池田を含めたほとんどの論者は大切なものを見落としている。それは本稿のテーマでもある「糞尿譚」に見られる葦平文学と中国文学（魯迅文学）との関わりである。

とは言え、近年葦平研究に取り組んでいる増田周子はその関わりに注目し始めている。「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」⁵がそれである。増田はこの論文の中で、葦平が1950年2月に『キング』に発表したもう一篇の「糞尿譚」⁶小説を、中国古典文学『聊齋志異』（「画皮」）と比較したうえで、「画皮」からの影響と葦平自らの独創性を探った。葦平文学と中国文学との接点に力点を置いた増田のこの論文は、葦平研究に極めて新しい一頁を開いている。しかしながら残念なことに、氏は1937年に発表された「糞尿譚」には目を逸らしている。

本章で述べたように、彦太郎の家系や精神構造についても、或いは「糞尿譚」のストーリーの展開についても、葦平は常に魯迅「阿Q正伝」⁷の阿Qを念頭に置いていると考えられる。例えば阿Qは村人に馬鹿にされたり苛められたりした場合、いつも己の敗北を勝利に転ずるという「精神勝利法」を以て自己欺瞞するが、彦太郎も「今に見て居れ」という言葉や酒を頼りにする、それと似たような精神構造を持

³ 河上徹太郎は「火野葦平君への公開状」（『戦後の虚実』文学界社、1947年10月、39頁）において、葦平の文学から「人情の美しさ」を見出したと言っている。

⁴ 鶴島正男は「特集 名作の舞台を歩く／火野葦平」（『火野葦平とゆかりの人びと』株式会社ゼンリンプリントテックス、2010年、27頁）において、「糞尿譚」は「後に庶民作家と目されるに至る道筋をうかがわせるに十分な作品であった」と述べている。

⁵ 増田周子「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」『国文学（96）』、関西大学文学会、2012年3月、273—293頁。

⁶ 火野葦平には、「糞尿」を題材とする小説が三つある。最初の二作品は同名で「糞尿譚」と作者は称している。その中の一つ目は1937年11月に『文学会議』に発表され、翌年に第6回芥川賞を受賞したものであり、二つ目は「糞尿譚」として1950年2月に『キング』に発表され、収録される際に一部は「中国糞尿譚」と改題されている。最後の作品は1957年10月に『別冊小説新潮』に発表された「インド糞尿譚」である。

⁷ 丸山昇『ある中国特派員 山上正義と魯迅』（中央公論社、1976年8月、119頁）によると、「阿Q正伝」が日本国内に初登場したのは1928年であり、井上紅梅によって日本語に訳され、翌年11月に雑誌『ぐるてすく』に掲載されたのである。その後の1931年頃、松浦珪三と山上正義の訳本が、日本で初めて単行本として刊行された。

っている。

「糞尿譚」は、若い頃から中国文化や文学に親しみを持ち、中国の文化に対する憧れのようなものを生涯に渡って抱いていた葦平が、出征する直前まで執筆していた小説である。その横に、魯迅「阿 Q 正伝」を置いてみると、どのような類似性が見えてくるのか。多くの論者は言及していない。本稿では両作品の主人公である彦太郎と阿 Q を手掛かりに、そこを明らかにしたい。そのことはまた、葦平文学における庶民性の問題に新たな光を当てることにもなるはずである。

2. 「阿 Q 正伝」と「糞尿譚」の成立

「阿 Q 正伝」は魯迅の諸作品において唯一の中編小説である。最初は 1921 年 12 月から翌年 2 月まで新聞『晨报』の付録に、毎週一章ずつ連載されていた⁸。この作品が日本国内に初登場したのは 1928 年であり、井上紅梅によって日本語に訳され、翌年 11 月、雑誌『ぐろてすく』に掲載されたのである⁹。その後の 1931 年頃、松浦珪三と山上正義の訳本が、日本で初めて単行本として刊行された。これは「糞尿譚」の発表よりわずか 6 年ほど前のことである。

知られる通り、「阿 Q 正伝」は「第一章 序」から「第九章 大団円」まで九つの部分からなっている。魯迅が自分の郷里浙江省紹興府付近の農村における辛亥革命という一大政治事件を背景に、彼の身近にいる一人物をモデルにした作品と言われる。それと同じように、1937 年に発表された「糞尿譚」も、政党政治が声高に叫ばれていた背景の中で、葦平が生地の福岡県北九州市若松を下敷きに、常に玉井組に出入りしている一市井の民をモデルにした作品である。

ところで、葦平が 1953 年に発表した小説「花と龍」の中には、金五郎（葦平の実父）が風呂に入っている時、友田喜造という人物がタオルで、腰のまわりを巻いて入ってきて「井上安五郎と手を切って、民政党に入ったら、どうな」¹⁰と、金五郎を誘う場面がある。これは 1930 年のことだと葦平は「花と龍」で書いているが、「糞尿譚」にもそれと同じシーンがある。作品に出てきた赤瀬春吉という人物が、

⁸ 魯迅『魯迅全集 第一巻』、人民文学出版社、1981 年、527 頁。

⁹ 丸山昇『ある中国特派員 山上正義と魯迅』、中央公論社、1976 年 8 月、119 頁。

¹⁰ 火野葦平『花と龍（下）』、岩波書店、2006 年 3 月、17 頁。

町から相当離れた海浜にある温泉に一人で浸っているところへ、友田喜造が突然現れた。友田は湯船に入って間もなく赤瀬に民政党に入党してもらいたい旨を告げた。それを赤瀬は拒否した。葦平によると、作中の赤瀬春吉は父玉井金五郎¹¹がモデルである。このことから、1930年代初頭が「糞尿譚」の時代背景となっていると推測される。事実、筆者が2016年5月に玉井史太郎を再訪した時、氏からも次のような証言を得た。

当時、若松は民政党っちゅうかねえ、いわゆる吉田磯吉を中心に、こう、いわゆる普通「民政にあらずんば人にあらず」というようなねえ、そういう、そのう、若松だからねえ。そういうのが背景にあるから、だからもう、そのう、1937年当時からはもう、だんだん戦争に突っ込んでいくからですねえ。もう、いやな軍事色一色になるから、もう政党どころじゃないというのがあって、その以前の話として、ねえ、やっぱりあるんだと思うんですからねえ。だから、昭和5年ごろ、あのう、若松市議員の選挙があって、民政党が、そのう、17人を公認したら全員通るわけですねえ、公認候補が。金五郎たちはそのう、それに反対する立場に立っているということで、だから、その当時の雰囲気はその作品の中に書いてあるんだと思いますね。¹²

以上見たように、葦平が1937年に書いたこの「糞尿譚」は、実際は昭和5年（1930年）の総選挙前後を背景に彼の生家のある若松に対する一スケッチなのである。葦平がプロレタリア文学作品を耽読しながら労働運動に挺身した時期でもあり、先述したように、魯迅「阿Q正伝」日本語訳の単行本が日本で初めて発行された時期ともほぼ重なっている。取りも直さず、プロレタリア文学が盛んになった1930年代初頭、洞海湾で玉井組の若親分として「ゴンゾウ」たちと共に働いていた葦平が、プロレタリア作家でもある魯迅の作品に接近しようとしても無理はなかろう。

辛亥革命と昭和5年の総選挙。ともに政治的事件をバックグラウンドに、作者の

¹¹ 火野葦平『火野葦平選集第一巻』、創元社、1958年5月、423頁。

¹² 2016年5月、北九州市若松区の河伯洞にて玉井史太郎氏と面談。

身近にいた実際の人物を主人公に取り入れている両作品。その中には、歴史の渦巻きの中だけでもがいている一庶民の姿、及びその民衆の実相に対し、両作者が温かい眼差しで示した関心が描かれている。その成立からも、葦平は「糞尿譚」を執筆した際、すでに魯迅の「阿Q正伝」を念頭に置いていたと考えられる。

3. 家系に見る両主人公の類似性

「阿Q正伝」では、主に「第一章 序」の部分で阿Qの家系が述べられている。一方、「糞尿譚」ではそれほどはっきりとした章節の区切りが見られないが、それでも彦太郎の家系の説明には、葦平が魯迅から受けた影響が窺われる。

まず「阿Q正伝」の語り手の「私」は、阿Qの姓が何と、阿Qの名はどう書くかは知らぬ、わかっていないと語っている。そして、阿Qの原籍についても即断はできない。家がなく、未荘の土地廟に住んでいる彼は、たまにほかの者と口論する時などに、目をむいて自分は昔偉かったのだと相手にアピールする。つまり、阿Qははっきりとした素性を持たず、ただ未荘という共同体に弾き出され、村はずれにある土地廟に住んでいる、いつも人々に馬鹿にされている一人の日雇い工にすぎない存在である。

それとはやや異なり、「糞尿譚」の中の彦太郎は名字も名前も持っており、結婚して子供達もいる。けれども、もともとは坂田村の豪農でありながら鬱勃たる事業欲を抑えることができなかつた彼は、山林の一部を抵当に入れ信用会社から資本の融通を受けるまでして糞尿汲取業を開始したが、結局うまくいかなかった。そのため、家の経済が壊滅に瀕し、村にも家にも帰られなくなって、海浜に近い野原の片隅に小屋を建てて不自由な自炊をするはめに陥った。それだけではなく、村の誰彼が彼を目にすると「低能」「阿呆」「お人よし」と、嘲笑している。

このように、彦太郎の持っている家系は阿Qのそれよりややはっきりしているが、結局、営業の許可の問題をはじめとしたいくつかの原因により、彼は阿Qと同じように周縁化され、村はずれの辺鄙なところで生計を立てながら、村人にいつも馬鹿にされている。

また、張旭東は「阿Q正伝」の「第一章 序」に目を向け、その重要性について次のように論説している。

姓も、名も、籍も、跡継ぎも持たないという、「阿 Q」の形式的（あるいは言語学的）定義は、「阿 Q 正伝」の「物語性」の基礎となり、またその説話の展開がある「深層心理」を表現する可能性を与える。（…）阿 Q を命名することの困難さを語る説話の展開には、この小説全体の構造設計が含まれている。¹³

張によると、「序」の部分で阿 Q の身分が特定できないからこそ、その後の物語の展開は可能になったのである。阿 Q は身分を持たないのだが、同時にそれを変えることで、共同体の承認を得たいと望んでいる。これは帰属感を求める戦いである。従って、阿 Q の脈絡のない愚かな行為は、すべて自らのアイデンティティーのために奮闘し、自らのために名分を争っているものなのである¹⁴。

仮にそうであるなら、葦平は「糞尿譚」の冒頭の部分も小説全体の構造設計を含めているのではないか。「糞尿譚」の冒頭の部分で、糞尿汲取業を始めたことで家も妻子も先代から受け継いだ財産も失ってしまった彦太郎は、たとえ村人に疎遠にされても、馬鹿にされても、自分の事業を成功させて妻子と近い将来笑って手を取り合うため、糞尿汲取人組合を発足しようとしたり、赤瀬からの援助を受けたり、嘆願書の作成を依頼したりして、あらゆる手段を最後まで試している。これはつまり、何もかも失い村人の笑いの種になっている彦太郎は、一方では人々から離反され、村はずれの辺鄙なところに住まわされた運命を背負っている。と同時に、他方ではまた、そのような境地にいた彼は最初から最後までありとあらゆる努力を重ねている。自己の再定義に「私」が疎外された共同体へ回帰しようとするところで、阿 Q との共通点がはっきりしている。そして、二人とも予期せぬ結末を迎えている。

4. 彦太郎の「精神勝利法」

彦太郎の「精神勝利法」は、以下の「今に見て居れ」、「酒好き」、「大爆発」の三つの面から窺える。まず、「今に見て居れ」を見てみよう。

¹³ 張旭東 橋本悟（訳）「中国モダニズムの起源における『名』『言』の辯：『阿 Q 正伝』再読」『中国：社会と文化（第 30 巻）』、中国社会文化学会、2015 年 7 月、179 頁。

¹⁴ 張旭東 橋本悟（訳）「中国モダニズムの起源における「名」「言」の辯：『阿 Q 正伝』再読」『中国：社会と文化（第 30 巻）』、中国社会文化学会、2015 年 7 月、180 頁。

4.1 「今に見て居れ」

「阿 Q 正伝」では、前半の「第二章 勝利の記録」と「第三章 続勝利の記録」で阿 Q の「精神勝利法」が集中的に描かれている。将来おそらくは秀才に変ずる文童の父親である趙旦那と錢旦那に対して、村人は深い尊敬を払っている。ところが阿 Q だけは、精神的にとくに尊敬を払う態度を示さなかった。「おれの息子ならもっと偉くならあ」と彼は考えていたのである。

また、頭上ができものために禿げていることにより、未荘のひま人どもにからかわれる時、阿 Q は自分の頭上にあるのは高尚な、立派な禿であって、ありふれた禿でないことだと思った。それが原因で相手ととうとう殴り合いになった時、阿 Q は赤茶けた辮髪を捕まえられて、壁へゴツンゴツンと頭をぶつけられ、形式的には負ける。しかしながら、相手がそれでやっと満足して意気揚々と引き上げると、阿 Q も「おれはまあ、せがれに殴られたようなものだ、いまの世の中はまったくなくならん」と思い、自己満足して意気揚々と引き上げる。

このように、阿 Q は挫折に直面する時、常にこの種の己の敗北を勝利に転ずる自己欺瞞という精神構造を以てその場限りの満足感を覚える。彼は強い者に苛められても反抗することを知らない。いつも「精神勝利法」で自己満足の論理を考え出す一方、その捌け口を弱いものに向けていく。

阿 Q のこの「精神勝利法」と同じように、「糞尿譚」の彦太郎も同類の精神構造を持っている。商売を始めてからの 10 年間に、先祖から残された山林田畑はもとより、家屋敷まで悉く人手に渡った彦太郎は、あるものとしてはただ「今に見て居れ」という彼の執念ばかりとなった。ゆえに、村人に低能だの阿呆だのと嘲られると、「今に見て居れ」という言葉は彼の宗教のようになった。

この「今に見て居れ」という言葉も、人々に低能だと罵られることがあったら、幼い頃に母から聞いた「長助の話」が彼の記憶に残っているため、自分は決して頭が悪くないと彼は自負したということも、阿 Q の「おれんちは昔は一お前よりずっと偉かったんだぞ」というセリフと同じように無根拠である。つまり、彦太郎は阿 Q と同じように口からの出まかせによる以外に、自分の優越感を示す手段はない。そして、事実、彦太郎が夢見ていた糞尿汲取業は最終的には達成せずに終わってし

まう。しかしながら、彼は、糞尿汲取業に対する執念から、阿 Q と同様に村人に馬鹿にされても、その主観的願望を含めた私的言語で自分に言い聞かせることで、機嫌を直し、自己満足の精神構造を常に保っている。

また阿 Q は、共同体の一番端っこに住んでいる、塵のような存在であるにもかかわらず、高いプライドを持って周りの人間を自分の眼中に置こうとしない。それは阿 Q の「自尊心」や「負けず嫌い」には、上下の等級秩序を肯定したいという強い衝動が含まれているからである。つまり阿 Q は、意識的或いは無意識的に彼自身を最下層に押しやっただけにその等級制度に賛同し擁護しながら、精神的には自分をこの等級の最上段に置こうとしている。そうすることにより、彼は自らの心の中で新しい等級秩序を成立させ、それで自己膨張するのである。これが阿 Q の抽象的な「勝利」の感覚の、隠された「出所」なのである。

それと同じようなメカニズムで、彦太郎の「今に見て居れ」という口癖の中にも、彼が村人によって定着させられた身分の差を肯定しながら、糞尿汲取業を成功に導くことで、自分もいつか周りを凌駕するような位置に立つ日が来るであろうというニュアンスが読み取れる。

4.2 酒好き

阿 Q の楽天的な要素は彼の「嗜眠」や「忘却」などのような習性にも潜んでいる。阿 Q は外で屈辱を蒙ると、すぐそれを忘れること、或いは土地廟へ戻ってぐっすり眠ることにより、自らの思考や想像を遮断する。その習性は、阿 Q の周囲の人間関係やいつも馬鹿にされている現実を結局はいささかも変えることはないが、阿 Q はそうすることにより彼を取り巻いている現実の不条理から目を逸らし、一時の安息を得ることができる。と同時に、それらもまた阿 Q が以前のごとき日常に立ち戻るための必要な手段でもある。

一方、彦太郎は「嗜眠」の習性は持っていない。けれども、彦太郎は酒好きである。彼の酒を飲む行為には、阿 Q の持っているような楽天的な要素が隠れている。次の一節を見てみよう。

栓を取って覗いてみると、半分程あるらしいので、彼は人の好きそうな笑いを

浮かべ、湯呑茶碗について、ごくごくんと飲んだ。咽喉を通る痺れるような気持ちや嗜むように目をつぶり、右手で胸を押さえ、しばらくじっとしていた。食道をすぎて胃袋に入っていくのがはっきりわかり、精気がついたように身体中が膨れて来るのを感じた。これで今日も一日元気で働けると思い、彼の苦難に満ちた四十五年の生涯が、この一杯の焼酎の中に溶け込んでしまったような、洋々とした気持ちになった。¹⁵

これはつまり、彦太郎は日々ほろ酔いの状態を保っていることで自己麻痺する。それで汚い仕事に取り組んでいる関係でいつも人々に蔑まれているという、彼の目の前の厳しい現実から目を逸らせ、微風だにたっていない海面のような静かな、一心不乱の心境を求めようとしている。

従って、酒を飲んで集金に行こうとしている彦太郎は、自分の糞尿汲取業とライバル関係の市立塵芥焼却場で働いている三人の男とばったり出会い、彼らに侮辱されてもブリキ缶や釘の折れなどを投げられても振り向こうともせず、「今頃は半七さん、何処にどうしてござろうぞ」と、悠々と歌いながら町のほうへ出て行く。

4.3 大爆発

最後に、彦太郎の精神構造に見られる阿 Q のそれとの類似性は次のシーンからも見て取れる。最終的に事業で失意のどん底に沈んでいた彦太郎は手下とともに、集めて来た糞尿を唐人川尻の壺に捨てに行く。しかしながら、その糞壺の傍らに半纏を着た男七、八人が、彼らの糞尿捨てを阻止しようとしているところで、彦太郎はついに爆発する。

「貴様たち、貴様たち」と彦太郎は狂気のごとく叫びながら柄杓を壺につけては糞尿をまき散らした。そこから飛び出す糞尿は彦太郎の頭上からも雨のごとく散乱した。にもかかわらず、彼は自分の身体を濡らしながらものともせず、「次第に湧き上がって来る勝利」の気魄に打たれ、糞尿に濡れた唇を動かして「もう俺は弱虫ではないぞ、馬鹿ではないぞ」と絶叫し出す。

¹⁵ 火野葦平「糞尿譚」『火野葦平選集第一巻』、創元社、1958年5月、8頁。

ここでは、まき散らした糞尿が自分の頭上に降りかかった時に彦太郎は叫びながら、心の底から「次第に湧き上がって来る勝利」の果実を味わったという心理に注目したい。これはまさに阿 Q が賭博に勝った金を誰かに持っていかれた時、自分を殴ることで他人を処罰するような気持ちになった、己の敗北を勝利に転ずる自己欺瞞という「精神勝利法」そのものではないか。

彦太郎の生活が、赤瀬やその身内の安部などに食い尽くされ、破滅のどん底に突き落とされたところで、彼は捨て身の勇気を奮い起こし、圧迫する外界に対して最後の一点で抵抗した。だがその反抗は全く空虚な、絶望的発作にすぎなかった。彼はその反抗を以て追い詰められた破滅に瀕している生活の現状を少しも打開していなかった。ただ阿 Q 同様、最後まで和解を求めながら、生活の危機を精神的な美化において飛び越え、それで自己陶醉するだけである。

5. 彦太郎の「浮気の悲劇」

精神構造だけではなく、主人公をめぐる物語の展開からも、両作品の近似性が窺える。以下では「彦太郎の『浮気の悲劇』」と「『糞尿譚』の『大団円』」と、二つの部分に分けて検証してみよう。

「阿 Q 正伝」第四章では、阿 Q の「恋愛の悲劇」が描かれているが、その前に阿 Q は「ひげの王」と銭旦那の長男の「ニセ毛唐」と喧嘩して屈辱を蒙った後、静修庵の若い尼さんと出会った。

「どうして今日は、こう裏目、裏目と出るのかと思ったら、おめえに会ったって寸法か」と思った彼は、突然手を伸ばして尼さんの剃りたての頭を撫で、笑いながら「ツルツル頭、早く帰れ、和尚が待ってるぞ」と言った。そのことをずっと見ていた連中が、どっと笑った。すると阿 Q は、自分の手柄が「賞賛」を博したかのように、ますます意気揚々となって、「和尚なら手出ししていいが、おれはいけないってのかい」と言い、また尼さんの頬をぐいとつねった。そのようにならされた尼さんは半分泣きながら、「跡取りなしの阿 Q」と喚いて去って行くと、阿 Q も居酒屋にいた連中も得意げに笑った。

このこと以来、阿 Q は彼なりに女を真剣に考えるようになった。ある日、阿 Q が地主趙旦那の家で一日米搗きをして晩飯を済ませてから、台所で一服つけていた時、

趙旦那の家のただ一人の女中である呉媽が、食事の後片付けを終えて阿Qに話しかけて来た。

すると「女……呉媽……この若後家」と阿Qは考え、「おれ、お前と寝る、お前と寝るだ」と、急に飛びかかって呉媽の前にひざまずいた。突然襲われた呉媽が「キャー」と大声で喚きながらあわてて逃げ出した後、彼女に手を出したことで趙旦那の息子に殴られた阿Qも、とうとう裏門から逃げ帰った。このように、阿Qの「恋愛」は失敗に終わってしまった。

「糞尿譚」にも、これと同じような展開がある。

子供たちに馬鹿にされてから、彦太郎は赤瀬春吉の婿の安部と一緒に食事を取りに行く。「この商売をしていると、変な人の秘密がわかったりして、中々面白いですよ」と、彼は糞尿を汲取りしている最中に用便中の女の足が見えたりするような話を打ち明けたら、「わあ、これは聞き捨てならぬぞ、痴漢小森彦太郎便所を覗くの図か、君はそいつを見ようと思ってこの商売をして居るんだろう」と、安部にからかわれた。そう言われた彼は、するりと迂り出したように止処も無く、一層はずんだような口調である夕暮れ時、糞尿汲取りをしている最中に見たある女の話を喋りだした。

彦太郎はすでに結婚しているので「恋愛の悲劇」とは言えない。しかしながら、彼も阿Qも、周りにいる人間からのからかいを「賞賛」だと思い込み、我を忘れたように「一層はずんだような口調」ではしゃいだり、あるいは「ますますいい気持ちにな」ったりするようなところで合致点が見つかる。これは、これまで述べたように、二人はいつも馬鹿にされている環境の中に浸っていることから起因している。自分を包摂している外的な環境から受けた心理的なトラウマを、ここで示したように異性を排斥することから、その排泄口を探し、そこから来る他人のさらなるからかいを「賞賛」と錯覚するしか、自己存在を導き出すことができなかった。

またある日、彦太郎は温泉に行った。酒を飲みながら寛いでいる彼は、そこで働いている美しい女を見て、夕暮れ時、便所の汲取口から見た女の身体が眼の先にちらつき、天魔に魅入られた如く、邪念から逃れ去ることができなくなった。彼はとうとう目の前にいる女に手を出した。

すると、「あんた、衛生舎の小森さんでしょう、冗談はよした方がよいですよ」

と女に怒られた彼は突然、この女は赤瀬大将の情婦だということに気づき、さっと色青ざめ、見る間に酔も醒め果ててがたがたと顫え出した。結局、何回も詫びをしてから、彦太郎はあわてて去って行った。

尼さんの頭を撫でた刺激から呉媽に手を出した阿 Q と同じように、彦太郎も偶然にある女の体を見たことが思い出されてとうとう我慢しきれず、それを現実的な行動に転じて温泉の女に手を出したのである。つまり二人とも、想起によって過去に出会った女という経験から性欲をそそられ、それで目の前にいる女を通してその欲望を満たそうとしている。そして二人とも最後には失敗して、あわてて逃げ去っている。

6. 「糞尿譚」の「大団円」

革命騒ぎのどさくさの中で強盗事件が起こり、阿 Q はその犯人に仕立て上げられ、突然夜中に捕まえられて県城へ連れて行かれる。

広間で頭をテカテカに剃った老人のいい加減な裁判で、阿 Q は死刑と宣告されるが、翌日に一台の幌なしの車に担ぎ上げられるまで、彼はそれに気づいていない。従って目の前に置かれた判決書に「丸を書け」と言われた彼は、ただ人に笑われまいと思い、渾身の力を振り絞って判決書に丸を書く。このように、阿 Q は滑稽なままで次の日に最期を迎える。

「糞尿譚」の終章も「阿 Q 正伝」のそれとよく似ている。

糞尿汲取業がいよいよ市営となる時期が切迫してきて、安部はこれからの利益分配をめぐる公正証書を彦太郎の前に出し、これに捺印して貰いたいのだと彼に言う。すると彦太郎はわくわくと胸の高鳴るのを覚え、「こういう書類のことなどは一向わかりませんから、よろしく願いいたします」と言って、ポケットから黒い皮のサックを出して、阿部の方に押しやる。

それを受け取った安部は、書類に印を付けてから、ようやく赤瀬春吉五割、阿部丑之助二割五分、小森彦太郎二割五分という分配の仕方を彦太郎に打ち明ける。この分配率を聞いた彦太郎はただ震える以外にどうしようもできず、これまで夢見ていた事業を簡単に他人に乗っ取られてしまう。

要するに、彦太郎にしても、阿 Q にしても、先方に突き出された書類を前にして

内容が一向にわからない、或いは字を知らないことが近因となり、それぞれわけのわからぬままに滑稽な最後を迎える点で二人はまったく同じである。

仮に、魯迅が阿 Q を主人公とすることにより、中国の旧民主主義革命である辛亥革命が起こっても、中国民衆の共有している愚昧や奴隷根性は依然として存在しているという深刻な問題を提起しようとしたのであれば、葦平も、魯迅と似たような問題意識を持っているとみなしても大過なからう。1930 年代初頭における日本国内の政治的動向を念頭に置いている葦平は、彦太郎を通じてたとえ政党政治が盛んに叫ばれていても、結局、普通の庶民は相変わらず親分子分、威嚇と買収、妥協と三角関係などのような旧時代の生活道徳に深く根をおろし、最後まで滑稽なままで生きていくしかない、まさに魯迅と同根の問題提起をしようとしたのではないか。自らがばらまいた糞尿が頭上から降りかかったため、あたかも一匹の黄金の鬼と化したような彦太郎は、佐原山の松林の陰に没し始めた夕日の赤い光に照らされて、燦然と光り輝いている。この最後の場面を以て彦太郎なりの「大団円」を迎えている。

最後に補えば、両作者が置かれている社会的状況、及び作家の文学的資質がかなり異なっていることもあり、ともに一庶民を作品の主人公として描いた葦平と魯迅は、登場人物の階級性¹⁶に対する認識などがかなり異なっていると思われても不思議はなからう。また、たとえ「阿 Q 正伝」から影響を受けたとしても、葦平が魯迅

¹⁶ 阿 Q は未荘の最下層に生きている無智蒙昧な日雇い労働者（雇農）である。彼の階級属性は農民階級で、階級社会におけるもっとも貧しい農民の典型である。しかし、彼の身に集約されている麻痺、愚昧、未覚醒、奴隷根性といったような悪習は農民階級特有のものだけではない。「第一章 序」の部分で阿 Q の正体がはっきりと書かれていないことなどから、阿 Q をある特定の人物や階級に限定することが望ましくないという語り手の狙いが窺える。阿 Q が代表するこの中国人の性格は、当時の中国の下層民のみならず、中間階級の人間にも、上層階級の人間にも及んでいる。言い換えると、阿 Q は中国人の国民性の結晶であり、彼は中国人の普遍的な、民族的なマイナス面の一般的な性格を巧みに具現している人物である（増田渉『魯迅の印象』、角川書店、1970 年 12 月、260—261 頁）。

それに対して、彦太郎は「阿 Q とはすなわち中国である」のような高いレベルでのアレゴリーや深度のメタファーを持つことは不可能に近い。彦太郎も社会的にもっとも下の位置に生きている糞尿汲取業者であるが、彼は豪農の息子として歓楽におぼれた過去がある（火野葦平『糞尿譚・河童曼陀羅（抄）』、講談社、2007 年 6 月、243 頁）。作品の中で没落したとしても、彼はプロレタリアートとは違い、糞尿汲取業者として自分の貨物自動車と従業員を持っており、しかるべき労働をしている。確かに、彼は最終的に糞尿汲取業の利得権を根こそぎ奪われてしまった。しかしながら、ある意味でそれはライバル関係の塵芥処理業者たちと競って我先にブルジョアにのぼろうとしている彼が、その勝ち負けの中で負けたということである。

その点、阿 Q は革命に参加しても、革命の意味とは何か彼には全く分かっていない。彼にとっての革命とはごく簡単に言えばこれまでの支配者から物を奪うことに過ぎない。結局、強盗事件の冤罪で逮捕され手元には何も持たずに死んでいく。同じような結末が描かれていると言っても、それぞれが置かれた位置も意味も全く異なっている。

の思想的立場を深層的に理解したうえで「阿 Q 正伝」を自作に取り込んだのかという、必ずしもそうとは言い難い。にもかかわらず、それこそが葦平の作家的力量とももの考え方のレベルであったとすれば、影響を受けたと言える。筆者は考える。

7. 小括

以上、彦太郎と阿 Q を手掛かりに、葦平「糞尿譚」に見る魯迅「阿 Q 正伝」の影を考察した。ここまで論じたものをもう一度整理してみると、次の通りである。

まず、彦太郎の家系は阿 Q のそれよりややはっきりしているが、結局、営業許可の問題をはじめとしたいくつかの原因により、彼は阿 Q と同じように周縁化され、村はずれの辺鄙なところで生計をたてながら、最初から最後まで様々な努力で自分の取り組んでいる糞尿汲取り業を成功させようと、共同体への回帰を試みている。

だが、事は彦太郎の思う通りには行かない。汚い仕事に従事している彼は、常に村人に馬鹿にされている。それだけではなく、塵芥処理業者たちは彦太郎のことを敵視し彼の事業を阻止しようとしている。そのような時、彦太郎は「今に見て居れ」という言葉やお酒などを彼の精神的阿片として他人の嘲笑から目を逸らし、阿 Q の持っている己の敗北を勝利に転ずる自己欺瞞と同類の精神構造を常に保つことで、機嫌を直して自己満足する。

また、阿 Q は「恋愛の悲劇」を経験している。それとは別に彦太郎はすでに結婚しているため恋愛とは言えないが、彼も「浮気の悲劇」を経験する。温泉に行った彦太郎は、そこで働く美しい女中を見て、糞尿を汲取っていた時に偶然に見たある女の体を思い出す。その刺激から性欲がそそられ、目の前にいる女からその欲望を満たそうとする彼は、とうとう女中に手を出す。だが、この女は赤瀬大将の情婦だと気づき、彦太郎は何回も詫びをしてあわてて去って行く。

最後に、糞尿汲取り業がいよいよ市営となる時期が切迫してきた時、彦太郎は安部に突き出された書類を前にして、一向にわからないからすべてを頼むと、何の疑いも持たず判を安部に渡してしまったために、これまで夢見ていた事業を簡単に他人に乗っ取られてしまい、滑稽な状況で彼なりの「大団円」を迎えている。

このように、両主人公に如上のような共通項が見られていることから、葦平は出征前の彼の文学表現における一つの到達点であった小説「糞尿譚」を執筆した際、

魯迅の「阿Q正伝」から多大な影響を受けている、と考えられる。

更に加えると、彦太郎は様々な努力により、彼の抱く内部の欲求、すなわち彼の頭上に高く聳える理想たる糞尿汲取事業を成功に導こうと、彼の生そのものへの日々の営みを続けている。ところが、現実世界の不条理や、金銭的利益を前にした時の人間性の全体への把握能力の不足から、彼は最終的に滑稽のままで挫折する。

「可哀そうなのは人民だ」。川筋気質を生んだ根底そのものに根ざす生活の現場を生きてきた葦平は、この種の批判的リアリズムを以て社会的にもっとも下の位置に生きている糞尿汲取業者に対してヒューマニスティックな関心を示し続けている。この姿勢は、応召する前の彼の庶民観の底流を成している。

さて、1937年7月7日、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発する。葦平は間もなく徴兵され、同年11月5日に一兵士として初めて中国大陸に第一歩を踏み出す。翌年3月、葦平の小説「糞尿譚」が第6回芥川賞に決定した後、葦平は上海の中支那派遣軍報道部へ転属する。その後、「兵隊三部作」に代表されるような兵隊ものを上梓したことで一躍国民的作家としてもはやされるが、ここにいくつかの疑問が浮かび上がってくる。すなわち、作者の葦平は戦争という強制的な死をもたらす状況と対峙しなければならない中で、これらの作品においてどのような文学表現をなすとげ、何を見落としているのか。或いは序章においても触れたように、応召以前に培われた葦平のこの庶民心情が戦場においてどのような一貫性を保っており、またどう変化したのか。果たして玉井史太郎が主張したように、「中国人に対する見方など、『兵隊三部作』を読むと、日本人と変わらない」¹⁷なのか。この一連の問題を究明するために、筆者は戦場における葦平の文学的表現に触れる場所に立っている。

付記

・本稿における原文の引用は、原則として『火野葦平選集第一巻』（創元社、1958年5月）、及び丸山昇訳「阿Q正伝」『魯迅全集2』（学習研究社、1984年11月）

¹⁷ 玉井史太郎『火野葦平とゆかりの人びと』、株式会社ゼンリンプリンテックス、2010年、67頁。

に拠っている。なお、「阿 Q 正伝」に関しては、井上紅梅の訳本（『魯迅全集』、改造社、1932 年 11 月）も参照している。

第4章 火野葦平「麦と兵隊」論—戦争文学への一視点—

1. 問題の所在

昭和10年代の文学研究、ことに日中戦争勃発後の文学状況を問題視しようとする場合、火野葦平の「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）という作品は避けて通ることのできない存在である。「麦と兵隊」は、別名「徐州会戦従軍記」のごとく、葦平が1938年の徐州会戦への従軍体験に基づいて書いたものである。同作は日記体という形式を取り、5月4日に始まり、同月22日をもって終わっている。発表当初はベストセラーとなり、1938年以降敗戦まで盛んとなった戦地ルポルタージュ文学を方向づけることにもなったこの作品は、日本の敗戦を境に一転していわゆる進歩的文学者¹から批判され酷評されるようになる。こうした視座から、現在に至るまで数多くの論者によって論評されているが、その中には、葦平がこの作品を通じて日中戦争に協力した戦争責任があるという論調と、彼はひたすら「民衆」を描いていることで反戦思想を告白しながら軍国主義の犠牲者になったという評価が並行しており、両者の間には乖離が見られる。

例えば、1948年3月に葦平が占領軍による文筆家の追放仮指定を受けた際、志賀直哉らは「兵隊三部作」（「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」）等日中戦時下に書かれた諸作品は「明らかにヒューマニズム立場にあつて、毫も軍国主義的色彩なく」「反戦的色彩すら濃厚であること」²を確信し、証言する。1965年、吉田精一は『現代日本文学史』で「麦と兵隊」を、「戦争のうちに人間的なものを追究しようとするヒューマニズムが流れていて、以後続出した戦争文学中の圧巻となっています」³と評している。しかしながら、安永武人はこの種の読み方を「作品の部分的な一側面をもって、あたかも全体の本質的な特徴であるかのような印象を与える解説」⁴と一蹴して、「麦と兵隊」と「土と兵隊」で削除されている、日本軍

¹ 例えば、岩上順一は『人間の確立』（万里閣、1947年1月、207頁）において、「我々の前には、火野葦平の『麦と兵隊』、『土と兵隊』、『花と兵隊』より発する侵略戦争文学が存在する」と評価している。

² 山岸郁子「火野葦平の公職追放仮指定に対する『異議申立書』と『証言』」『語文（136）』、日本大学国文学会、2010年3月、175頁。

³ 吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、1965年10月、155頁。

⁴ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、9頁。

による中国人捕虜の殺害場面をめぐって、自らの論⁵を展開する。

また、池田浩士⁶は「麦と兵隊」「土と兵隊」の文体を手掛かりに、これらの作品が銃後の読者を巻き込みつつナショナリズムの醸成に関わっていくメカニズムを明らかにしており、松本和也⁷は「麦と兵隊」をめぐると同時代の評や単行本の広告等に注目し、当初は「麦と兵隊」に対する文壇内外の過熱ぶりは、銃後のメディアが「戦争」に向けられた国家的欲望に淫した結果、国民の「戦争」への一体化とパラレルなものであったと指摘している。それらに対して、増田周子は「火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見てきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた」⁸と主張している。

更に、「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐり、歴史学者の成田龍一は川村湊らとの鼎談の中で、葦平を「帝国の眼差し」⁹を持っている作家と捉え、特に「他者」を描写する時にそれがはっきりと表れてくるといふ。一方、玉井史太郎は、報道部にいろいろな制限を加えられても、葦平は身についた正義感を曇らせることなく、一兵隊としての視点を貫いて、戦場における兵隊たちの姿を、敵味方なく温かく見つめている¹⁰と述べる。

以上、「麦と兵隊」に対する数多くの研究からいくつかの具体例を取り上げて論者たちの対立を素描した。要するに、戦争協力の文学なのか否か、これらの論考は今日でも一つの定論まで至っていない。これが、「麦と兵隊」を論ずる際の、或い

⁵ 安永武人は『戦時下の作家と作品』（未来社、1983年12月、17頁）において、「日本軍の残虐行為を描いていることをもって、直ちに反戦思想や侵略戦争への批判を表現しようとしたとみるのは早計である」とし、「そういう残虐場面の描写は模範の兵隊であり、古武士の人情に富む彼が、彼の中に成立している美化された観念的な『皇軍』—『壮大なる戦争』を戦う天皇の神聖で偉大な軍隊にあるまじき行為として反発し批判したのだとみななければ、作品の一貫性が失われる」と主張している。

⁶ 池田浩士は『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』（インパクト出版会、2000年12月、548頁）において、『麦と兵隊』の日記体と、『土と兵隊』の書簡体は、いずれも、作者が戦地の現実を真実味を込めて伝えるのに適した表現形式であるばかりでなく、銃後の答えを思い描きながら、或いは先取りしながら、銃後との会話を重ねるための、極めて効果的なスタイルでもある。この表現形式を通して、火野葦平は、兵隊作家である自分に読者が期待するものを、銃後に送り届けたのだった」と指摘している。

⁷ 松本和也「事変下メディアのなかの火野葦平—芥川賞『糞尿譚』からベストセラー『麦と兵隊』へ」『インテリジェンス（6）』、文生書院、2005年11月、79—91頁。

⁸ 増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究（5）』、2012年2月、関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS、210頁。

⁹ 川村湊その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、123頁。

¹⁰ 玉井史太郎『河伯洞余滴』、学習研究社、2000年5月、26頁。

は葦平を論ずる際の賛否両論になるわけなのである。その溝をどのように埋めていくかが本稿のモチーフである。そのためには、テキスト分析の原点に立ち、「麦と兵隊」をその筋（プロット）や場面（シチュエーション）に忠実に即しつつ精査していく姿勢が大切になってくる。

すこし敷衍していくと、作品のモチーフが作者の主観によって定められる。ある一つの文学作品は、それを作った作者の自己表現と関連すると言える。作家の自己表現は、また作家の現実認識や価値観の次元に還元することができる面がある。しかし、作品を作家の世界観の表出とする考え方は文学作品の理解の仕方の唯一のものではないのである。作品は場合によっては作家の意図を超えて真実を語る。つまり、読者側からすれば、作者の意識していないものが作品に表れてくる。一つの文学作品は表現の客観性としてみると、それを作者の主観の側に還元するのではなく、作中素材は作者の主観的認識を越えてそれ独自の生命を生きようとするのである。文学作品を批評するには、この両方を同時に考えておく必要がある¹¹。「麦と兵隊」に即して言えば、作者の葦平が何を描こうとしているのか（内容）だけではなく、どのように描いているのか（形式）の面も視野に入れ、内容と形式の二面を全体的作品評価の下で統一的に把握することが要求されてくる。けれども、それ以前に、そこではまず論者自身の戦争認識のありようと現実へ関わる姿勢が問われるはずである。それがなければ、どのように緻密な作品分析も結局空しいものに終わるほかないであろうからである。

さて、本章の構成は以下のようになる。本論では、まず作品に出てきた中国人像に着眼し、それらをその文脈に即しつつ綿密に分析することにより、戦場における作者の中国人観の貧弱さ、彼がそのような「異民族」表象を通じて日中戦争に加担してしまったことを検証する。しかし、だからといって、その記述が庶民的な視座を持っていることとは、決して矛盾しない。戦争に協力したとはいえども、作家の主体性が根こそぎ失われたわけではない。それを証明するために、作中に出てくるいくつかの場面に焦点をあてて論じていく。最後に、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性が併存しているのだが、それを同じ創作方法、すなわ

¹¹ この発想は吉本隆明の「漱石をめぐって」（『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月、116—117頁）によるところが大きい。

ち同じ「ありのまま」の表れとして統一的に把握する必要があるというのが筆者が論じたいところである。

2. 「異民族」表象

「麦と兵隊」には、「敵方」の中国軍や中国民衆をめぐる表象が度々出てくる。例えば、「五月十四日」の項、中国兵捕虜に対する描写を引いておく。

捕虜が入り口の門の木に四人座っている。(…)何時でもそう感じるのだが、私が、支那の兵隊や、土民を見て、変な気の起こるのは彼等があまりにも日本人に似て居るとのことだ。然も彼等の中に、我々の友人の顔を見出すことは決して稀ではないのだ。それは実際、あまり似過ぎていて困るほどである。(…)
これは、大きな意味で、我々と彼等とは同文同種であるとか、同じ血を受けた亜細亜民族であるとかいうような、高遠な思想とはまったく離れて、眼前に仇敵として殺戮し合っている敵の兵隊が、どうも我々とよく似て居て、隣人のような感がある、ということは、一寸厭な気持である。(40頁)

一見、ヒューマニスティックな描き方が成立しているように見える。ただし、ここで二点留意しておきたい。一つ目は、「我々と彼等とは同文同種であるとか、同じ血を受けた亜細亜民族であるとかいうような、高遠な思想」とは別次元だと葦平が断言する時、彼自身は、すでに「我々」を「高遠な思想」、或いは「高邁な理想」を掲げている「天皇陛下の赤子」＝「皇軍」として、「究極的価値」と連なることによって「彼等」の前で限りなく優越的地位に立っているという点である。

即ち、葦平が日本軍と殺戮し合っている「敵側」の兵隊に対して、「隣人のような感」を抱いているのは、「高遠な思想」の所有者としてのものではない。それは単なる日常的な次元にまで降りてきた時に抱くところの、いわば普通の日常的生活者としての感情であった。なぜなら、葦平は次のようにも述べているからである。

一家の繁栄と麦の収穫とより外には彼等には、何の思想も政治も、国家すらも無意味なのであろう。戦争すらも彼等には、ただ農作物を荒らす蝗か、洪水か、

早魃と同様に一つの災難に過ぎない。(28頁)

要するに、葦平にとって中国民衆には、戦争に対する当事者としての意識はない。自然災害が外からやってきて「彼等」を痛めつけるように、戦争も外部からやってくるという認識である。「彼等」にとって自分の命と「土の生活」ほど重要なものはない。だから、「彼等」は日本の兵隊を見ると自分の命を守るために「へらへら」と愛想のよい笑顔を作ったり、お茶を出してサービスしたりするのである。もちろん、葦平にとってこれは、一身の安全を図って日本軍へ媚を売る行為であり、「一種の軽蔑に値する」¹²ことであろう。

二つ目は、葦平は中国兵捕虜を一瞥し、彼らの顔が「どうも我々とよく似て」いるので、お互いに殺し合っているのは、「一寸厭な気持」だということである。となると、この「一寸厭な気持」は、中国兵の命を大切に思っていることから発せられたものなのか否か、という疑問が生じてくる。同じような表現が、中国人農夫への表象にも出ている。

中国人農夫に対して、葦平は「木訥」で笑わないタイプの農夫と、日本軍に遭うと「へらへら」と笑うタイプの農夫の二種類に分けて描写している。前者に対しては「親しみを覚え」て描いているが、後者に対しては蔑視に近い眼差しを送っている。例えば、「五月七日」の項、日本軍が中国人農夫を集めて、奴隷化教育を行っている時、葦平は「へらへら」と笑わないタイプの農夫に対し、「限りなき親しみ」をもって次のように描いている。

ここに集まった代表はことごとく、純粋な農夫ばかりと思われ、もとより教育などあろう筈はなく、身体つきは頑丈で、色は真黒に焦げ、顔は折り畳んだような深い皺で刻まれ、伝単を受け取る手は節だらけで八角金盤のように広く大きい。彼等は町の支那人のように日本の兵隊を見てもへらへらと笑わない。黙々と伝単を受け取り、それを読むでもない。(…)私はこれらの朴訥にして土のごとき農夫等に限りなき親しみを覚えた。それは、それらの支那人が私の知っている日本

¹² 火野葦平「花と兵隊」『火野葦平兵隊小説文庫3』、光人社、1979年4月、97頁。

の百姓の誰彼によく似て居たせいでもあったかも知れない。(16頁)

中国兵を描く時、日本軍と殺戮し合っている「敵」の兵隊が、「どうも我々とよく似て居て、隣人のような感がある」から、「一寸厭な気持」が沸いてくる。また、ここに描かれている中国人農夫も、「私の知っている日本の百姓の誰彼によく似て居た」から、「私」は「彼等」に「限りなき親しみ」を感じている。要するに、葦平は中国人の境遇には日本人の姿を見つけたら、中国人に対して「親しみ」を感じ、もし、見つからなかったら「にやにや」或いは「へらへら」と、軽蔑した口調で描く。そうなると、この種の「親しみ」や「一寸厭な気持」は、いったい誰に向かっているものなのか。

また、「五月十二日」には、日本軍の機嫌を取るような行動をする「支那農民」についての描写がある。

小休止をすると、部落では支那人が両手にぶら下げられるだけ鶏を捕えて来て、提供しようとする。兵隊が鶏を追っかけると、竹棒を持って来て手伝うのだ。殺した豚の皮を剥いてくれる。(…)支那人は日本の兵隊を見るとへらへらと御機嫌を伺う例の笑い方をする。此方が馬鹿にされているようだが、彼等は此の危機を切り抜けるために全く一生懸命なのだ。その切実なる努力はもとより笑えないものがある。(33頁)

「我々」を映し出すための、鏡としての「彼等」の表象的構築。「麦と兵隊」だけにとどまらず、葦平は「土と兵隊」¹³(『文藝春秋』1938年11月)と「花と兵隊」(『朝日新聞』1938年12月一翌39年6月)の中においても、日本と「支那」、支配と服従、文明と愚昧、優越と卑劣などのような一連の二項対立主義的な対概念を何度も反復し、やがて非常に強固な二元論的枠組を形成する。それによって後進や劣等などに代表されるような中国人とは異質な自己像が構成されてくるの

¹³ 例えば、「土と兵隊」(『火野葦平兵隊小説文庫2』、光人社、1979年3月、63頁)には、「(中国兵は)手榴弾のためにやられたらしく、氣息奄々としているのや、真っ黒に顔が焦げたのや、顎が飛んでなくなっているのや、左頬のちぎれたのやが、次々に現れた。彼らはべこべこお辞儀をし、手を合わせて、助けてもらいたいというような哀願の表情をした」というのがある。

である。

そもそも敗戦直後にアメリカ占領軍の進駐を前にした日本にも、各地で婦女子の避難が相次ぐなどのパニックがあった。1945年7月、「本土決戦」にあたり葦平は福岡市の西部軍管区報道部に白紙徴用され、そこで敗戦を迎えた。その後、アメリカ軍上陸への恐怖に町中を右往左往している避難民の流れに揉まれながら、宿泊したホテルから報道部へ行こうとしている葦平は、1960年に「革命前後」という彼の作品で当時の心情を次のように吐露している。

昌介（葦平の化身、引用者注）はこの流れを乗り切って、早く報道部へたどり着こうと努力しながら、胸の締付けられる思いから脱れられなかった。こういう哀れな群衆を何度か戦場で見たことがある。（…）昌介は無惨な日本人の流亡の姿にもみくちやにされながら、戦争への憤ろしさ、呪わしさに、ほとんど身体の震える思いを味わっていた。¹⁴

続いて、母へ電話をかけておこうと、公衆電話のある駅の入り口の方にまわった「昌介」は、奇妙な光景を見る。女事務員も交えて、七、八人の駅員達がせっせと紙の小旗をこしらえているのである。日の丸の旗ではなく、アメリカの旗や、イギリスの旗であり、よくみると、「支那」の青天白日旗や、ソ連の赤旗もある。「昌介」はいきなり脳天に雪崩でも落ちてきたような激しいショックを受ける。

戦中、このような人間が、中国にも日本にもいたことを指摘するより、葦平が両国民を見る目が、まったく違っていることが筆者の関心事である。無惨な日本人の流亡の姿に揉みくちやにされた葦平は戦争に対する激しい憤りを抑え切れなかった。しかしながら、日本軍の機嫌を取るために、一生懸命「へらへら」と笑ったり、お茶を出して歓待したりする中国人に対して、ほぼ咎めに近い口調で「此方が馬鹿にされているようだ」と、或いは日本軍に「茶でも飲ませて喜ばせて誤魔化して置いて、早くこの麦畑から追っ払ってしまえばよいのだ」としか、感じ取っていない。

確かに、「庶民作家」といわれている葦平は、生い立ちから来る下層民への共感

¹⁴ 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、115頁。

と連帯を戦場においてもそのまま保っている。そのような庶民的な眼差しが「敵側」の中国民衆にも及んでいる。「麦と兵隊」で葦平は、自分たちが堅持している「美しい理想」が大量死を伴っていると気づいたところに自らの人間的に揺れ動くさまを率直に披露している¹⁵し、川村湊が指摘しているように、彼は一兵士であり一庶民である自分たちと闘っている中国の民衆が、同じ一兵士、一庶民なのだという観念も編み出している¹⁶。しかしながら、総じていえばその基本的枠組みにおいて日本＝「国籍」を超えるものではない。その中に描かれた中国の農民像、即ち戦争すらも自然災害と同じ一過性のものと受け止め、極限状況の中にも挫けず「土の生活を続行する」ような人々の次元においては日本の民衆と聊かも変わらないというこの論理も、植民地主義を正当化する文脈で用いられる時、「敵対者からの眼差し」によって中国民衆に投げかけた偏見を根本から変えることはない。

3. 作家の主体性

前節では、「麦と兵隊」における葦平の中国人観の貧弱さを考察した。しかしながら、当時の歴史的な状況を念頭に置いて考えると、「麦と兵隊」が従軍記である以上、中国の民衆に対する差別意識を葦平の作品が内包していることは、むしろ当然だといわざるを得ない。そして、この作品が帝国主義の国策に沿っているものである¹⁷としても、葦平の作家としての主体性が根こそぎ失われたわけではない。

以下では、作中に出てくるいくつかの場面に照準をあわせて検証していくが、その前にまず当時の軍部が葦平に執筆にあたって加えた検閲を押さえておこう。葦平自身がいっているが、戦中、「兵隊もの」を書く時に、一、日本軍が負けていることを書いてはならない、二、戦争の暗黒面を書いてはならない、三、味方はすべて立派に、戦っている敵はすべて憎々しくいやらしく書かねばならない、四、作戦の

¹⁵ 例えば、「麦と兵隊」(『火野葦平兵隊小説文庫 1』、光人社、1978年11月、81頁)において、多くの「支那兵」の屍骸を見た「私」は、自分が「この人間の惨状に対して、しばらく痛ましいという気持を全く感ぜずに眺めて居たことに気づき、「私は感情を失ったのか。私は悪魔になったのか」と自問する。

¹⁶ 川村湊・成田龍一その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、118頁。

¹⁷ 1938年6月6日、友人の劉寒吉宛の手紙の中で葦平は、「俺としては、兵隊として軍の方針に従い、この頃はやる言葉ではないが、『国策の線に沿う』仕事をしなければならぬと思っているのだ。それは芸術の墮落では決してなく、むしろ、新しい使命だと思う」(『作家の自伝 57 火野葦平』、日本図書センター、1997年4月、269頁)と書いている。

全貌を書くことを許さない、五、部隊の編成と部隊名を書いてはならない、六、軍人の人間としての表現を許さない、七、女のことを書いてはならない¹⁸、という表現制限事項を加えられていたようである。では、この外圧的な悪条件を葦平は一体どのように克服して作家としての内的主体性を保とうとしているのか。

さて、5月8日に行軍の疲れで小休止したある部落で、桑の木の下の方筒形の石の上にみすばらしい老婆が一人腰掛けている。最初老婆は日本の兵隊をおどおどした眼つきで見ていたが、やがて立ち上がると、腰をかがめて歩き出し、何やら手を上げ下げし、妙な身振りをして泣き始める。老婆に泣いた理由を尋ねた梅本は、「あれは、支那の兵隊は部落に来ると、米も銭も衣服も姑娘も何もかも洗いざらいを持って行ってしまいが、日本の兵隊は何も盗らないから非常によい、と追従を言っているのだ」と説明している。

老婆が「我々」に感激しているような描写である。制圧者である彼らが、その被害から先住民を守ってくれる親切な介入者であることが主張される。そうすることによって、「敵」の中国兵と現地住民の好意獲得競争が行われ、彼女らを「悪」から救い出すという大義名分によって自らの植民地主義を正当化するのである。日本軍の征服行為を容認して反対の声を挙げない同意者として、この老婆のような先住民がいれば、申し分がなかったろう。

ところが、ここで「追従」という言葉に注目したい。老婆が「追従」をいっていると書いている時点で、「日本の兵隊は何も盗らないから非常によい」という言葉の真実味はある程度失われていると考えられる。つまり、この作品が単に侵略戦争の正当性や日本軍の善良さといったものを銃後にアピールする目的で意図的に書かれたのならば、寧ろ「追従」という言葉を入れなかった方がより好都合なはずであろう。

また、同じような場面について、

百に近い屍体で埋められて居る壕の続きに、沢山の土民が居た。(…)まっ裸の子供を両手に抱えたり、乳を銜えさせたりして居る女が多い。痛ましい眺めで

¹⁸ 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、406—408頁。

ある。彼等の不安の表情は正視に堪えないものがある。兵隊が子供に熱量食の菓子をやって居る。煙草をやる者もある。彼等は猜疑深い表情をし、なかなか受け取らない。兵隊は大喝して銃剣を突きつけた。ようやく子を抱いた女は煙草を手にとった。一口二口吸って、初めて笑った。(81頁)

という箇所がある。このシーンのテーマは日本軍による「好意」であろう。だが、この兵隊が如上のように無理やり中国人女性に「恩恵」を押し付けていることをそのまま表現している葦平は、意識すると意識しないにかかわらず、逆に日本兵の傲慢で支配者的な行動を正面から暴き出しているのではないか。兵隊は女性の意志にもかかわらず、彼女に大喝しても、銃剣を突きつけても自らのやったタバコを受け取らせたい。彼の「好意」に従って服従すれば、生存の権利が認められるが、拒否したり無視したりすると、武力をもって罰せられ、場合によっては命まで落とされてしまう。となると、これを描くことは先述した「戦争の暗黒面を書いてはならない」という軍の制約、及び銃後の日本人に日本軍の美しい姿をアピールするという目的と矛盾することになるであろう。

作品の最後に三人の中国兵捕虜が殺されている。捕虜たちに聞くと、彼らは飽くまで抗日を貫くばかりでなく、「此方」の問いに対して何も答えず、肩を怒らし、足をあげて蹴ろうとしたりする。甚だしいものは「此方」の兵隊につばを吐きかける。それで処分するのである。縛られた三人の「支那兵」は事前に準備してあった壕を前にして座らせられる。後ろに廻った一人の曹長が軍刀を抜く。掛け声と共に打ち下ろすと、首は毬のように飛び、三人の「支那兵」は次々に死んでいく。この一部始終を見ている「私」はどうとう見るに忍びない。

私は眼を反らした。私は悪魔になっては居なかった。私はそれを知り、深く安堵した。(87頁)

もともと、この血なまぐさい殺傷場面は戦時中、軍の検閲で削除された部分¹⁹を、

¹⁹ 安永武人『戦時下の作家と作品』(未来社、1983年12月、27頁)によると、戦中版の「麦と兵隊」では、「甚だしい者は此方の兵隊に唾を吐きかける。(…)掛け声と共に打ち下ろすと、首は毬のように飛び、血が藪のように噴き出して次々に三人の支那兵は死んだ」という部分が削除されている。

戦後、原稿が見つからないまま、作者が「昔を思い出しながら」²⁰書き加えたものである。それゆえ、もし悪意をもって推測すれば、この加筆行為の中にすでに戦後の価値観、即ち「侵略戦争」＝「悪」が反映されていると思われても何の不思議もない²¹。しかし、逆にいうと、その一節が削除されていることから、そこで描かれたものが軍の意向に反しているということはいえるであろう。もし内容的にもとの原稿とはそれほどかけ離れたものでなかったとすれば、軍の検閲にもかかわらず「そのぎりぎりの範囲内」²²で戦場そのものを描こうとしている葦平のこの姿勢を積極的に評価してもいいのではないか。

それに、日本軍の残虐行為を描き、毒ガス使用の事実を、「ない」と否定することで、そこに「痕跡」だけを残しておく²³という方法を取った葦平とは対照的に、同時期に「戦線」（朝日新聞社、1938年12月）や「北岸部隊」（『婦人公論』1939年1月）といった従軍記を発表した林芙美子を想起させずにはおられない。1938年の「漢口攻略」をもとに「戦線」を書簡体で書いている芙美子は、その作品の中で戦列の美しさや兵隊の壮烈な戦死などをひたすら賛美しているだけでなく、中国兵の死体を見た感想を彼女は次のように率直に記している。

私の神経は実に白々とこれらの死体を見守っていられます。（…）日本の負傷者へのあの感傷は、生涯忘れることができませんのに、中国兵の死体は、私に何の感傷もさそいません。²⁴

²⁰ 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、436頁。

²¹ 事実、矢野貫一のように、戦後版「麦と兵隊」と「土と兵隊」における捕虜殺害の場面を捉え、「『麦と兵隊』に二十七箇所、『土と兵隊』に十数箇所の削除訂正があったと言いながら、それぞれ一箇所ずつしか補足しておらぬ。しかも、補足したのはともに捕虜殺害に関する事実であり、ともに虚構の疑いが濃い」（「戦後版『麦と兵隊』『土と兵隊』補訂に関する存疑」『無差（2）』、京都外国語大学日本語学研究会、1995年3月、13頁）と主張している論者がいる。

²² 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、408頁。

²³ 越前谷宏は「火野葦平「麦と兵隊」論—検閲をめぐる攻防—」（『日本文学』65（12））、日本文学協会、2016年12月、47頁）において、検閲をめぐる攻防戦の中、葦平は「兵士の『性』の問題を文学的結構のなかに潜ませ、また、毒ガス使用の事実を、『ない』と否定することで、そこに『痕跡』だけは残しておくという方法を取った」とし、「検閲の網の目をかいくぐって、『戦場』の真実を伝えようという火野は、予想以上に、したたかな戦いを繰り広げている」と評価している。

²⁴ 林芙美子『戦線』、中央公論新社、2006年7月、60頁。

同じ従軍記とはいえ、「敵」の死体を見た時、人間的な揺れ動きや批判的な視点の有無で二作品には大きな違いが見られよう。もちろん、「麦と兵隊」の最後において結果として戦争のある側面の悪を捉えることが安直な自己肯定に短絡したということも否めないし、安永武人が指摘したように、この軍隊批判が作者の意識的な次元において戦争批判へとつながっているとは到底いい難い²⁵。しかし、この場合我々が見過ごしてはならぬことは、作者の価値観と、その価値観に基づいて描かれた世界との間に働く相互作用は必ずしも常に意識的であるとは限らない、ということである。すでに述べたように、作者の真意がどうであろうと、作品が常にその意図を過不足なく表象するわけではない。ある一つの文学作品は一旦表現されてしまうと、それを作った作家、作家をつかさどっている人間性というものとは無関係に、それ自体を一つの客観的な世界として見ることができるのである。従って、本節の分析を含めて、「麦と兵隊」を単純に「侵略戦争文学」と括ることはできない、というような読み方が存在しているのは、作者の思想的立場というより、むしろ作品の自立性、或いは読者の「閲読効果」に重点を置いた所以なのではないか。

4. 「ありのまま」

戦中、改造社版の「麦と兵隊」の「前書」で、葦平はその執筆動機について、「戦場の最中であって言語に絶する修練に曝されつつ、此の壮大なる戦争の想念の中で、なんにもわからず、盲目の如くにな」っていることを告白しながらも、なお「現在、戦場の中に置かれている一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、亦、何か役に立つことがあるのではないかとも考え、取りあえず、ありのままを書き止めて置くこと」²⁶（下線は引用者注）にしたという。

その結果として、すでに指摘したように、中国民衆の小賢しい一面等を表現している葦平は、場合によってはそれ以上のものを読者の前に呈しているし、日本兵の「好意」への描写は、作者の意識と無意識にかかわらず戦争そのものの暗黒さをもある程度曝露している。更に複数の事例から解釈してみる。例えば、「麦と兵隊」の結末のくだりには、捕虜の処分が行われた理由として、「飽く迄抗日を頑張る」

²⁵ 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、17頁。

²⁶ 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、426—427頁。

「足をあげて蹴ろうとしたりする」などがあげられている。それに作中の抗日文句²⁷や激しく苦々しい戦闘場面²⁸を加えて、中国兵への憎悪をつのらせようという意図的のプロパガンダがどうしても払拭できない描写があるが、誤解を恐れず述べるならば、たとえ「「国策の線に沿う」仕事をしなければならぬと思っている」作者が、それを不本意ながら描いたとしても、それらの表現から同時に中国兵の挫けず頑固な反抗ぶりを窺い知ることもできるであろう。

また、「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐり、成田龍一が葦平を「帝国の眼差し」を持っている作家と捉えていることはすでに触れたとおりである。この点に関して成田の意見は説得力を持っているが、その文脈でいくと、葦平の作品が日本植民地支配をそのまま描いたものだとすれば、それは日本軍の負の面を記録した書として寧ろ逆に積極的に評価されるべきであろう。詰まる所、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性が併存しているのだが、それを同じことの結果として、つまり同じ「ありのまま」の表れとして扱わなければ、作品の一貫性が見失われるのである。

ところで、最後にこういう問題が残る。日中両国の民衆に対する葦平の分裂した眼差しをすでに検証した。そして、だからといって、彼の作家としての主体性が根本から失われてしまったわけではない、ということも押さえておいた。更に、作品が内包しているプラスとマイナスの両義性の問題は実は同じ創作方法＝「ありのまま」の表れだということも先ほど述べた通りである。この流れで考えると、次にこ

²⁷ 例えば、「麦と兵隊」「五月十一日」（『火野葦平兵隊小説文庫 1』、光人社、1978年11月、32頁）のところでは、「土の壁には白墨で、大きく『打倒日本帝国主義』『武装起来保衛郷土』『歡迎浴血抗戰將士』『追放日本倭奴』等の文句が書きつけてある」と書いてある。同様の表現が前述の林芙美子の「戦線」にも出ている。中国軍の陣中画報という新聞で「保国家、衛土地、救百姓、殺敵人」等の抗日文句を見た「私は、「日本の軍隊の新聞に、かつて、こんな支那をやっつける悪どい漫画が載ったことがあるでしょうか。全く変なものだ」（『戦線』、中央公論新社、2006年7月、36頁）といている。

²⁸ 例えば、「麦と兵隊」「五月十六日」（『火野葦平兵隊小説文庫 1』、光人社、1978年11月、55—56頁）のところには、「迫撃砲弾はいくつも身邊に落下し炸裂する。その度に何人も犠牲者が出て、血の色を見せられる。ただ、その砲弾が、私の頭上に直下して来ないという一つの偶然のみが、私に生命を与えて居る。貴重な生命がこんなにも無造作に傷つけられたということに対してはげしい憤怒の感情に捕われた。一つの生命をここまで育てるには筆紙に尽くされぬ尊い努力が惜しみなく払われている。（…）然も、ここに居るすべての兵隊は、人の子であるとともに、故国に妻を有する夫であり、幾人かの子を残してきて居る父ばかりである。我々の国のもっとも大切な人間ばかりである。（…）我々の同胞をかくまで苦しめ、且つ私の生命を脅かして居る支那兵に対し、はげしい憎悪に駆られた。私は兵隊とともに突入し、敵兵を私の手で撃ち、斬ってやりたいと思った。私は祖国という言葉が熱いもののように胸一ぱいに広がって来るのを感じた」との一節がある。

の「ありのまま」に対して、我々はどのような態度を取るべきかという問題が当然浮かび上がってくる。戦争というものの本当の姿がある程度描き出されていることは、この「ありのまま」なしには到底達せられない効果としてまず評価するが、それがすべてではないということも自明のことであろう。

更に別の視点から考えると、例えばしばしば指摘されたように、「麦と兵隊」の中で、クライマックスともいえるべき孫圩での戦闘場面を除けば、戦場・戦闘という非日常の時空間より、その中に投げ込まれた日本兵の日常生活に重点を置いて描かれていることがわかる。果てしもなく続く麦畑の中の進軍、兵隊の垂れた血の混じった赤い糞、連日の行軍で足にまめができ、短い休息の間にむさぼるように睡眠を取ったり御馳走を作ったりする、等々の光景がこと細かに描かれている。そして、そういう兵隊の姿に対して、「私」はいつも「限りなく愛しいもの」、「尊いもの」、或いは「逞しい不敵さ」を感じ取っている。

ここでは、葦平が作品の主な素材として何を選び取っているかということと、その素材を彼がどういう目でもって見ているかがはっきりとなってくる。このような「民衆」を拝跪する論理、「民衆」に寄り沿う姿勢のゆえに、葦平を「庶民作家」たらしめていることが可能になったわけであるが、そういう肉眼的リアリズムによって造型された人物像が果たして増田周子が主張しているような「真実の兵隊の姿」²⁹であるかどうか疑わしい。

一般論として、我々は自分の五感を通して現実世界を認識する以外に方法がないので、その意味において、この「ありのまま」は葦平にとっては成立する。だが、言葉を裏返すと、これはあくまでも葦平にとっての「ありのまま」にすぎないともいえる。現に、日本軍は「逞しくなった」「立派になった」という葦平の文章を読んで、兵隊は皆食料不足で痩せこけているのではないか、「火野よ汝は何を見ているのか」と、戦場で激昂する兵士がいた³⁰のである。

ついでにいうと、近年、歴史学における発掘作業がきちんとなされたおかげで、日中戦争下の日本の銃後国民の退廃ぶり³¹が次第に知られるようになってきたが、

²⁹ 増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究 (5)』、2012年2月、関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS、210頁。

³⁰ 吉見義明『草の根のファシズム』、東京大学出版会、1987年7月、65頁。

³¹ 井上寿一『日中戦争下の日本』講談社、2007年7月、18—38頁。

当初は戦場にいた葦平は何らかのルートですでにそれを知っている。「麦と兵隊」の冒頭部分には、次の一節があるのである。

杭州に居る時に、色々な方面で、最近内地の消息が伝えられ、銃後国民の緊張振りは事変勃発直後に比して甚だしく弛緩して居るといふようなことをよく聞いた。(…)今、この荒涼たる戦場の中を走る感懐としては、再び、軽薄な国民に対する憤りが胸の底から湧き上がって来るのを禁じ得なかった。(9頁)

それゆえ、作者によって描かれているこの兵隊像には、銃後の弛緩ぶりを暗黙のうちに批判し、いわゆる銃後と前線を結ぶ非常に強固な共感的な一体感を作り出すメカニズムがあったわけである。いわば、時流に便乗している性格を作品は持っているが、たとえそれがなかったとしても作家が自分の思い込みや意図等によって素材の現実的性格をねじ曲げた以上、作中素材は作家の主観を超えて自らの独自の生命を獲得することが困難だし、作品が時と所を超えて普遍的な意味を生み出すとは思われない。極端に言うと、事実の次元を言葉の次元で表す時、事実ありのままであるはずがない。何を作中に描き、何を捨てるか、いやでも拵えないわけにはいかない。小説におけるリアリズムの問題について、夏目漱石は次のように語っている。

自分が今ここでリアルというのは実際世間にある人其儘という意味ではなくて、作者の想像によって作られた架空の人物でもいいからそれが読者をして今迄曾て見たことも聞いたこともないけれど世界の何処かにそんな人があるように思わせるその力をいうので、これがなければその作物は全然価値のないものだろうと思う。³²

つまり、「虚構」なしには人物をリアルに描けないということである。戦後、葦平は「私は戦場に立派な兵隊がたくさんいたことを知っていた。彼等は立派な行動をした」³³と追想している。金子光晴は、戦場の混乱と兵士たちの苦痛を己の利欲のた

³² 夏目漱石「作中の人物」『読売新聞』、1906年10月21日。深江浩「読む、調べる、味わう（五）—文学への一つの道—」(『あしかび(66)』、太陽社、2004年6月、26—28頁)も参照。

³³ 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、428—429頁。

めの絶好の機会とする日本民衆の薄汚れた、いぎたない顔を見続けているが、葦平は、死を賭した戦場の苦痛に、何でもないように処している民衆（兵隊）のもう一つの顔だけしか信じていない³⁴。しかしながら、自分の見たこと、感じたことをそのままに描いたなら真のリアリズム文学にはならないであろう。それは、言い換えれば、作者は自分の実生活に裏づけられた認識の枠組みの限界性への意識が希薄であったということである。作家がいわゆる素朴な自分の目を意欲的に乗り越えなかったら、本当の意味においての「ありのまま」に到達することは出来ない。それが葦平という作家の創作方法の弱さでもあり、彼が優れた作家として欠如しているところでもある。因みに、その対極にいる作家の例として、例えば大江健三郎があげられる。大江の「ヒロシマ・ノート」には次のような発言がある。「僕は、そうした自分が所持しているはずの自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島のアサリにかけ、広島のアサリをとおして再検討することを望んだのであった」³⁵。或いはまた野間宏のように、人生の中にありつつ、人生を離れて見る位置をたえず模索しつつ生きるという姿勢³⁶を持っているものもいれば、村上春樹のように物語の自律性を尊重し、自作に対する解釈をあくまでも読者側にゆだねようとする³⁷ものもいる。彼らはすべて、自分の従来の価値観、思考の枠組みを乗り越えて、本当にものが見える目に自己の目を作り変えようとする作家の誠実な努力だと言えよう。

最後に付言すれば、「麦と兵隊」や「土と兵隊」³⁸などのような戦争文学におけ

³⁴ 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、163頁。

³⁵ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、岩波書店、1965年6月、3頁。

³⁶ 野間宏はかつて『全体小説への志向』（田畑書店、1969年1月、280—281頁）において、「そう。作家の位置というのは、現実には、この地球上に足をつけてるわけですね。足をつけてるんだけど、もうひとつ架空の位置があって、そこに同時にその足をおいていないといけないと考えている。現実には足がついているということが、同時に架空の位置に足がついていることになっているというのが作家だと思うんです。架空の位置というのは、決してむかしの、星の高みからみているという、スピノザ的な架空の位置じゃないんだな。必ず現実には足がついてるんです。しかし、現実には足がついてるというその足が、また架空の一点についていなければならない。（…）架空の位置ですからね。必ずおちるんですよ。すぐに落ちてくるんですよ。すぐに落ちてくるが故に、ものがみえるわけです」といつている。

³⁷ 川上未映子・村上春樹『みみずくは黄昏に飛びたつ 川上未映子 訊く／村上春樹 語る』（新潮社、2017年4月、116頁）の中の一節を引用する。「村上（…）物語というのは、解釈できないからこそ物語になるんであって、これはこういう意味があると思う、って作者がいちいちパッケージをほどいていたら、そんな面白くも何ともない。読者はガッカリしちゃいます。作者にもよくわかってないからこそ、読者一人ひとりの中で意味が自由に膨らんでいくんだと僕はいつも思っている」。

³⁸ 例えば「土と兵隊」（『火野葦平兵隊小説文庫 2』、光人社、1979年3月、69頁）の最後のくだりには、「我々のはもはや、この進軍をつづけ得るものは、我々の肉体ではないということを知ったのだ。弟よ、兄さんは、どんなに苦しくも、自分の精神力を信じ、勇ましく前進して行くつもりだ」との一節がある。

る国民精神の高揚を声高に叫ばれている戦中であるが、それとは打って変わり、敗戦直後、戦争から帰った作家田村泰次郎は、強い生命主義や肉体の緊張感を美とするような肉体文学³⁹を書き、「私は肉体から出たものでない一切の「思想」を、一切の考え方を、絶対に信じない」⁴⁰と明言する。この考え方は「墮落論」（『新潮』1946年4月）や「墮落論〔続墮落論〕」（『文学季刊』1946年12月）などで、政治や戦略の上で美化された「人間でない」嘘っぱちの聖人から自然本来の人間に戻るよう訴えた坂口安吾⁴¹、或いは「思想とか体系とかいったものに不信—もっとも消極的な不信だが、とにかく不信を示した」⁴²と「世相」（『人間』1946年4月）で告白する織田作之助と、ほとんど等質のものであった。それは敗戦という未曾有の出来事によって打ち砕かれた近代的自我を編み直していく際、イデオロギーにたよらず、自分たちの身体を介在させて思考を繰り広げていこうとする不可避のモチーフだったのであろう。更に敗戦の原因について、坂口はそれを「耐乏の精神」⁴³に求め、田村は「肉体をはなれた私たちの「思想」こそ、その重大な原因の一つだと思」⁴⁴っているが、それらとは違って、葦平は「いろいろ数えあげられる原因の底に、抜きがたく根本的なものと考えられるのは疑いもなく、道義の頹廢と、節操の欠如とであった」⁴⁵と主張する。この点からもまた、葦平のものの考え方や敗戦に対する彼の受け止め方（終章で詳しく検証する）の一端が窺えよう。

5. 小括

³⁹ 例えば、「肉体の悪魔」（『世界文化』1946年9月）や「肉体の門」（『群像』1947年3月）などがある。

⁴⁰ 田村泰次郎「肉体が人間である」『群像2（5）』、講談社、1947年5月、12頁。

⁴¹ 例えば、「墮落論」（『墮落論・日本文化私観』、岩波書店、2008年9月、229頁）の中で、「人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」との一節がある。なお、加藤典洋『敗戦後論』（講談社、1997年8月、136頁）は、坂口の「墮落論」を「戦前には考えつかず、戦後になってはじめて感じるようになったにもかかわらず、そのことを明白にしない（…）文章」であると捉え、戦中から戦後にかけての安吾の一貫性の欠如を批判的に論じているが、その辺の議論については後に触れることにする。

⁴² 武田麟太郎その他『近代日本文学34』、筑摩書房、1976年3月、330頁。

⁴³ 坂口安吾は「墮落論〔続墮落論〕」（『墮落論・日本文化私観』、岩波書店、2008年9月、234頁）において、「日本の兵隊は耐乏の兵隊で、便利の機械は渴望されず、肉体の酷使耐乏が謳歌せられて、兵器は発達せず、根柢的に作戦の基礎が欠けてしまつて、今日の無残極まる大敗北となっている」と指摘している。

⁴⁴ 田村泰次郎「肉体が人間である」『群像2（5）』、講談社、1947年5月、13頁。

⁴⁵ 火野葦平「悲しき兵隊」『朝日新聞』、1945年9月11日朝刊2面。

以上のように、葦平の「麦と兵隊」に対する二つの評価（「戦争協力の文学」と「軍国主義の犠牲者」）の乖離を「ありのまま」という創作意図によって埋めていこうとした。結論をいうと、生い立ちから来る下層民への共感がありながら、作者の葦平が「異民族」の中国民衆に対する差別的な視線を持っていること、日中両国民に対する分裂した眼差しをもって体制と権力に身をすり寄せてしまったことはこれ以上贅言する必要がなかろう。この点では、成田龍一や安永武人などの指摘に賛同する。

にもかかわらず、同作にはほんのわずかだが、作者の志向している「ありのまま」によって、侵略戦争という苛酷な現実、無残さがある程度描き出されていることも見過ごしてはならない事実である。老婆が「我々」に感激する姿を表現している葦平は、「追従」という言葉を使っている限り、中国民衆の小賢しい一面とともに、その言葉によって裏付けられている日本の兵隊の望ましくない姿をも読者側に暗示している。また、日本兵が中国人女性への「好意」に対する描写は、作者の意識と無意識にかかわらず戦場における彼等の蛮行もある程度曝露している。これらはいずれも、「ありのまま」がもたらす効果として評価すべきであろう。しかし一方で、本論の最後で述べているように時代の制約もあり、その「ありのまま」とその抉り出し方には限界があったことも見逃してはならない。

ところで、戦時下、葦平は「兵隊三部作」に代表されるような兵隊ものを上梓したことで一躍国民的作家としてもはやされるが、1945年8月15日、日本が敗戦を迎えると同時に、戦時下での文筆活動⁴⁶により一転して戦争協力者として批判される。戦犯作家として公職追放にされるか、自分の現在の境遇に怯えながら創作し

⁴⁶ 例えば1943年、葦平は同人雑誌『九州文学』（九州文学社、1943年3月、2—3頁）に「文学は兵器である」と題する短文を書いている。その一節を、『復刻版 九州文学 7』（国書刊行会、1982年11月）から引用する。「今日の時代と生活とは、他人のものではなく、一切が自己の切実な問題なのだ。これを避けることも許されない。今日の生活と取り組むことはすでに絶対の使命である。そこに文学の決意も生れてくるであろう。祖国日本が歩く道をわれわれもともに歩き、その決意を文学に表現することこそ、文学者の榮譽である。（…）／文学は今日もはや兵器である。たぐいなく美しき兵器である。その性能はおどろくべく精緻であり、高く、さらびやかで、情愛にあふれ、豊富な言葉に満ち、夢に満ちている。いかなる空にも、海にも、山にも、街にも、その奔放な弾丸はみなぎり、その表現によって、ひとびとの精神をうるおし、昂揚することができる」。

続けるが、結局志賀直哉⁴⁷の必死の嘆願にも関わらず、1948年5月、葦平は連合軍による文筆家の追放指定を、尾崎士郎、林房雄らと共に受ける。「追放者」（『改造』1950年12月号）によると、指定の理由は、「日華事変以来、同人は戦争に取材せる多数の著述を發表し、世に迎えられたるものであるが、その著作に於いて、概ねヒューマニズムの態度を離れなかつたとは云え、『陸軍』『兵隊の地図』『敵將軍』『ヘイタイノウタ』等に於いては、日本民族の優越感を強調し、戦争、とくに太平洋戦争を是認し、戦意の昂揚に努めて居り、その影響力は広汎且つ多大であった。以上の理由により、同人は軍国主義に迎合して、その宣伝に協力した者と認めざるを得ない」⁴⁸であった。その追放は1950年10月まで続いている。

もっとも、彼の場合、その責任の問題は彼自身の限界によるものと同時に、時代の限界でもあったであろう。1937年7月の日中戦争勃発後の文学状況について、『日本文学全史6 現代』では、

十五年戦争の開始前後から、しだいにその力を強めてきた当局の文化干渉や弾圧政策は、昭和十二年（一九三七）七月の日中戦争勃発に伴い、いちだんと激しさを加えてきた。そうした弾圧の象徴的事件として二つの発禁事件が挙げられる。一つは島木健作（明治三六一昭和二〇）の「再建」（昭和一二）の発禁であり、一つは石川達三（明治三八）の「生きている兵隊」（昭和一三）の発禁である。（…）こうして日中戦争勃発以降、文学の世界は厳しい情勢のもとにおかれることになる。⁴⁹

と書かれているのである。このように、文学者の表現の自由は著しく侵され、戦争協力のための文学を求める権力の要請は日増しに強まっていくことになったと、そういう厳しい時代的状况の中で、葦平が作家としての出発をはかり、己の文学を開花させるほかなかつたところに、彼の不幸があつたと言えなくもない。もとより筆者に、戦時下における彼の戦争責任を後知恵的に問う意図はない。というより、嵐

⁴⁷ 山岸郁子「火野葦平の公職追放仮指定に対する『異議申立書』と『証言』」『語文（136）』、日本大学国文学会、2010年3月、175頁。

⁴⁸ 火野葦平「追放者」『火野葦平兵隊小説文庫4』、光人社、1980年3月、219頁。

⁴⁹ 市古貞次編『日本文学全史6 現代』、学灯社、1978年11月、256—257頁。

のような戦争が終わった後、彼はその庶民心情と戦争体験を根にどのような次の表現を求め、如何なる葛藤を抱えていたのかが筆者の関心の一つなのである。終章では、本論で述べた内容を総まとめしたうえで、「赤い国の旅人」（朝日新聞社、1955年12月）や「革命前後」（中央公論社、1960年1月）などをテーマに戦後における葦平の新中国認識や戦争認識などについて考えてみたい。

付記

・本章における原文の引用は、すべて「麦と兵隊」『火野葦平兵隊小説文庫 1』（光人社、1978年11月）による。論中に本文を独立した段落として引用した場合、すべて引用頁を明記し、それ以外の場合、原則として頁数を省略している。

終章

1. 本論のまとめ

かつて『漱石長編小説の世界』（桜楓社、1981年10月）や、『漱石と日本の近代』（桜楓社、1983年5月）などの著者の深江浩は、その「文学研究論への覚書」の中で、自己の限定された部分的な体験をもとにする以外に作品の作りようがない近代作家には、作中素材（作家によって選ばれた現実のある範疇）との格闘という点で大体二つのタイプが生まれてくると指摘している。以下はその引用である。

ひとつは、人間生活の直接的な現象と、それとのふれあいから生ずる感じ方、見方だけに固執し、それをむしろ世界の証しとみ、あらゆる素材をこうした観点から扱ってゆくタイプで、近代文学の一般的傾向を形づくっているもの。もう一つのタイプは、こうした直接性の水準にとどまる限り見えもしなければ感じられもしない生きたある全体的な予感を対象の中に感じとり、それが何であるかを粘り強く探求してゆくようなタイプの作家である。¹

深江はこのように述べ、更に「ルカーチはこの二つのタイプの対立を自然主義かリアリズムかというふうにとらえ」²ていると指摘している。ところが、すでに知られているように、すべての言語表現というのは主観的視線に耐える面と客観的な視線に感応する面がある³わけで、上述の深江の指摘を一つの文学作品の中に還元してみれば、いわば作家の主観性と作品の自律性の問題になるのである。そして、作品の意味を考える場合、作者の意図のゆえにあらわれるものと、作者の意図にもかかわらずあらわれるものと、この両方を同時に把握することが大切だということがわかる。因みに、漱石が日本人の中の偉大な近代作家であるという意味は、その両面性の問題が漱石の作品世界の中に明晰にあり、ある意味ではどのような作家よりも本質に近いところでその構図を浮かび上がらせていることにある⁴とも言われている。

¹ 深江浩「文学研究論への覚書」『あしかび(5)』、太陽社、1973年10月、17頁。

² 深江浩「文学研究論への覚書」『あしかび(5)』、太陽社、1973年10月、17頁。

³ 吉本隆明「漱石をめぐって—白熱化した自己」『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月、115頁。

⁴ 吉本隆明「漱石をめぐって—白熱化した自己」『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月、121頁。

一方、葦平の場合はどうであろうか。「青春の岐路」「魔の河」は、年譜と照合してほぼ正確な自伝的作品であると推定されるし、「革命前後」は、「私は私流に、嘘をつくまいと考えて、身体をぶっつけるようにして書きつづけ」⁵たものだと葦平は記している。また、彼は自らの河童もの⁶を、詩と小説との間を彷徨した自分が「ほっと溜め息をついたような場所」⁷であり、彼の「精神を不安にしている或る憂愁を滲み出させたいと願っての無我夢中の耽溺であった」⁸と位置付けている。更に、「麦と兵隊」と「土と兵隊」の「前書」において、二作とも小説ではなく、「麦と兵隊」は「現在戦場にある一兵隊の直接の経験の記録」⁹であるが、それと同じように、「『土と兵隊』ももとよりそのような意味のものでしかないのであります」¹⁰と書いている。

このように考えると、葦平にとっての文学とは何かというと、己自身を忠実に表現することであり、深江の言葉を借りて言えば、「人間生活の直接的な現象と、それとのふれあいから生ずる感じ方、見方だけに固執し、それをむしろ世界の証しとみ、あらゆる素材をこうした観点から扱ってゆくタイプ」のものである。ここから葦平の文学的スタンスを窺うことができるのである。確かに、人間の認識は自らの五感（主観）にとどまる他ないが、むしろそうであればこそ、我々の主観的認識を乗り越える文学的な試みが、一人の作家にとって一層大事になってくるのであろう。このような表現方法には非常に大きな限界があることはすでに第4章で指摘し、そ

⁵ 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、287頁。

⁶ 葦平の河童に対する愛着は半端ではない。自身、戦後の1958年6月に『火野葦平選集第三巻』（創元社、1958年7月、462頁）の解説で「私が河童に執心したことは、長く、且つ、深かったようである。私の胎内に、いつ河童が棲息するようになったか知らないが、今や河童は私の宿命となって、私にこびりついている」と語っている。河童の愛好家で、若松の自宅を河伯洞と称した葦平は、河童を登場させる作品を数多く書いたことでも知られており、河童ものの短編の集大成『河童曼陀羅』（四季社、1957年5月）を残しているほどである。そこには合計44篇の河童小説や河童音頭が収録されている。彼に描かれている河童は、鈍重で暗愚ではあるが真摯で信義を重んじ、時には没落した平家一族の怨霊の化身（火野葦平「海御前」『糞尿譚・河童曼陀羅（抄）』、講談社、2007年6月、174—188頁）として登場し、時には愚かな発想で傷ついたり仲間たちに嘲笑され馬鹿にされたり（火野葦平「名探偵」『糞尿譚・河童曼陀羅（抄）』、講談社、2007年6月、105—114頁）している。井口時男は葦平の河童たちには、「どれも、弱者、敗者の哀れと滑稽がにじんでいる」（火野葦平『糞尿譚・河童曼陀羅（抄）』、講談社、2007年6月、245頁）と言っているが、その通りであろう。

⁷ 火野葦平『火野葦平選集第三巻』、創元社、1958年7月、463頁。

⁸ 火野葦平『火野葦平選集第三巻』、創元社、1958年7月、463頁。

⁹ 火野葦平『土と兵隊』、改造社、1938年11月、9頁。

¹⁰ 火野葦平『土と兵隊』、改造社、1938年11月、9頁。

の対極にいる作家の例として、例えば大江健三郎や村上春樹などのような存在があげられることもそこで触れたとおりである。そして、その限界性のゆえに、純文学中心の制度、いわゆる正統的な日本の近代文学という制度は、葦平のような存在を意図的に排除しがちである。そのことによって、その正統性、その制度そのものが守られてゆく、というような構造は現在にいたっても続いているのである。

しかし、少し視点を変えてみると、そもそもそのような考え方自体が、敗戦直後におけるマルクス主義者を中心とする批判とは本質的には全く変わっていないであろう。それだけでなく、本論の序章及び各章の最初に立てた、例えば葦平の庶民観の行方の問題や、「麦と兵隊」「土と兵隊」に見る論者たちの対立をどのように埋めるかといった問題提起に対する答えは、無論このような態度の中にかがうことができない。

本研究においては、火野葦平作品論及び作家論の系譜をたどったうえで、彼のいくつかの代表作を作品の中に流れた時間を軸に丹念に追いつつ、筆者独自の見解を提示したことによってこれらの問題に新たな示唆を与えることができた地点にまで到達し得たと思われる。その詳細は各章にまとめているが、ここでその分析を全体としてもう一度総括すれば次の通りであろう。

第1章「火野葦平作品論及び作家論の系譜」では、葦平が書いた作品、及び作家自身に対する論考を時系列的に考察した。1937年に書かれた「糞尿譚」は葦平の文壇デビュー作であると同時に、彼が文壇の諸先輩から批評を受けた最初の作品でもある。しかし、昭和10年代初期における葦平への注目は、「糞尿譚」による芥川賞受賞というより、むしろ兵隊作家による芥川賞受賞といったほうが妥当だということを確認した。葦平の芥川賞受賞（作家）と戦場にあった玉井伍長（兵隊）との必然的な結合が直接的な契機となって、「麦と兵隊」をはじめとする一連の「兵隊もの」が生まれるわけだが、それらの作品が生み出した同時代的意義について、「臨場感」「人間的誠実」「ヒューマニズム」「社会的意義」などに見られるように、同時代評の着目点が様ではなかったにせよ、論者たちのほとんどが賛美の辞を惜しまないところに足並みをそろえている。

続いて、戦後における葦平研究の出発について論じた。敗戦直後、時代の価値観

が一転する。それに伴って、1950年代の研究＝それまでなかった否定的な捉え方が、マルクス主義的世界観を図式として葦平及びその作品に当てはめられる傾向を持つようになる。そこから葦平の文学はいかに歴史的、社会的存在であったかということが言えようが、そこにあつたのは、時代における既成の価値観、歴史観によりかかって作品を読むという傾向であり、それは、言い換えれば、読者自身の認識の歪みや限界への意識が希薄だったということである。その点、1960年代から70年代前期の「戦後責任」をめぐる研究にも、1980年代前後の反近代、反資本主義の立場からのアプローチにも共通している。それらはともすれば一面的な作品把握に傾きがちだったという欠点を含んでいるが、人間は自分の主観から逃れられない以上、作品への理解が歪みや限界を伴っているのもまたやむを得ない。しかしそうであればこそ、読者は文学作品を読み、その意味を探ろうとする際、如何にしたら己の生活実感に裏付けられた認識の枠組みを乗り越えることができるか、ということが大切になってくる。

最後に90年代以降の研究動向を考察した。その時期の研究動向を踏まえていえば、当面の課題が、「兵隊三部作」をめぐる論者たちの対立の深層を探り、各々の作品を全体的作品評価の下で統一的に把握する可能性を模索するところにあつた、ということを確認した。そのうえで、葦平文学におけるそれらの作品の位置づけを明らかにし、「序章」で提起した葦平の庶民性の行方の問題等々に新たな視点を加えられる可能性を示唆した。

次に、第2章「作家以前における火野葦平の庶民観」では、作家としてのデビュー以前における葦平の庶民心情（1928—1932年）を分析した。

結論は、応召する前に沖仲仕として洞海湾で生活した8年間、葦平は炭鉱や港湾で働いていた中国人と朝鮮人を含めた労働者と「同じ釜の飯」を囲み、身近にいる彼等に対して平等な関係を保っていた。特に1930年代初期、荷役労働の機械化により失業の危機に瀕している沖仲仕のため、葦平は中国人や朝鮮人を含めた最下層民である「ゴンゾウ」の群れの中で汗を流し、彼らを束ねストライキを組織することで大資本の搾取と対峙した。葦平の中の左翼平等思想と「ゴンゾウ」の血が結合していた一時期であった。そして、1932年に初めて中国に渡った時も、「資本家打倒」という労働運動に専念している最中の彼は、身近にいる沖仲仕だけではなく、

上海馬頭で資本家に搾取される中国人労働者にも同情の視線を投げかけたと思われる。

以上、一仲仕の長男として生まれ、父金五郎の職業の影響下で成長したことによって、庶民への愛情というものが葦平の性格の奥底に抜きがたく定着したことを確かめた。

更に第3章「火野葦平『糞尿譚』に見る魯迅『阿Q正伝』の影一彦太郎と阿Qの場合一」では、葦平文学における庶民観の原点を探った。本章では、「阿Q正伝」と「糞尿譚」の同時代における位置づけや政治的な意義に共通性を見出したうえで、比較研究の視点から葦平「糞尿譚」に見られる魯迅「阿Q正伝」の影を考察した。この影響関係を論証するため、両作品の主人公である彦太郎と阿Qについて、主に「家系に見る両主人公の類似性」、「彦太郎の『精神勝利法』」、「彦太郎の『浮気の悲劇』」、「『糞尿譚』の『大団円』」という四つの観点から、その類似性の確認作業を行った。両作品はともに政治的事件（辛亥革命と昭和5年の総選挙）をバックグラウンドに、作者の身近にいた実際の人物を主人公にしているし、その中には、歴史の渦巻きの中にもがいている一庶民の姿、及びその民衆の実相に対し、両作者が温かい眼差しで示した関心が描かれている。

また、彦太郎の家系や精神構造についても、或いは「糞尿譚」のストーリーの展開についても、葦平は常に魯迅「阿Q正伝」の阿Qを念頭に置いていると考えられる。例えば阿Qは村人に馬鹿にされたり苛められたりした場合、いつも己の敗北を勝利に転ずるという「精神勝利法」を以て自己欺瞞するが、彦太郎も「今に見て居れ」という言葉や酒を頼りにする、阿Qと似たような精神構造を持っている。このように、両主人公に如上のような共通項が見られることから、葦平は出征前の彼の文学表現における一つの到達点であり、「後に庶民作家とも目されるに至る道筋を伺わせるに十分な作品」¹¹とも言われているこの小説「糞尿譚」を執筆した際、魯迅の「阿Q正伝」から多大な影響を受けていた、と考えられる。

最後に第4章「火野葦平『麦と兵隊』論—戦争文学への一視点—」では、葦平の「麦と兵隊」を取り上げ、応召以前に培われた葦平の庶民心情の戦場においての一貫性と変化、及びその変化に見る葦平の戦争認識の問題を検証した。まず作品に出てき

¹¹ 鶴島正男「特集 名作の舞台を歩く／火野葦平」『火野葦平とゆかりの人びと』、北九州市芸術文化振興財団（発）、2010年、27頁

た中国人像に着眼し、それらをその文脈に即しつつ綿密に分析することにより、生い立ちから来る下層民への共感がありながら、作者の葦平が「異民族」の中国民衆に対して差別的な視線を持っており、日中両国民に対する分裂した眼差しをもって体制と権力に身をすり寄せてしまったことを明らかにした。

しかし、だからといって、その記述が庶民的な視座を持っていることとは、決して矛盾しない。戦争に協力したとはいえども、作家の主体性が根こそぎ失われたわけではない。同作にはほんのわずかだが、作者の志向している「ありのまま」によって、侵略戦争という苛酷な現実、無残さがある程度描き出されていることも見過ごしてはならない事実である。例えば、老婆が「我々」に感激する姿を表現している葦平は、「追従」という言葉を使っている限り、中国民衆の小賢しい一面とともに、その言葉によって裏付けられている日本の兵隊の望ましくない姿をも読者側に暗示している。また、日本兵の中国人女性への「好意」に対する描写は、作者の意識と無意識にかかわらず戦場における彼等の蛮行もある程度曝露している。これらはいずれも、「ありのまま」がもたらす効果として評価すべきであろう。

最後に、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性（葦平がこの作品を通じて日中戦争に協力した戦争責任があるという論調と、彼はひたすら「民衆」を描いていることで反戦思想を告白しながら軍国主義の犠牲者になったという評価）が併存しているのだが、それを同じ創作方法、すなわち同じ「ありのまま」の表れとして統一的に把握する必要があることを論じるとともに、時代の制約もあり、その「ありのまま」とその抉り出し方には限界があったことも見逃してはならないという結論にたどり着いた。

以上、各章の分析を簡潔に整理した。さて、本章の最後において、筆者の今日までの研究をトータルに把握したうえで、現在の葦平文学理解に基づいて戦後における葦平の新中国認識や戦争認識などについてもう少し考えてみたい。

2. 補足—葦平の「戦後」

戦後、葦平には「羅生門」¹²（『九州文学』1946年8月）という作品がある。芥川龍之介の同名作を河童ものに改作したものである¹³。この作品の中で、葦平は芥川の「羅生門」をエゴイズムを描いている作品として捉えた¹⁴うえて、自分の戦争

¹² その梗概をごく簡単に記すと以下ようになる。旱魃や飢饉などの災いが起こったため、故郷の姥口の沼と食とを同時に奪われた一匹の河童が、突然降った雨で羅生門の下で雨やみを待っていた。断るまでもなく、雨に濡れては困るために雨やみを待っていたのではない。一刻も早く故郷に帰りたがっている河童は、姥口の沼に少しでも多くの水がたまるのを待っていたのである。

夕方時分、雨がやんだ。河童は沼の水量を期待しつつ、長く住みついた羅生門を出て帰路につく。けれども、沼に着くやいなや、河童は意外なショックを受ける。羅生門に引き取り手のない死人が捨てられていたように、沼も死者の屍骸で埋め尽くされ、そこに住むことはもはやできなくなるのである。仕方なく、河童は第二の故郷と心に定めた羅生門への道を引き返す。

帰ってみると、どうも羅生門の様子が出た時と違っていると河童は気づき、楼に登る。そこで見たのは死骸から長い髪を抜いている一人の老婆。そして突然、一人の下人が楼の上に飛び上がり、老婆の前に立ちはだかる。生きるためにそうせざるを得ないという老婆の論理を聞き、下人は窮しているのは同じだ、と老婆の着物を剥ぎ取って逃げる。その一部始終を見ている河童は、とうとう羅生門には二度と来ないと決心し黒洞々たる夜の中へ消えていく。

¹³ 志村有弘は『羅城門の怪 異界往来伝奇譚』（角川書店、2004年2月、211頁）において、羅城門をテーマにこの二つの「羅生門」に触れ、葦平の自殺と原田種夫の証言から両作者の関係性を捉えようとしているが、葦平が芥川の作品を愛読したのは、筆者の知る限り、早くも1923年に彼の自筆日記から窺える。例えば、「一月一七日」に葦平は「今の文壇で一番自分を惹きつける作家は二、三しか居ない。（…）曰く芥川、曰く菊池、曰く谷崎、曰く久米、位にすぎぬ。他の作家は優れてはいるかもしれぬが、一向自分の心を惹かぬ」（増田周子「火野葦平自筆日記翻刻（大正十二年）1」『関西大学文学論集 59（4）』、関西大学文学会、2010年3月、27—28頁）と書いている。更に、1928年7月24日、幹部候補生として福岡の歩兵第24連隊第7中隊に入営中の葦平は、その日が一年前、芥川が自殺した一周忌であることを知り、大きな打撃を受ける。1958年10月に発表された「青春の岐路」で、葦平はその心境を次のように記している。「漠然と、文学とマルキシズムの間を振子のように揺れ動いていた昌介（葦平の化身、引用者注）にとって、この作家の自決は大きなショックを与えた。念願の早稲田大学に入り、文学一途に突き進んではいたが、昌介も自分の才能を反省して悲しくなる時があった。（…）自分に作家として立つ才能があるのかという疑念と設問ほど、深刻な問題はなかった。その時、芸術的才能に恵まれ、天才とまで称せられた芥川龍之介が自殺したことは、昌介を激しく打ちのめした」（『青春の岐路』『火野葦平兵隊小説文庫 8』、光人社、1980年5月、147頁）。

¹⁴ 下人の「雨宿り」から始まる芥川の「羅生門」は、最後に「下人の行方は、誰も知らない」（『芥川龍之介全集第一巻』、岩波書店、1977年7月、136頁）との一節を以て終わってしまう。従来、この結びの一文に対し、様々な解釈が試みられている。例えば、1990年頃まで「羅生門」は、下人の心理の流れを中心線として持っており、羅生門の下で逡巡していた下人が、楼上で老婆の生の論理に触発されてエゴイズム許容の論理を獲得する、下人の自己変革の相に主題を求めているとする解釈が中心をなしている。その主題と相俟って、末尾の下人の「その後」が、「下人は盗賊となって洛中へ向かった」と理解されることが圧倒的に多いようである（悉知由紀夫『羅生門』『下人の行方』と『下人の心』—『まだ燃えている火の光』をめぐって—『国語論集 12』、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室、2015年3月、143頁）。

けれども、90年代に入った頃から、その作品に対する新たな読みが生まれることにより、下人は盗賊として生きるのか、それともテキスト通り解釈の余地を残したまま物語を閉じるのか、決着を見ないままである。その中には堀部功夫のように、「羅生門」は対人恐怖症の治癒物語であり、対人恐怖のノイローゼに罹っている下人は、楼上で老婆の「贈与・互酬の原理」に触発されて社会人に変貌する（堀部功夫『羅生門』僻見『芥川龍之介『羅生門』作品論集—近代文学作品論集成 4』、クレス出版、2000年10月、351—369頁）と、極めて独特な見解を持っている論者もいる。このように、これまで下人の「自己覚醒」や「自己解放」などを主題とする数多くの論考が無視できないとはいいながら、今となっては、下人の行方を寧ろ一つの読みに限定することができない。初出や初版の本文では、下人の行方が明確に示されているが、決定稿である

体験を作中に色濃く反映しながら、終戦後の日本の社会を構成している国民像を作中の下人や老婆らの人物に投影し、土壇場に來れば利己的で争いを起こしてやまないと、人間本来の在り方を苦々しく見つめて描いている¹⁵。では、彼が一匹の河童を通じて表しているエゴイズム批判の主題と葦平自身の「戦後」とはどのような関

『鼻』収録形では、下人の行方が明確にされない末尾の一文から、「羅生門」は開放的で多様な解釈を促す作品であると言える。つまり、この作品は、最後に下人の行方が明示されないことによって却って、読者の想像力を喚起する構造を持っているのである。

芥川の結び方と同様、葦平の「羅生門」も「河童の行方は、たれも知らない」を以て閉幕する。となると、葦平が芥川の「羅生門」に対してどのような受け止め方を持っているのか。この問題の鍵は物語の後半に潜んでいるので、以下では、後半部の物語の展開を見ながら、この問題を検証してみよう。沼の惨状により故郷を奪われた河童は、深い吐息をつき、やむなく羅生門への道を引き返す。羅生門を第二の故郷と心に定めて帰ってきた河童は、不意に楼上で誰かが火を灯しているのに気づく。奇妙なことだと思いながら、河童は足音を潜ませて梯子を登り、上の様子を窺う。そこで見たのが、屍骸の間に蹲り、死人から髪の毛を抜いている一人の見慣れない老婆である。その不思議な挙動を見ているうちに、河童は沼で人間が何をしていたかをはじめて悟り、驚きの思いに打たれる。突然、一人の下人が、もう一つ門の外側にある梯子を登ってか、楼上に飛び上がり、老婆の前に立ちはだかる。葦平の「羅生門」における下人の初登場である。

老婆は驚きのあまり、頓狂な声を発し、慌てて逃げようとするが、下人に逃げ道を塞がれる。「何をしていた。さあ、何をしていた。言え、言わぬと、これだぞよ」と、下人に詰問された老婆は、「わしのすることは悪いことかもしれぬ。したが、このほかに、わしのような老いぼれに何ができよう。わしはもう永いこと、飯を食わぬ。これこの通り、手も、足も、胸も、骨と皮ばかりじゃ。このままならわしは飢えて死ぬほかはない。飢死せまいためなら、仕方がないのじゃ。わしにできることをして、生きねばならぬ。そうじゃろうが。おぬしにもそれはわかろう。な、わかるじゃろう」（火野葦平「羅生門—『伝説』の一章」『九州文学 85 (8)』、九州文学社、1946年8月、32頁）と、生きるためにそうせざるを得ないと弁解し始める。

老婆のエゴの論理を聞いた下人は「きっと、そうか、それに違いあるまいな」と、芥川の下人と同類のセリフを老婆に発し、「では、おれが引剥をしようと思わまいな、おれもそうしなければ飢死をする身体なのだ」と、不思議な勇氣と確信に満ちた声で言い、すばやく老婆の着物を剥ぎ取り外側の梯子を夜の底へ駆け降りる。

突然老婆の前に出ており、着物を奪い取ってスッと消えていくこの下人の行動から、彼はこの後またどこかの老婆を奪いに行ったり、或いは人家に潜り込んで物を盗んだりするに違いなからう。ここから葦平が芥川の「羅生門」に対する理解が窺える。つまり、葦平は芥川の「羅生門」を、エゴイズムを描いている作品として捉えているのである。

傍観者の視線を失わず、楼上で的一幕をこっそり見ている河童は、自分も飢えているが、それでも老婆や下人、また沼の人間たちのエゴイズムに共感を持たず、もう二度とこの羅生門に住むまいと、やがてすごとごと門の下へ降りる。どのようにして飢えを凌いだらいいか、またどこに住んだらいいか、河童は思案が浮かばないまま悄然とした足取りで、黒洞々たる夜の中へ消えていく。

¹⁵ 増田周子もその論「火野葦平『手』と水木しげる『河童の手』」（『関西大学文学論集 64 (4)』、関西大学文学会、2015年3月、1—38頁）において水木しげる「河童の手」とその原作にあたる葦平「手」を取り上げた際、葦平の描いた、狆の武士に騙され、蔑まれ、振り回されて人間不信に陥った河童は、戦後における葦平自身の悲惨な姿が重ねあわされているとする。その指摘そのものところにおける筆者の見解とはさほど変わらない。しかし、もともと「火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見てきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた」（増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究 (5)』、2012年2月、関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS、210頁）と主張した増田は、葦平の「手」に見る人間のエゴイズムへの反発を捉える時、あまりにも作者の視線で論を進めており、敗戦を迎えても戦時中の日本社会を動かしたメカニズムをそのまま続けてほしいという葦平の価値観そのものについての疑問もないし、葦平が反発しているような人間の中には彼自身が含まれていないかといった問題への切込みも見られない。

わりを持っているのか。この問題を究明するためには、葦平が敗戦前後の混乱期を背景に、「嘘をつくまいと考えて、身体をぶっつけるようにして書きつづけ」¹⁶た作品「革命前後」（中央公論社、1960年1月）を視野に入れながら考察していく必要がある。以下では、主に「革命前後」を引き合いに、葦平「羅生門」の主題に見る彼の「戦後」を見てみよう。

1945年7月、葦平は福岡市の西部軍報道部に白紙徴用され、そこで敗戦を迎える。敗戦当日の夜、葦平は宿舎「川島ホテル」の自室で自殺しようとするが、これから日本の行く末を生きて見届けようとの決意から思いとどまる。けれども、8月17日に西部軍報道部解散後、若松に帰省する汽車の中で葦平は帰還兵に対する国民の態度の冷やかさや、敗戦に伴う民衆の価値転換の素早さに閉口する。汽車の中で占領軍相手にさっそくキャバレーを経営しようと打ち明ける乗客の会話や、掌を返したように早速万国旗を作って占領軍の歓迎準備に勤しんでいる故郷の駅員を苦々しく見つめる。戦時体制の代弁者ともいべき葦平にとって、終戦直後の日本は法も秩序も常識も、かつてあったものが全てひっくりかえった時代であったと言えるであろう。

いわゆる国民の価値観が180度変わった風潮の中で、葦平に対する眼差しも変わってしまう。戦時中はベストセラーで英雄視された葦平は、敗戦後はいきなり「文化戦犯」呼ばわりされるようになる。『火野葦平選集第四巻』の解説に、葦平は「戦後の花形となった共産党の『アカハタ』は文化戦犯第一号に、私の名をかかげ、私の周囲は敵ばかりになった」¹⁷と綴っている。戦争中にお国のために、天皇のために自分なりに一生懸命頑張ってきた葦平は、このように批判されてかなり煩悶し戸惑っているに違いない。それゆえ、人間は土壇場に来れば、一切の粉飾が剥され、仮面の下に思いがけぬ表情が発見されると、彼は感慨する。

もちろん、人間の頭を離れた歴史的事実は存在しない。従って、敗戦を迎えても戦時中の日本社会を動かすメカニズムをそのまま続けてほしいという葦平の価値観そのものが問われるべきかもしれないが、成田龍一は葦平が闘っていたのは「ふた

¹⁶ 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、287頁。

¹⁷ 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、428頁。

つの戦場」¹⁸だと指摘している。一つは、実際の戦場であり、もう一つは戦後の日本社会であった。また、増田周子は戦前は天皇を崇めていた国民が敗戦直後に一転して天皇批判を行ったり、軍人をやたらと差別したりする様相に、葦平は日和見主義として反抗し、抵抗し続けた¹⁹と述べている。

だが、葦平が反発しているような人間の中には彼自身が含まれていないかと言えば、そうではあるまい。戦場での執筆活動が結果的に銃後や前線の好戦気分を煽ったにもかかわらず、葦平は公職追放仮指定に対する「異議申立書」で、「私は祖国の前に、貧しい私の力のありたけは捧げねばならぬと信じました。この私の愛国の情熱が誤謬であると言われれば、もはや何も申すことはないのであります」²⁰と、自分の過ちをひたすら否認している。倫理性や道徳観は自分の有罪性を土台にしない限り、世の中の闘いや紛争はいつまでたっても続くであろう。なぜならば、「私は他人以上に有罪である」という自覚を持っていなければ、自分と他者の自由が相剋的な立場で向き合っている時、先に矛を収めて友情と雅量を示すのが、相手ではなく「私」でなくてはならない理由が「私」の側にはないからである²¹。

「羅生門」においてもそうであるが、葦平は戦後多くの作品やエッセイで「人間は滑稽動物である」と書き続ける。

流行、風潮、オポチュニズム、仮面をかぶったエゴイズムだけが人間と世界をうごかす最大の動力であるとすれば、昨日も信じられず、今日も信じられず、ま

¹⁸ 渡辺考『戦場で書く 火野葦平と従軍作家たち』（NHK 出版、2015 年 10 月、13 頁）によれば、2014 年 8 月、渡辺は日本女子大学の成田龍一氏に葦平のことを取材した際、氏から「ふたつの戦場」の話を得た。

¹⁹ 増田周子「火野葦平『手』と水木しげる『河童の手』」『関西大学文学論集 64 (4)』、関西大学文学会、2015 年 3 月、35 頁。

²⁰ 山岸郁子「火野葦平の公職追放仮指定に対する『異議申立書』と『証言』」『語文 (136)』、日本大学国文学会、2010 年 3 月、172—173 頁。

²¹ この発想は、エマニュエル・レヴィナスの哲学における「他者への有責性」というものによる。内田樹はレヴィナスによる「他者への有責性」の問題について、その著書『レヴィナスと愛の現象学』（文藝春秋、2011 年 9 月、258—260 頁）の中で次のような指摘をする。「相称性の上に倫理を構築することはむずかしい。というより原理的に不可能である。これはレヴィナスが『私と君』の相互性に基づいてその哲学を構想したマルチン・ブーバーを批判したときの中心的な論点であった。(…) 相互性という考え方は、平たく言えば『私と君の立場は交換可能だ』ということである。(…) しかし、相互性の道徳からは、どうやっても、『私はあなたより多くの責務があり、あなたは私より多くの権利がある』という言葉は導出されない。しかし、レヴィナスが求めているのは、まさにその言葉なのである。(…) レヴィナスが繰り返し引く『カラマーズフの兄弟』の一節。『私たちは全員がすべてについて、おたがいに対して、罪を負っています。そして私は他の誰よりも罪が深いのです』。

して明日などをどうして信じられよう。滑稽動物である人間が右往左往している目まぐるしさによってのみ、人間がむきだしになっている。²²

このように、流行などにばかり振り回されない生き方が必要だと、戦後葦平は自国の民衆に繰り返して訴えているが、1960年に短い遺書を残して書斎で自死する²³。その文面は、深く心を占めていた「戦争」にも「中国」にも及んでいなかった。

さて、戦後における葦平の戦争認識や新中国認識を考えるうえで、もう一つの作品が欠かせない存在となっている。1955年、葦平ら「アジア諸国会議」出席者28名が新中国に招かれた。その経過は葦平の「赤い国の旅人」（朝日新聞社、1955年12月）に書かれているが、川西政明『新・日本文壇史』を見てみよう。

（1955年、引用者注）四月二一日、香港から広東に向かった。広州は「広東進軍抄」「怪談宋公館」の舞台となった場所である。／一七年前のおごりを今さら悔いても、謝罪してみてもはじまらない。しかし「私はおびえてきた」と葦平は書く。罪の意識におののき、拷問にかけられたような苦しさに心閉ざされる。中国大陆で自分がなにをし、日本人がなにをしたか、葦平は骨身に徹して知る。彼ははじめて自分がしてきたことの意味を悟ったのだ。それは言葉ではなかった。全身が謝罪を求めている。²⁴

葦平を襲った唐突な痛苦は、荒廃され尽くした中国の風土が与えた幾らかの「報復」に違いない。もともと、戦後かつての戦地再訪の記録に作家の肉声や元兵士としての罪責感がつきまとっているのは葦平以外にも見られる。例えば、大岡昇平「ミンドロ島ふたたび」（『海』1969年8月）には次のような一節がある。

（…）元兵士には、フィリピン人に対して、罪の意識がある。われわれ戦争末

²² 火野葦平「滑稽憲法」『文学界8(4)』、文藝春秋新社、1954年4月、120頁。

²³ 1960年1月23日に、葦平は若松の自宅で、「死にます。芥川龍之介とはちがふかもしれないが、或る漠然とした不安のために。すみません。おゆるし下さい。さやうなら。昭和三十五年一月二十三日夜。十一時あしへい」（火野葦平「遺書（ヘルス・メモ）」『文藝春秋50(4)』、文藝春秋、1972年4月、298頁）と、芥川と同じように「不安」の遺書を残しアドルム自殺を遂げる。まだ53歳という若さであった。

²⁴ 川西政明『新・日本文壇史』、岩波書店、2011年8月、61—62頁。

期に到着した補充兵は、強姦や拷問をする元気もなかったが、自分の存在がフィリピン人にとって不愉快なものであることは、いつも感じていた。少なくとも私は不当な圧制者として来ているという意識が去ったことはなかった。そして二五年後、こんどはツーリストという特権を持った人間として来たことに、重ねて後めたさを感じないではいられない、私はそういうバカな人間なのだ。²⁵

そして、作品の中に PC に払うチップについて述べているところで、当時のフィリピン社会の腐敗に触れている一節があるが、そこで大岡は「マニラの新聞のコラムニストも始終書いていることで、こう書いても、フィリピン人を侮蔑したことにはならないだろう」²⁶と細心の注釈をつけながら、賄賂で運営されている社会の風潮を遠慮がちに語っている。そのようなところに大岡の、読者をして黙らせてしまうような、苛烈ともいべき自己洞察、及びかつてここに駐屯した元兵士としてフィリピン人一般に対する罪の意識と微妙な思いが見られる。

一方、「赤い国の旅人」に戻ると、藤原耕作が示したように「戦時の体験を足場とした葦平の思念は、徐々に新中国への違和感を明確なものへとしてゆ」²⁷き、しまいに「私はどんなに新中国がすばらしい建設をし、国家として発展しても、この国に住みたいと思う気持ちはどうしても湧いて来なかった」²⁸と葦平は言う。戦後、島田厚は野間宏よりもはるかに軍隊を知悉していたはずの葦平が、「真空地帯」（河出書房、1952年2月）を書けなかった理由として、「端的に言って、火野はついに野間の視点、つまり『軍隊』を構造的に見る視点を欠いていたからにほかならない」²⁹と指摘している。しかし、1952年11月、葦平は「戦争文学について」

²⁵ 大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』、中央公論新社、1976年6月、23頁。

²⁶ 大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』、中央公論新社、1976年6月、57—58頁。

²⁷ 藤原耕作「『赤い国の旅人』—葦平の見た中国」『敍説(13)』、花書院、1996年8月、108頁。

²⁸ 火野葦平「赤い国の旅人」『火野葦平選集第六巻』、創元社、1958年4月、236頁。

²⁹ 島田厚はそのように述べ、更に「丸山真男が指摘したように、私たちがものの考える考え方の中に不当な『実感信仰』がはびこっているのは確かであって、それは『一たび圧倒的に巨大な政治的現実（たとえば戦争）に囲繞される時は、ほとんど自然的現実に対すると同じ『すなお』な心情でこれを絶対化する』（『日本の思想』、講座『現代思想』）心的態度に結びついている。火野の場合も正確にこれにあてはまるのであるが、さらに立ち入って考えてみると、火野はつねに自己を『軍隊』ないし『兵隊』にアンディティファイしており、そのため、彼の戦争観が、『兵隊』から見た戦争観を踏み外すことはないという事情がそこに加わる」（「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」『文学 28(8)』、岩波書店、1960年8月、821—822頁）という。

というエッセーの中で、大岡の「野火」（『展望』1951年1—8月）や野間の「真空地帯」などを傑作と見做しつつ、「それらの中にさえ、私には一つの不満がある」³⁰と書く。その不満について葦平は次のように言っている。

私は戦場で、あたえられた任務を果たさない兵隊を、人間として信頼することは出来ない。それは好戦的ヒロイズムとはまったく別個の問題で、一直線に人間そのものの根底に通じている人格論である。まして、兵隊が戦場から脱走したり、部下をすてて指揮官が逃亡したりすることを、肯定したり、賞揚したりする態度で書かれた戦場小説を私は疑問の眼で見る。それが正しいヒューマニズム、反戦思想によって貫かれている行動であれば、もっと堂々としているべきであって、戦勝の時代にはいい気になり、戦闘が苦しくなると、急に反戦的になって逃亡したりするのは、明瞭に動物的であって、そのオポチュニズムは近代的自我の確立とははるかに懸絶したエゴイズムに過ぎない。私は自分で銃をとり、心底から祖国の勝利をこいねがって戦ったとき、私の周囲には、どんな苦境の中にあっても戦線を離脱せず、祖国や天皇陛下の万歳を絶叫して絶命する兵隊がたくさんあった。³¹

確かに、葦平が疑問を呈しているように、戦後、戦争協力をしていた文学者がその事実を隠して軍国主義批判をするケースが見られた。例えば、加藤典洋『敗戦後論』が戦中から戦後にかけての坂口安吾について、その一貫性の欠如を批判的に論じており³²、一貫性があった作家としては太宰治³³と大岡昇平³⁴を評価している。太

³⁰ 火野葦平「戦争文学について」『文学界6(11)』、文藝春秋新社、1952年11月、99頁。

³¹ 火野葦平「戦争文学について」『文学界6(11)』、文藝春秋新社、1952年11月、99頁。

³² 加藤典洋『敗戦後論』（講談社、1997年8月、136頁）が、坂口の「墮落論」を「戦前には考えつかず、戦後になってはじめて感じるようになったにもかかわらず、そのことを明白にしない（…）文章」と捉えている。

³³ 加藤典洋は『敗戦後論』（講談社、1997年8月、127—137頁）において、戦後の太宰を坂口安吾・石川淳と比較しつつ、「太宰の文学だけは、戦前と戦後のあいだの水門が開かれても、ぴくりとも水が動かない。坂口、石川の文学は戦後、水門の存在を明記しないまま、しかしその水位を上げている。それに対し、太宰は水門の存在を明記し、しかしその水位を、戦前から戦後へ、いささかなりと変えていないのである」と指摘する。

³⁴ 加藤典洋は『敗戦後論』（講談社、1997年8月、88頁）において、「大岡と彼以外のわたし達の違いは、わたし達の多くがいつか敗者であることを忘れた後も、ひとり大岡が『敗者』の位置を動かそうとはしなかつ

宰と同じく、葦平も「戦後への『時局迎合』」³⁵（傍点は原文のまま）に抵抗している。そして、葦平ほど戦いに敗れた兵隊に対して、深い共感と同情の念を示したものは稀である。しかし、太宰の一貫性と異なり、ここに見るように、彼は美しい人格論や愛国心を堅持していることで戦争責任を逃れようとしているのではないかと、たとえ葦平自身にそのような狙いがなかったにしても、読者の我々にそう思わせなくもない。

最後にポストコロニアリズム³⁶の代表的な理論家エドワード・サイードは、その著書『知識人とは何か』において、真なる知識人を、現実の亡命者のように、あくまでも周辺的存在でありつづけ飼い慣らされないでいて、また普遍性に連なる公的な役割を担い、日常生活に棹さすアマチュア的個人であり、更には自ら表現する力を持たない弱者の側につき、国家や集団の権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である³⁷と言っている。もしこの物差しで戦時下における葦平の文筆者としての「活躍」を評価すれば、彼は本物の知識人とはかけ離れた存在であったと言わざるを得ない。それが葦平、そして彼と似たような戦時下の日本の文学者³⁸の限界性であったらうと同時に、時代の限界性でもあったかもしれない。文学者の表現の自由が著しく犯された中、彼はその生身の体験をもって、人間にとって時代の制約が如何に逃れがたく強い規制力を持つものであるかという一例証を、後世の我々に提示していると見做してもよからう。

たことである。確かに大岡のように敗者の位置にとどまった戦前の人間は他にもたくさんいたかも知れない。しかし、敗れた後、『敗者』として新しい現実、この戦後を生きた人間、そうすることでまた新たな地平にたどり着くことがあり得ることを示した文学者は、たぶん大岡一人だった」という。

³⁵ 加藤典洋『敗戦後論』、講談社、1997年8月、132頁。

³⁶ 小森陽一『思考のフロンティア ポストコロニアル』（岩波書店、2001年4月、iii—iv頁）によると、最初に英語圏において、1970年代後半から90年代にかけて急速に一つの研究領域を形成するようになったポストコロニアリズムは、その研究動向の特徴はヨーロッパの植民地主義の諸制度、とりわけ帝国主義時代の支配が、被支配の地域社会にどのような衝撃を与えたのかを分析したところにあった。その論理を踏まえ、文学を始めとする表象芸術の研究領域において、かつて植民地支配を受けていた地域と共同体社会の中で生み出された様々な表現に着目し、そこに植民地時代の傷痕や遺制がどのように刻み込まれ、またそれらに対するどのような批判がなされているかが、積極的に問題化されるようになった。代表的な理論家はファノン、サイード、スピヴァクなどである。

³⁷ エドワード・ワディ・サイード（大橋洋一訳）『知識人とは何か』、平凡社、1995年5月、3—17頁。

³⁸ 吉野孝雄『文学報国会の時代』、河出書房新社、2008年2月、184—257頁。

参考文献（五十音順）

- 芥川龍之介『芥川龍之介全集第一巻』、岩波書店、1977年7月
- 荒正人編『昭和文学十二講』、改造社、1950年12月
- 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇Ⅰ（第十五巻 昭和十三年）』、ゆまに書房、2007年10月
- 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第Ⅰ部』、インパクト出版社、2000年12月
- 板垣直子『現代日本の戦争文学』、六興商会出版部、1943年5月
- 市古貞次編『日本文学全史6 現代』、学灯社、1978年11月
- 伊藤整その他編『日本現代文学全集87』、講談社、1962年4月
- 井上紅梅訳『魯迅全集』、改造社、1932年11月
- 井上寿一『日中戦争下の日本』講談社、2007年7月
- 猪野健治『侠客の条件—吉田磯吉伝』、現代書館、1994年3月
- 今村修『ペンと兵隊 火野葦平の戦争認識』、石風社、2012年11月
- 岩上順一『文学の主体』、桃蹊書房、1942年2月
- 岩上順一記「新日本文学会創立大会の報告」『新日本文学 1（1）』（創刊号）、新日本文学会、1946年3月
- 岩上順一『人間の確立』、万里閣、1947年1月
- 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』、文藝春秋、2011年9月
- 宇野浩二『文藝三昧』、筑摩書房、1940年6月
- 梅崎春生『梅崎春生全集第七巻』、沖積舎、1985年4月
- 越前谷宏「火野葦平「麦と兵隊」論—検閲をめぐる攻防—」『日本文学 65（12）』、日本文学協会、2016年12月
- エドワード・ワディ・サイード（大橋洋一訳）『知識人とは何か』、平凡社、1995年5月
- 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、岩波書店、1965年6月
- 大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』、中央公論新社、1976年6月
- 奥野健男『現代文学風土記』、筑摩書房、1968年8月

- 小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」『新日本文学 1 (3)』、新日本文学会、
1946年6月
- 神子島健『戦場へ征く、戦場から還る—火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士
たち—』、新曜社、2012年8月
- 加藤典洋『敗戦後論』、講談社、1997年8月
- 叶楯夫「中国新葦平論の萌芽」『河伯洞記念誌 あしへい (18)』、花書院、
2015年12月
- 河上徹太郎『戦後の虚実』、文学界社、1947年10月
- 川上未映子・村上春樹『みみずくは黄昏に飛びたつ 川上未映子 訊く／村上春樹
語る』、新潮社、2017年4月
- 川津誠編『作家の自伝 57 火野葦平』、日本図書センター、1997年4月
- 川西政明『新・日本文壇史』、岩波書店、2011年8月
- 川村湊その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月
- 菊池寛「話の屑籠」『文藝春秋 16 (4)』、文藝春秋社、1938年3月
- 貴司山治「戦争と文学者—『麦と兵隊』の意義 (下) 」『読売新聞』、1938年8
月3日夕刊
- 桑原武夫編『文学理論の研究』、岩波書店、1967年12月
- 小森陽一『思考のフロンティア ポストコロニアル』、岩波書店、2001年4月
- 今日出海「戦争と文学 (麦と兵隊)」『新潮 (408)』、新潮社、1938年9月
- 坂口安吾『墮落論・日本文化私観』、岩波書店、2008年9月
- 塩原賢「今こそ火野葦平：兵隊に寄り添い、人間に迫る」『朝日新聞』、2015
年10月19日朝刊
- 悉知由紀夫「『羅生門』『下人の行方』と『下人の心』—『まだ燃えている火の光』をめぐって—」『国語論集 12』、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室、2015年3月
- 島田厚「—文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」『文学 28 (8)』、岩
波書店、1960年8月
- 志村有弘『芥川竜之介『羅生門』作品論集—近代文学作品論集成 4』、クレス出版、
2000年10月
- 志村有弘『羅城門の怪 異界往来伝奇譚』、角川書店、2004年2月

高橋三郎『『戦記もの』を読む—戦争体験と戦後日本社会』、アカデミア出版会、
1988年2月

武田麟太郎その他『近代日本文学34』、筑摩書房、1976年3月

田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月

玉井勝則編『若松港湾小史』、若松港汽船積小頭組合事務所、1929年7月

玉井史太郎『河伯洞余滴』、学習研究社、2000年5月

玉井史太郎・佐木隆三「50回忌に思い出を語る“素顔の火野葦平”」『火野葦平と
ゆかりの人びと』、株式会社ゼンリンプリンテックス、2010年

田村泰次郎「肉体が人間である」『群像2(5)』、講談社、1947年5月

張旭東（橋本悟訳）「中国モダニズムの起源における『名』『言』の辯：『阿Q正伝』再
読」『中国：社会と文化（第30巻）』、中国社会科学学会、2015年7月

鶴島正男『襤褸の人・評伝火野葦平』、裏山書房、1995年6月

鶴島正男「新編＝火野葦平年譜」『紋説(13)』、花書院、1996年8月

中野重治編『現代日本小説体系59』、河出書房、1952年4月

夏目漱石「作中の人物」『読売新聞』、1906年10月21日

西垣勤「日中十五年戦争下の文学への一視点」『日本文学38(10)』、日本文学協
会、1989年10月

丹羽文雄・火野葦平『昭和文学全集46』、角川書店、1954年10月

丹羽文雄・火野葦平『日本現代文学全集87』、講談社、1962年4月

野間宏『全体小説への志向』、田畑書店、1969年1月

花田俊典「火野葦平の文学的遺産」『火野葦平I 激動の時代を駆け抜けた作
家』、花書院、2003年7月

林芙美子『戦線』、中央公論新社、2006年7月

火野葦平『土と兵隊』、改造社、1938年11月

火野葦平「文学は兵器である」『九州文学52(3)』、九州文学社、1943年3月

火野葦平『戦列の言葉』、二見書房、1943年12月

火野葦平「悲しき兵隊」『朝日新聞』、1945年9月11日朝刊2面

火野葦平「羅生門—『伝説』の一章」『九州文学85(8)』、九州文学社、1946年8月

火野葦平「任侠の世界に—我が作品」『小説新潮2(3)』、新潮社、1948年3月

- 火野葦平「戦争文学について」『文学界 6 (11)』、文藝春秋新社、1952 年 11 月
- 火野葦平「滑稽憲法」『文学界 8 (4)』、文藝春秋新社、1954 年 4 月
- 火野葦平『河童曼陀羅』、四季社、1957 年 5 月
- 火野葦平『火野葦平選集第一巻』、創元社、1958 年 5 月
- 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958 年 11 月
- 火野葦平『火野葦平選集第三巻』、創元社、1958 年 7 月
- 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959 年 2 月
- 火野葦平『火野葦平選集第六巻』、創元社、1958 年 4 月
- 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960 年 1 月
- 火野葦平「遺書 (ヘルス・メモ)」『文藝春秋 50 (4)』、文藝春秋、1972 年 4 月
- 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫 1』、光人社、1978 年 11 月
- 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫 2』、光人社、1979 年 3 月
- 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫 3』、光人社、1979 年 4 月
- 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫 4』、光人社、1980 年 3 月
- 火野葦平『火野葦平兵隊小説文庫 8』、光人社、1980 年 5 月
- 火野葦平『花と龍 (下)』、岩波書店、2006 年 3 月
- 火野葦平『糞尿譚・河童曼陀羅 (抄)』、講談社、2007 年 6 月
- 平岡敏夫『芥川龍之介』、大修館書店、1982 年 11 月
- 平野謙編『中野重治研究』、筑摩書房、1960 年 9 月
- 平野謙その他『昭和文学全集第 17 巻』、小学館、1989 年 7 月
- フィリップ・ポンス『裏社会の日本史』、筑摩書房、2006 年 3 月
- 深江浩「文学研究論への覚書」『あしかび (5)』、太陽社、1973 年 10 月
- 深江浩「読む、調べる、味わう (五) —文学への一つの道—」『あしかび (66)』、太陽社、2004 年 6 月
- 星加輝光「火野葦平『麦と兵隊』に対する同時代批評の考察」『河伯洞記念誌 あし
へい (3)』、創言社、2001 年 12 月
- 前田角蔵「日中戦争期の火野葦平 (下) —兵隊三部作を中心として—」『日本文学 32
(3)』、日本文学協会、1983 年 3 月
- 増田周子「火野葦平自筆日記翻刻 (大正十二年) 1」『関西大学文学論集 59 (4)』、

- 関西大学文学会、2010年3月
- 増田周子「火野葦平『画壁』考—『聊齋志異』との比較を中心として—」『国文学(95)』、関西大学国文学会、2011年2月
- 増田周子「火野葦平『鸚鵡変化』論—『阿英』(『聊齋志異』)との比較研究を通して—」『関西大学文学論集 60(4)』、関西大学文学会、2011年3月
- 増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究(5)』、関西大学文化交渉学教育研究拠点 ICIS、2012年2月
- 増田周子「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」『国文学(96)』、関西大学国文学会、2012年3月
- 増田周子「火野葦平『手』と水木しげる『河童の手』」『関西大学文学論集 64(4)』、関西大学文学会、2015年3月
- 増田渉『魯迅の印象』、角川書店、1970年12月
- 松本和也「事変下メディアのなかの火野葦平—芥川賞『糞尿譚』からベストセラー『麦と兵隊』へ—」『インテリジェンス(6)』、文生書院、2005年11月
- 松本和也「火野葦平『土と兵隊』の同時代的意義—日中戦争期における文学(者)の位置—」『立教大学日本文学(115巻)』、立教大学日本文学会、2016年1月
- 丸山昇『ある中国特派員 山上正義と魯迅』、中央公論社、1976年8月
- 丸山昇・丸尾常喜訳『魯迅全集 2』、学習研究社、1984年11月
- 三好達治『三好達治全集第六巻』、筑摩書房、1965年10月
- 三好行雄・竹盛天雄編『近代文学 7 戦後の文学』、有斐閣、1977年7月
- 三好行雄・竹盛天雄編『近代文学 6 昭和文学の実質』、有斐閣、1977年10月
- 村上林造「『土』論の系譜—近代日本精神史の一側面として—」『あしかび(33)』、太陽社、1987年12月
- 森鷗外『鷗外全集 第二十六巻』、岩波書店、1973年12月
- 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月
- 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月
- 矢富巖夫『火野葦平著作目録』、創言社、2004年12月
- 矢野貫一「戦後版『麦と兵隊』『土と兵隊』補訂に関する存疑」『無差(2)』、京都外国語大学日本語学科研究会、1995年3月

- 山岸郁子「火野葦平の公職追放仮指定に対する『異議申立書』と『証言』」『語文 (136)』、日本大学国文学会、2010年3月
- 吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、1965年10月
- 吉田熙生「戦争文学の思想—石川達三『生きている兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』など—」『国文学 解釈と教材の研究 20 (9)』、学灯社、1975年7月
- 吉野孝雄『文学報国会の時代』、河出書房新社、2008年2月
- 芳野敏章『若松今昔ものがたり』、西日本新聞社、1996年11月
- 吉見義明『草の根のファシズム』、東京大学出版会、1987年7月
- 吉本隆明『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月
- 歴史学研究会編『日本 同時代史 5 転換期の世界と日本』、青木書店、1991年1月
- 魯迅『魯迅全集 第一巻』、人民文学出版社、1981年
- 渡辺考『戦場で書く 火野葦平と従軍作家たち』、NHK出版、2015年10月
- 2013年11月と2016年5月、北九州市若松区の河伯洞にて玉井史太郎氏と面談。

初出一覧

各章の議論のベースになった、既公表論文の初出情報は以下の通りである。ただし、いずれの章においても、本論全体の流れに即して、多少の加筆修正を加えて再構成している。

第 1 章「火野葦平作品論及び作家論の系譜」、2018 年度日本近代文学会九州支部春季大会（平成 30 年 5 月 20 日、於鹿児島大学）にて口頭発表。

第 2 章「作家以前における火野葦平の庶民観」（原題「沖仲仕体験と上海出張—『火野葦平の見る中国人像』より—）、『河伯洞記念誌 あしへい（18）』、花書院、2015 年 12 月、94—98 頁。

第 3 章「火野葦平『糞尿譚』に見る魯迅『阿 Q 正伝』の影—彦太郎と阿 Q の場合—」、2017 年度日本近代文学会九州支部春季大会（平成 29 年 6 月 10 日、於山口大学）にて口頭発表。

第 4 章「火野葦平『麦と兵隊』論—戦争文学への一視点—」、「山口大学東アジア研究 16」、山口大学大学院東アジア研究科、2018 年 3 月、143—154 頁。

終章の第 2 節「葦平の『戦後』」（筆者と吉村誠の共著「火野葦平『羅生門』論—芥川龍之介『羅生門』の受容と改変—」から）、『研究論叢 68』、山口大学教育学部、2019 年 1 月、345—352 頁。

謝辞

本論文は筆者が山口大学大学院東アジア研究科教育開発コースに在籍中の研究成果をまとめたものです。本論の構成はもともと5章からなっていましたが、外部審査委員の方からいくつかの大切なご指摘を受け、第5章の「火野葦平『羅生門』論—芥川龍之介『羅生門』の受容と改変—」を削除し、本論の主題と関係している部分を終章の第2節にアレンジすることにしました。ご指摘を賜った外部審査委員に深くお礼申し上げます。

また、論文の執筆にあたり、多大なご指導、貴重なご意見をいただいた何名かの先生方にも、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

まず、同コース教授森下徹先生には指導教員としていろいろとお世話になりました。森下先生はご自身の研究でご多忙にもかかわらず、いつも貴重なお時間を割いてくださり、日本語力と研究能力が薄弱な筆者のことを捨てることなく最後まで熱心なご指導とご鞭撻を賜りました。心より深く感謝申し上げます。

また、同コース教授吉村誠先生、元同コース教授村上林造先生（途中で定年退職）、並びに同コース教授有元光彦先生には、副指導教員として、日々先行研究の解説に貴重な示唆と激励をいただくとともに、同研究科学位準備論文報告会と学位論文審査会の際にも、論文の細部にわたるご意見とご指摘をいただきました。あわせて感謝いたします。

最後に特に感謝したいのは、山東農業大学時代から付き合いはじめた叶楯夫先生と叶恵子先生ご夫婦です。同大学在学時に学んだ宮西和子先生（故人）のご縁から、叶先生ご夫婦（叶恵子先生は宮西先生の実姉）と出会い、その時から筆者の日本語の勉強と日本近代文学への理解を熱心に指導していただきました。京都外国語大学（2013年9月から2014年8月まで）と山口大学に留学している間に、叶先生ご夫妻はご足労を厭わず、わざわざ北海道の自宅から留学先まで来てくださり、日本の文化財・施設に筆者を連れて行って下さいました。異国への留学の大変さを理解し、精神的に温かく見守って下さったご夫婦でした。また、叶楯夫先生のおかげで、2013年11月23日、北九州市若松区の河伯洞にて葦平の三男である玉井史太郎氏とはじめて面談のチャンスを得ることができました。その際、葦平資料館の館長を

務めた坂口博氏も同席し、葦平の「兵隊三部作」に出てきた中国人像に関して、意見交換の機会を得ました。

先生方に対して、感謝の言葉がつきません。多くの方々と出会ったおかげで、日本文化への理解を深めることができました。ペンを置く前に、宮西和子先生と叶楯夫先生のご冥福をお祈りするとともに、森下徹先生をはじめとする諸先生方のご健康とご多幸を切に願います。